と父の定勝は一本まゐらせたつもりでほゝ笑んだ。

『それは何かの間違ひですね、だから近頃はその雜誌は評判が悪いですよ』

『ぢや議會ではどの邊が新人物だ』

『そんな者はゐませんよ、だいち議會なんてものは今の政黨なんかでは駄目ですよ。もう時代から遠く離れたもので、まあ名所舊跡のたぐひですよ』

父の定勝は若い爲雄の言葉に密に驚かされた。

『お父さん、病氣はどうですか』

『すつかり良くなつた、不思議だよ』

『つまり慾が離れると同時に病氣も離れたんですね』

『はゝゝゝ、さうかも知れん。しかし爲雄、そんな風では議會は困るぢやないか』

『今の若い者は議會、それは今の議會のことですよ、それに今の政黨なんか眼中に置きませんよ、まあ國技館と同樣のものでせう』

『だつて、そんなこと言つてゐたつて、みんな吾れ〳〵國民の生活を支配してゐるものだぜ』

『さうです、だから今はぢつと默つてゐますがね、みんな樣子を伺つて、或時期を待つてゐるんですな』と爲雄は本のページを音をたてゝ返した。

『或時期といふと？』

爲雄は父の方へどかりと寢返りを打つて答へた。

『さあ、明治維新がお爺さんの時代にありましたね、またそんな時代でも來るんですかね』

それで話はとぎれた。定勝の父（爲雄の祖父）は明治維新に遭遇した人であつた。子の定勝（爲雄の父）は思想の維新時代といふべき三宅雪嶺、德富蘇峰から島村抱月なんかによつて覺醒された人である。それで定勝の父と定勝との間は千萬里の隔りが出來て、同じ日本語を使つてゐながら、父は定勝の言葉を全然理解し得なかつた。そのために能くある新舊思想の衝突や葛藤やが父と子との間に絶えなかつた。定勝は三宅雪嶺、德富蘇峰、それから島村抱月と次第にそれ等によつて覺醒されたといふものゝ、自分自らは其時代の人間としては比較的に進歩してゐる者と信じてゐた。けれども彼れは永井柳太郎や中野正剛やを新人物としてゐる程度の新人でしかなかつた。

彼れは父との爭ひの絶えなかつた事からして、つくづくと考へた。時代は日々に進歩して行つて、古い者を後へ後へと取り殘して進む、自分でも時代に遲れてゐるつもりはないけれど、幹の爲雄なんかの時代が來れば、矢張り舊人物として、彼れと吾れとの間には千萬里の隔りが生ずるに相

違ないが、これは人力の到底如何んともすることの出來ないことだ、故にたゞ自分の心掛くべきことは、爲雄だちの思想に自分が遲れるのは仕方がないとして、せめては爲雄だちの思想を解し得られて、同情の出來るだけの理解力と包容力とを有する柔い自由な頭腦でありたいものだと、日頃から努力してゐるのだ。

それが、爲雄からいま現今の議會を否定し、來らんとする新時代を待つてゐることを聞かされたので、それを能く理解したいと頭を惱ましたけれど、爲雄の心持や保持してゐる思想がどんな物であるかは察することが出來ないので、心細く感じた。そして山寺の住職が、自分が下に埋られるまん丸い石が近く目つかりはしないかと不安の念に襲はれる氣持に、丁度いまの自分の心持が似てゐると思ふた。住職はそんな石が今つから目つかつては大變だと心配し出すと、きつと人知れずこつそりと川原へ行つて、そんな石がありはしないかと、自分で自分の死を急がせる石を探すやうに、おれも自分の石を探してゐるやうなものだと考へた。

「おまへのいま讀んでゐるのは何んだぇ」と定勝は悴の方を寢ながら覗いた。

「ツルゲネーフの處女地です」と爲雄は簡單に答へて讀みつゞけた。

「小說だな、おまへは法律を研究しないで、文學ばかりやつてゐるぢやないか」

爲雄は本をばたりと疊の上に置いて、起き上つて煙草を吸ひ、

「法律や經濟はそれのみを研究したつて、ほんとの事はわかりませんよ、人間が馬鹿になつてしまひます。文學によつて人間性つてものを知らなければ、人間の行爲を規定する法律や、人間の慾望から出た經濟やなんかをはんたうに解することは出來ないものです。醫者だつてさうですよ、人間の體をなほす醫術は先づ人間つてものを知らなきや駄目ですからね。そこへ行くと、お父さんなんかは醫者として感心の方だと思ひますね、相當に私の本箱から引つ張り出して讀むぢやありませんか」と言つた。

「おや〳〵、褒められて有りがたいね」と定勝は言つたけれども、內心は、子供に褒められるだけ、子供は自分よりも遙か高く深く進んで行つてゐるやうに思はれて、彼等の世界へはどうしても自分は行かれないのだといふ氣がして心細くなつた。

「一風呂はいつて來て寢ようよ」と定勝は悴を促して、下へ下りて行つた。

彼等は首つたけ湯の中に漬つた。

「綱紀肅正運動や尾崎の軍備縮少論なんかゞあつて、そろ〳〵時代も動いて來たぢやないか」と定勝はどうかして悴の世界へ飛び込みたくつて、こんなことを言つてみた。

『はゝゝあ、綱紀粛正なんかと言つたつて、あの顔振れぢや、何んにもなりませんよ。政友會政府を倒して、かはりに憲政會か、官僚かが天下を取つたつて、要するに同じことですよ。決して政黨人のまじつてゐるあんな運動に今の若い人達は仲間になんかなりませんよ、有志に曲學阿世の大學教授が出るんですからね。尾崎の軍備縮少なんかだつて、矢張り從來の頭の空虛な政治家の政論で、皮層な經濟的見地の範圍から一歩も出てゐないんですから、ほんたうに新時代の者なんか共鳴するもんですか』と爲雄は言つて、洗場に這ひ上つて窓から外を眺めた。

『お父さん、いゝ月ですぜ』

父の定勝も湯から出て、月の觀賞ならこつちのものだと、首を伸し、お尻を後へ突き出して月を眺めた。その時に入浴客が一人來た。相當の地位の紳士らしくみえた。

『いつも電信柱から出る月を眺めてゐる者には、山から出る月は珍らしいな』と定勝が言ふと、いま來た紳士が、

『さうしますと、あなた方は電信の方のお方ですな』とにこ〳〵して言つた。

(三)

彼等二人は山の上の湖水を見るとて、朝つから出かけた。父の定勝は『澁』を通る時に菓子屋から氷砂糖を買つて、

『山へ登る時にはこれを口に入れて置くといゝ』と言つて、大きな塊を悴の口の中へ押込んだ。彼等は谷川を渡つて、向ひ側に移り、少しく登つた高原のお茶屋に休み、野天に芦簾を周らした温泉に浴した。高山植物の石楠木が澤山にお茶屋の前にあつた。それから故寺崎廣業の別莊を見物した。父の忠勝は首を傾けて、

『あんなまづい繪を描いて、こんな御殿が出來るんだからな』と言つた。

彼等は高山を喘ぎ〳〵登つた。

『お父さん、その元氣ぢやもう大丈夫ですね』と爲雄は顧みて言つた。

樹木はだん〳〵少なくなつて、灌木だけになつた。それでも白樺の小さなのがひよろ〳〵と生へてゐる。白い瀧の見えるところで休んだ。二人はだまつて壯嚴の感に打たれて暫く眺めてゐた。父の忠勝は『父は明治維新に遭つた、おれは自然主義の思想の維新に遭つた、悴は第三の維新に遭ふのであらうか、第三の維新とは何んだ？』と瀧を見ながら考へた。

彼等は再び歩き出して、頂上に近い中腹を廻ると、驚嘆すべき景色に出あつた。それは日本海に

面した方が際涯なく眼界が擴がつた、その前方の遙か西北に當つて、古事記に書かれた滄溟に浮ぶ天の浮橋とも云ふべき、白く濛々たる雲霧の間に藍色の連山が浮き出てゐることである。

『やあ』と爲雄は絶叫した。

『妙高山かな、春日山かな、まるで海の中に突き出てゐる岬のやうだ、いや妙高山ではなく、直江津の先の西頸城の岬かなあ』と忠勝は言つた。

『あれは海でせうよ』

『よくわからないな、夢のやうな感じがする』

彼等は頂上の湖水に來た。物の音が一つしない、靜寂といふのは此事でもあるのか、風一つ吹かず、湖水は漣一つ寄らない、月夜の晩のやうだ。父も子も聲を出すことを恐れた。足音すらも立てないやうに拔足した。二人は言ひ合さないけれども、互に姿の見えないほどに別れて、ほんとの孤獨の中に立つた。小鳥の聲さへもしない。勿論、人間も一人だつて通らない。忠勝は草の上に腰を下して水面を見つめてゐた。彼れは何を考へようとも思はないが、自然と或考へに頭が走つて行つた。

……父の時代と爲雄の時代との中間に立つてゐるのがおれの時代だ、丁度、目を醒したが、醒め切らないといふのがおれの時代だ、或は境界に立つ人とでも言ふべきだか。おれの父は、絶對の

權利があり、子は絶對に親に服從しなければならなかつた。親は親たらなくとも子は子たらなくてはならぬとて、子に孝行を強いたものだ。子の自由を少しも認めない、……………………

……………………、……………………、……………………

……………………、……………………。……………………

……………………。……………………、……………………

……………………。けれども父の時代は、一般にさうであつたから、親のために泣いた子はまた親となつて子を泣かせることが出來た。

然るにおれの時代になつてはどうだ、もう今迄のやうに親風を吹かすことが出來なくなつた。親は親、子は子で、如何に親といへども子の自由を束縛することが出來ない、子が進んで親に孝養をつくすのは良いが、親の方から子に向つて孝養を強いる氣持にはなれ得なくなつた。むしろ親は、子供をこの世に産み出したからには、その子供を教育すべき情愛と義務とがある。報酬を求めない義務がある。子に對する親の義務は實に海よりも深く山よりも高いのだ。出來得るかぎりの力を盡して子供を愛し、良くしてやらねばならぬが、子供からして何物をも求める權利は無いのだ。おれは、子としては父に孝養をつくさねばならなかつた、今はそれと同じことを爲雄から行つてもらふ

ことが出來ない、却つておれが爲雄のために彼れに全身を献けて仕へねばならぬのだ。實におれは片務的の境界に立つたのだ。……力のあるかぎりその生命のために盡してやらねばならぬ。おれはおれを愛さなかつた父に盡す恩があり、子に盡す義務がある割の悪い時代に產れたのだ。けれども「子に對する親の義務」をおれが知つたのは時代のおかげである。父の時代は父で終つた。吾れ〳〵は別の時代を作つたが、それから更に新しい時代が產れた。それは爲雄だちの時代であるのだ。その時代は父へ向つた義務が子へ向ふ時代だ……人の足音がしたので、忠勝は面を上げて見ると、そこには爲雄が立つてゐた。

『お父さん、歸りませうよ』

『爲雄、おまへ、東京へ歸りたくなつたらいつ歸つてもいゝぞ』と父の定勝は愚愛の目を以て爲雄を見、出來るだけのことを爲雄のためにしてやらうと決心した。

かう考へた彼は心が爽かになつた。彼れは下り阪をどん〳〵と下りながら、足で石ころを蹴飛ばしたりなどした。

『お父さんは馬鹿に元氣が出たもんだなあ』と爲雄は笑つた。

父と子とはその翌日は地獄谷へ遊び行つた。谷川の上流を流れに沿ふて登るのである。

『お父さん、かうして自然と接して、人に接しない生活もたまにはいゝですね、學校騒動なんてことは馬鹿々々しくなりましたよ』と爲雄は言つた。

『しかしその渦中に身を投ずると、またそのやうな氣持に同化されるもんだよ。けれども前よりか幾分の進歩を來さなくては、今のお前の否定が何んの役にも立たなくなる』と定勝は言つて、河原に飛び下りた。

(四)

ごう〳〵と河原の中から非常な勢で蒸氣を噴出してゐる所へ出た。そばへ行くと、その音に消されて、他の音はせず、話聲なんかさつぱりわからない。

『えらい勢ひのもんだなあ』と爲雄は嚴肅な顏色をして立つてゐる。

二人はお茶屋の二階に上つて休んだ。

『此處の溫泉の側に、卵がゆだるやうな熱い熱湯が湧き出る所があるぞ、湯へ入つて來る内に、ゆで卵が出來てゐるから……』と定勝は言つた。

父と子とが温泉から上つて來ると、大きな鉢にゆで卵が盛られて、小さな皿に鹽が添ひてあつた。彼等は熱い卵をむしや〳〵食つては茶をがぶ〳〵呑んだ。ごう〳〵といふ凄じい音は依然として聞えてゐた。爲雄が先づ話をしかけた。

『あの音は止む時がないんでせうか』

『まあ無いだらうな』

『人間だつたら、直ぐ聲か枯れてしまふな』

それから爲雄は言葉の調子を變へて、

『お父さん』と呼んだ。

『何んだえ』

『どうです、毎日あくせくして働いてゐないで、半年に一度ぐらゐは斯ういふ所へ來ることにしては……、神經衰弱を起すほど働いたつてしやうが無いぢやありませんか』

父の定勝は親指の爪で卵の殼を剝ぎ取りながら、

『さうよ、今度からさういふ事にするかな』と言つた。

『お父さんは一たい何んのために働くんですか、お金を取るためですか。人をたすけるためなん

ですか』と爲雄は眞面目とじやうだんとの曖昧な態度で問ふた。

『さうだな、人をたすけるためだと言へや聞いたとこは良いが、まあ實はお金のためだな』

『お金を取つてどうしますね』

父は目を見開いて子の顏を見て、

『家族を養はねばならんぢやないか、おまへにだつて相當な教育をさせた上に、多少の財産は殘して置かねばならんぢやないか、おれがいま死んで見ろ、どうなると思ふ?』と言つた。

爲雄はびよこりと頭を一つ下げて、口の中へ一ぱいに卵を入れてあるのを急いで呑み込んで、

『それは思召はありがたいですが、家族を養つたり、私に教育をさせて下すつたりするのは、是非さうして頂かねばなりませんけれど、私は考へますには、……、……、……。だから人のためだなんてことはよしらどうです。家族のためだと言つて、神經衰弱になるほど働くのは間違つてゐますよ。それぢやあなたの此世に存在してゐる意義がないといふものです。先づ何よりも自分を大切にして、自分が生き、自分が樂しまねばなりませんね。あなたは生命保險をどつさり掛けて置けば、死んだ後

の遺族はそれで食つて行かれますよ。まあ私はお父さんに、半年に一度ぐらゐづゝは斯うして遊び歩いて、自分の生活をすることをお勧めいたします。……、他人に迷惑をかけないやうにして……』と言つた。

父の忠勝はいら〳〵した様子になつて、

『だつて、おれはお前に出來るだけのことをしてやらねば、親としての義務が濟まないと思ふからね』と言つた。

『お父さん、それはそのま心は涙の出るほど、實際、私は有りがたく思つてゐます。しかし、最も子供に對して最愛の親のなすべき態度は、自由放任ですね、遠くから親愛の眼を以て見つめてゐるところの自由放任ですね。若い生命には干渉が一ばん惡いです、若い生命は自然のまゝにして置けば、最も能く生長するものです。お父さん、どうか遠くから保護をしてゐてください、そして私を自由に放して置いてください。それが私の切實なお願ひです。私が困つた時には忠實な親友として救つてください、それだけで充分です。その方が能く私を生長させることが出來るのですから……』と爲雄は眼に涙を浮べて言つた。

『よし〳〵能くわかつた、さうだ、さうに違ひない。しかしとかく人の親といふものは子供を干

渉したがるものだ、やあ、有りがたう』と言つて、定勝は暫くの間は面を上げることが出來なかつた。

二人はお茶屋を出て、河に沿ふて下つた。彼等は後になり、先になりして、何事かを考へ〳〵歩いてゐたが、爲雄が不意に、

『お父さん、ね、お母さんも斯うふふところへ來るといゝがな、明日わたしは歸つて、かはりにお母さんをよこしませうか』と言つた。

『おまへは歸りたけりや歸つてもよいが、お母さんは來られまいよ、後が困るからな』

『なあに大丈夫ですよ、あとは私が監督します』

『さうか』

これも散歩に出たものらしい若い男女の二人連れに、彼等は追ひついた。男の方は特長のあるところと言へば鼻眼鏡くらゐなものだが、女の方は混血兒かと思はれるやうな容貌で、目が大きくて瞳の奥が深く、鼻が猶太人の鼻のやうな格好で、背が高い。そして兩方の耳を隠すとて、ペンギン鳥の翅のやうに髪を結ふてゐる。定勝は最初は夫婦かと思ふてゐたが、二人の容貌がどこか似たところがあり、彼等の様子などから推すと、どうも兄弟らしいのである。爲雄は彼等二人と直ぐ言葉を

かはし、見る〳〵内に親しくなつたらしいので、父の定勝は自分が容易に人と親しみ得ない性分に反した爲雄の性格を、母親似かな、などと考へた。

(五)

爲雄は夕飯を食ふと、どこかへ默つて出かけて行つたので、定勝は按摩を呼んだ。彼れは按摩に揉まれながら、爲雄が机の上に置いて行つた本を取つて見てゐた。それはモオパツサン全集である。彼れはモオパツサンと言へば單に性慾を描寫したもので、徒に挑發的のものであつて、若い人々の讀むべきものではないと考へてゐたのが、斯うして讀んで行つて見ると、人間の性の奥に潜んでゐる人間の生命といふやうなものを把握して、それを性を通して人々に深刻に味得せしめるといふ風なところがあると思つた。按摩が去ると、行き違ひに爲雄が歸つて來た。彼れはまだすはらない内に父に聲をかけた。

『お父さん、僕は明日の朝歸ります、連れが出來ましたからね、一しよに行くことにしました。すぐお母さんをよこしますよ。あの今日、道で逢つたでせう、男と女の人に、あれは駒澤新町の方の人でしてね、兄弟なんですよ。學校の話をしたら、大いにおやりなさいと言つてくれました

よ。それに郊外は素敵にいゝさうですから、遊び行くつと約束しました』と語つた。

彼れの若い生命は小鳥のごとく動いて來てゐるのを定勝は見て、あの珍しい女に爲雄が注目して來てゐるなと考へた。爲雄はごろりと寢ころんで、兩手を組んで額の上に乘せた。

『おい、爲雄、おまへは妻帶問題を考へたことがあるか』

『そりやありますね』

『親の選擇にまかせるつもりか、おまへ自身、勝手に選擇するつもりか』

『はゝゝあ、私は選擇なんかしませんね、たゞ機會ある毎に女と交際してゐますだけですよ。交際してゐる内に自然と戀が成立してから後に、その氣になつたら妻帶問題が生ずるてわけですね。妻帶問題よりか先づ戀愛問題が先きですよ』

『すると全然親の世話は借りなくつていゝんだな』

『そりや、私一人の手においないやうな場合には加勢を賴みますよ』

『おや〳〵、おまへのしもべといふ役柄だね』

『敢てさういふわけぢや無いですよ』

『おまへ達は幸福だよ、お父さんなんかはお端さんが頑固でな、夫婦は戀愛抜きで親が成立させ

てやらねばならぬのだ、戀愛は不義で、不義はお家の法度といふわけだ。……

……「……」……

『ぢやお父さんとお母さんの仲は戀愛から成つた夫婦ぢやなかつたんですか、どうもさうとは見えませんがね』

『それは戀愛から成つた夫婦さ、しかし舊時代と闘ふといふ大困難があつてな、暫くは勘當の身の上で泣いたよ』

『さうですかね』

『お前はどうか自由に生活してくれ』

定勝はモオパッサン全集を爲雄の方へ押しやつてから。

『佛蘭西の裁判はいゝな、法律萬能でなくて。……』

『はゝゝゝ、お父さん讀んだですね。しかし私は……奴の心持が能くわかりませんね』

爲雄は父を横眼で見て言つた。

『それはお前にはわかるまい、が、おれには能くわかる。お前には舊時代と新時代との中におれ

達が介在してゐるからな。おれ達は直接に舊時代の中から苦しんで出て新時代を作つたのだからな。兎に角おれ達はお前といふ新芽を萠え出させた溫床となつたのだ。どうか自由に伸びてくれ。おれ達は受難者であつた、お前たちは惠まれた者だ』と忠勝は言つた。

彼等二人は湯に入つて來て寢た。翌朝になると、爲雄はそは〳〵して歸り仕度をした。その内に前の方に自動車がとまると、若い男と若い女とが交代に。

『三浦君……三浦さん　と爲雄を呼んだ。

『ぢや、お父さん、御機嫌よう』と爲雄はバスケット一つ持つて出て行つた。

定勝は表二階の方へ廻つて、障子戸を細目にあけて往來を見おろした。昨日の若い男女が乘合自動車に乘つて前に待つてゐる。爲雄が出ると、若い女は「につ」とほゝ笑んだ。混血兒の目のやうな目が輝いてゐる。ぼう〳〵と音を立てゝ自動車は若い男女三人を乘せて、定勝を一人殘して立ち去つた。花やかな春のやうな笑聲が聞える。殘された父の定勝は暫くそこに立ちつくしてゐたが、胸には嫉妬と寂しさとが殘つた。しかし口の中に囁きとなつて出たものは『若き生命よ、自由に伸びてくれ』といふ言葉であつた。

第九篇　持參金づきの妻

（一）

白井良吉は妻を連れて家を飛び出して東京へ來た。彼れの產れた町だけでも調べて見ると、時代の一つの現象を示してゐた。教育を受けたしつかりした青年は多くは二つの道を選ぶよりほかに方法がなかつた。親が早く死んだ者は父の事業を受け繼いで、それを一そう發展せしめて、町の有力者の一人となつた。親が達者で能く働いてゐる家の悴は放蕩に身を持ち崩すか、親の家を飛び出すかであつた。良吉の家は後者の一例で、父親はまだ盛んであつて、營業に精を出す上に、市會議員を勤めてゐるので、良吉は鬱勃たる內面の英氣と新智識の經倫とを抱いて、空しく帳場にすはつて器械的に舊式な事務を執つてゐるよりほかに仕方がなかつたのだ。彼れは二十四歲になり、十九歲の妻を娶つて貰ひ、一歲の赤坊があるが、母親は、經驗の無い若い者に子供を取扱はしては殺してしまふと言つて、嫁から子供を取り上げてしまつたので、良吉若夫婦は平和な退屈に苦しめられて、相談の結果、手に手をとつて東京へ駈落ときめ込んだのである。

彼れは知り合ひの基督敎信者の世話によつて、その橫向ひに當る建築舖の表二階を借間して住んだ。彼れは家から資本を取り寄せて何か商賣を始めるか、或はサラリーマンになるかの孰れかを選

ふつもりで、先づ父との和解をして資本を引出さうとしたけれども、父は、夫婦になれずに駈落するのならわかつてゐるけれど、夫婦になつて子までなしてゐながら駈落とは腑に落ちないと、その激怒は容易に納まらないために資本どころの話ではなかつた。それで第二の方法としてその基督教信者の周旋で、毎日或製糖會社の事務所へ通ふことになつた。

彼等の住んでゐる二階の窓からは眞直に九段の大鳥居が見え、目の下には丁字形の辻に交番がある。良吉は日曜日は天氣が好ければ妻と町を出たら目に歩くを樂しみとし、雨の日にはその窓から街の雜踏をあかず眺めることにしてゐた。そして交番の巡査の行動を仔細に觀察して、その面白いのに驚いた。塵取と掃木とを持出して交番の前を掃き、バケツに水を汲んで來て交番の中を拭いたりする巡査を見て珍らしく感じた。或時は子守女や子供を澤山あつめて來て、からかつてゐる巡査も見た。傍の柳の樹に向つて竹刀を奮つて鞍馬山の牛若丸のやうなことをしてゐる巡査を見た。夜の十二時すぎになると、前の往還を洋刀をがちやゝゝと音をさせて駈足してゐたり、または靴で交番の中の床板をこつゝゝと踏んで拍子をとりながら「春は嬉しや、ふたり揃ふて花見の宴」なんかと端唄を謠つたり、犬を五六匹も寄せ集めて喧嘩をさせたり、酔拂を押へて長いあひだ立ちながら議論を闘はしたりして、時間を過し、寒さを忘れようとしたりするのを、良吉は妻と二人で顔を見合

せ、肩をすくめて聲を出さずに笑ひ、『巡査も人間だよ』と思へば、非常に親しさを感じて、お茶でも差上げたいやうな氣が起きるのである。彼等夫婦が冬の寒い時など、夜おそく芝居から歸つて來て、換氣法のため窓の戸をからりと開いて寢床を敷くのを、下の方から見上げて『あァあ』と歎聲らしいあくびをする巡査を見る時は、氣の毒に感じて、實に吾れ〳〵のために御苦勞のことだと尊いやうな氣持になることがある。

良吉が或雨降りの日曜日に例のごとく窓から通りを眺めてゐると、交番の巡査は栗を小さな火鉢の中で燒いてはかぢつてゐた。良吉はそれを暫く見てゐたが、それに飽きたので、二三軒となりの音樂練習教授のメロデー社とかいふ所から響いてくるぎい！〳〵いふ鋸の目立てのやうなヴァイオリンの音に耳を傾けまいとして、窓の下を見おろすと、隣の家の軒下に、下女に連れられた十五六歳の令嬢風の少女が口をぽかんと開いて、交番の方を向いてはゐるが、その眼は何處を見るともなくすはつてゐる不思議な者を認めた。彼れはその少女の顏から目を離すことが出來なかつた。體の割合に顏が大きくて、そのまん中には所謂希臘型の大きな鼻があり、目も大きく、白眼は青味を帶びて、大きな黑眼はあくまで黑く、口も大きく、唇は眞赤で厚くて肉感的で、外へ反り返つてゐる。頰は豐かにふくれて、顏の全體の格好は面長で、一たいの線が柔かく丸く大きく、昔の歌舞伎の女

形の舞臺顔を思はせる。しかし彼女の眼が異樣に良吉の心をひきつけた。

大きな黑い眼球は隨分と奥深く見えるけれども、その底の方には何んにも無く、通り抜けのやうな感じがし、そして瞳に何んの光も力もなく、恍惚として夢の境にあるものゝやうに思はれる。暫く見てゐるけれども、たまにしか緩かに瞬きをするのみであつた。どうもそれが神祕的にも感じられるし、また白痴ではないかとも疑はれた。しかし最も彼れの心、といふよりも肉體を陶醉せしむるほどに誘惑したものは、彼女の容貌から來る全的に發散する蛇のごとき淫蕩の匂ひである。まだ十四五歳であらうけれども、既に淫奔の血が體にかけめぐつて彼女自身を惱ましてゐはせぬかと思はれるやうな所が見える。男性の血をあくまでも吸ひとつても吸ひとつても飽き足りないといふやうな蠱惑的な力が彼れを襲ふて來ることである。彼れは萬事を忘れて少女に見とれてゐた。女中が耳に口をつけて何か言ひさとすやうであつたが、彼女は合點々々をして、良吉のゐる家と隣の家との路次に入つて行つてしまつた。

彼れは彼女がどこの娘だらうかと考へた。彼れにはそれが反對の方角の窓から見える裏の家の處のやうな氣がした。すると『あの男の娘だな』と思ふや、彼れの眼には毎朝のやうに彼れと後か先かになつて神保町の停留場から同方向の電車に乘る某私立學校の教師の姿が目に浮かんだのである

その教師といふのは痩せてひよろ〳〵した、糸瓜の干したやうな感じのする男で、中折の窪みの手でつまむ所が摺れて光つてゐる茶色の帽子を被り、皺になつたカーキ色の外套を着て、紫のモスリンの風呂敷包を抱へ、洋傘を持つて首を前にのばして、脚を彎曲させ、毎日學校へ通勤してゐるのだ。この男は今迄の生活に疲れ切つたが、だと言つて休息することも出來ず、此後とも何んの希望もなく、現在の陰慘な生活を死ぬまで續けて行かねばならぬのかといふやうな絶望的な目をして、ほんやりと電車の吊り皮につかまつて、五月の鯉幟のやうに搖られてゐる。良吉はあの奇怪と妖艶とを感ずる美しい白痴らしい娘の親はきつとあの教師で、あの娘のために全部の血を吸ひとられてゐるのではないかと、途方もない想像を逞しうしたりした。

彼れはそれに引續いて、裏の家の二階座敷から、夜の十時すぎになると、あくびが五分間おきくらゐに『あアあ、あアあ』と二三十も續けて聞えるので、そのあくびをする者があの娘か、またはあの娘の母たらうかと考へた。しかしどうもあくびの聲が子供らしくないから、或はあの娘の母かもしれないとも思ふた。そのあくびといふのが、怠屈であつたり、または眠かつたりするために出るあくびでは無いらしく、丁度それは、お金でも澤山に拾つて悅んでゐるのに、それが夢であつたのでおや〳〵と思ふやうなあくびに感じられるのだ。今夜もきつと聞えるに違ひないと良吉は考へ

たら、うんざりした。しかしあの少女だけはいま一度見たいものだと思つた。

(二)

次の日曜日のことだが、散歩に出ようとしてゐると、前の往來を頻に自働車がぼう〳〵と音をたて〻行つたり來たりし、人の叫ぶ聲がしたりするので、良吉は耳を澄して聞いてゐると、自働車が何臺も何臺も通り、喧嘩でもしてゐるやうな叫び聲がするので、これは只事ではないと、窓の障子を開いて覗いて見ると、自働車に六七人も積め込まれて運び去られるその後姿が見えただけで、自働車はそのまゝで形を見せなかつたが、そのかはり良吉の目に映つたのは、いつも電車で一しよになる朝鮮人の明治大學生が正服のまゝ、帽子のない頭の髪を振り亂し、二人の行通巡査に兩腕を抱へられ、地から持ち上げられるやうにして運ばれてゐる光景であつた。朝鮮人は亢奮して眞赤な顏をして、大きな聲で、

『朝鮮人だつて人間だ』と悲痛な叫びをあげた。

これを見た良吉は、誠に一般朝鮮人に對して申譯がないやうな氣がして、『どうか宥してくれ』と心の中で言つた。彼れは下へ下りて行つて、

『どうしたんです』と問ふたら、

建築師の娘で、父親が嚴重なので、十七歳になる今日まで、まだ活動寫眞を知らぬといふのが、

『朝鮮の學生さん達があの會堂で寄り集つてゐたのを、巡査が片つはじから自働車で警察署へ運んでゐるんですのよ、可哀さうですわね』と敎へた。

彼れは學生が人類や國家のために血を流した露西亞文學の小說の一場面を思ひ出した。そして夜中にこつそりと『春は嬉しいや、ふたり揃ふて』と謠ふ可憐な善良な巡査と、この學生をからめとる巡査とがどうも同じ人間だとは考へられなかつた。

彼れは何氣なしに、建築師の娘の傍に立ちながら首をのばして外を見ると、大きな洋傘を深くさして泥の中をびしよ〳〵と歩いて來る洋服姿の男があつた。いつの間にか雨が降つてゐたのだ。彼れはその男の姿を見て、直ぐそれが裏の家の住人である敎師だといふことを知つた。彼れは敎師が日曜にも別な學校へ勤めてゐることを妻から聞かされてゐたので、今はそこからの戻りだなと思つた。敎師は先週あの不思議な少女が入つて行つた路次に姿を消した。良吉はとん〳〵と階子段を駈け上つて、しほり染をしてゐる妻に、

『おい、雨が降つてゐるから散歩はやめにして、市村座へ立見にでも行かうよ』と言つた。

『さうね』と妻は言つたゞけで、カタン糸で白いモスリンをくゝつてゐる。

『いやか』と彼れは問ふた。

『なにを見るの』

『菊五郎の京人形を……』

『行つてもいゝわ』

『行つてもいゝわぢや心細いね、おい、裏の内の娘は美人だな』

『だけれど、馬鹿なんですつて、あの姉の方ですか、妹の方ですか』

『どつちだか知らんが、おれの見たのは十五六歳だつたよ』

『さう、すりやきつと妹の方よ、姉はほか美人ですつて、それも矢つ張り馬鹿だと言ひますわ』

良吉は兩手を差上げてあくびをすると、裏の家から犬のきやん〳〵と鳴く聲と共に、ぎやあ〳〵と二人の女が泣き叫ぶ聲とがけたたましく聞えて來た。良吉と妻とは目を丸くして互に顏を見合せ、その方の窓を開いて覗いて見たが、何んにも見えない。その内に、若い聲の方のぎやあ〳〵といふ叫び聲が今度は家の外から響いて來て、それが表の往來の方へ移つて行くので、彼等夫婦は今度は急いで表通りの交番の見える方の窓から覗いて見た。すると十八九歳の娘がはだしのまゝ何も被ら

ず、雨と泥との中を白い脚に赤い裳裾を出し、九段の方を指して、交番の前を通り、兵士の駈足のやうな步調で喚きながら走つて行つた。從來の人々や近所の人達はみんなその方を驚いて見送り、中にはその跡を追ふ者もある。良吉には後姿だけしか見えなかつたけれども、その女は大柄な美しい娘だと思はれて、確にあの奇怪な少女の姉に違ひないと考へた。

その内にあの奇怪の少女を守りしてゐた下女が交番へ走つて行つて、何か巡査に言ふと、朝鮮の學生で一騒ぎやつて、やれ〳〵と腰を落ちつけて休息してゐた巡査はまたもや立上り、洋刀の鞘を左の手に押へながら、女が駈けて行つた方へ駈足で走つて行つた。

『押へに行つたんですね』と妻は言つた。

『あの女はきつと、あの馬鹿な娘の姉だよ』

『さうよ、きつと、馬鹿の上に氣ちがひなんですね』

『さあどうかな』と良吉は言つてから、

『おい、早く支度をしろ』と芝居行の催促をした。

(三)

翌日になつて、良吉が會社から歸つて來ると、洋服を和服に着かへさせるのも待ち遠しいといふ風で、妻は彼れに問題の裏の家の様子を、

『下のおかみさんからくはしく聞きましたわ』と言つて語り出した。

裏の教師はまだ中學校の先生をしてゐた頃、五萬圓の持參金づきのお嫁さんを貰つたのである。それが今の細君であつて、產れつきの白痴で、朝から晩まであくびをしてゐるのが仕事ぐらゐのものである。家は群馬縣で、親は財產家であるが、大酒呑であつた爲にその娘が白痴となり、遂に五萬圓づきの賣物となつたのを、彼れは金に目が暮れて、その白痴の娘と五萬圓とを貰つた。そのかはり洋行も出來、私立大學の教授にまでもなり得たのである。彼等の間には二人の女の子が出來たが、二人とも白痴であつて、つまり三人の白痴の守を教師はせねばならなかつた。今年姉は十八歳になり、妹は十六歳である。

良吉はこの話を聞かされて、教師自身は自業自得だけれども、白痴となつてこの世に存在せしめられた子供こそいゝ迷惑だと思ふた。彼れは、

『しかし今度は、娘につけて貰るその五萬圓が無いてわけだな、はゝゝ』と皮肉に笑つた。

それから思ひついたやうに、

「そこで昨日の騷ぎはどうしたんだつて……』と妻の顏を見て問ふと、妻はちらつと良吉の顏を見返したが、つと良吉の膝に顏を伏せて、

「呆れ返つた話で、言はれはしませんわ』と言つて身を顫動させた、

『何んだ、何んだ』と良吉は好奇心が起きて、妻の柔かな肩を突いて促した。

妻は首を上げ、ほつれた鬢を小指で搔き撫でゝ、

『あの旦那が歸つて見ると、……、……、……、……。……

……。……、……? もうそれを見た父親は氣違ひのやうになつて、娘と奥さんとを棒で毆つたんですつて』と妻は言つて面を赤らめて、再び良吉の膝に顏を隱した。

『むう』と良吉は唸き聲を漏らして、

『あゝあ、親の因果が子に報いだ』と歎息した。

そして先日見た妹の方の容貌から推すと、姉の方も美人に違ひない。ことによると、妹を年頃にしたやうなのかも知れぬと、彼れは思ふや、あの淫蕩と妖艶さとを感ぜしめる容貌が目に浮かんで、たまらない淫猥な心になつて、ふと『持參金がなくともいゝから……』といふやうな妖魔的な心になつて行く自分に、ぞつと身慄へがした。

彼れはそんな考へから離れるつもりで、洗湯に行く氣になり、シャボンと手拭とを持つて外へ出て行つた。彼れが風呂屋の戸を開けると、脫衣場から湯上りのてか〳〵した顏をして下駄のある土間の方へ下りようとする男に出會つた。見ると、先週、交通巡査に運ばれながら『朝鮮人だつて人間だ』と叫んだ朝鮮の學生であつて、額に二三ヶ所のかすり傷がある顏に憤りが含んでゐるらしく、良吉には感じられ、それが自分のせいでもあるかの如くに思はれたので、心の中で『勘辨してくれろ』と頭を下げたい氣持になり、敬意を表して彼れをやり過してから脫衣場に上つた。そして『親の不心得が生命を白痴の人間として存在せしめる、あゝ、それは恐ろしいことだ』と思ひながら着物をぬいだ。

第十篇　父の意志と子の運命

（一）

俊作は、酒井が咎めるやうな目をして、じろ〳〵と足から頭まで見上げ、見おろしながら、

『若様、どちらですか』と問ふたのを、

『一寸と散歩に……』とごまかして、ぶらりと外に出たことは出たが、どこへ行かうといふ當ては無いのである。彼れはたゞ内にゐるのが不愉快なので、着のみ着のまゝで飛び出したのでしかない。彼れは電車通りに活ふて三宅坂まで來ると、無意識に、停車してゐる電車に乘つて銀座まで運ばれ尾張町で下りた。表通を歩き廻つてしまつてから、今度は小路々々を突つき歩いたが、それにも飽きた上に大ぶ疲れたので、數寄屋橋の袂にある小公園へ行つてベンチにでも腰をかけて、休まうかと考へたが、そこまで行くのでさへもいやになつた。ふと氣がつくと、理髪床があつたので、そこへ何氣なしにつうと入つた。

『いらつしやい』と二三人の若いハイカラの頭をして白い着物を着てゐる者が威勢よくどなつたので、びつくりして逃げ出さうかと思ふたが、その時は既にスリッパを突つかけてゐたので、側の長椅子にどかりと早く腰をおろして、兩手でぺろりと顔を撫でた。

『旦那、こちらへ』と、前の方の毛だけを櫛のやうに突つ立てた頭をした四角の顔の男が言つたので、彼れは理髪臺の上におつかなびつくりで體を移した。そして前の姿見に寫つてゐる自分の顔を見た。

秋月家では家庭内に理髪屋を呼び入れて理髪をさせることになつてゐるので、俊作は床屋の姿見の前に立つことは滅多にないのである。『いよう、變つた所で對面しますなあ』と彼れは彼れの姿に心の中で話をしかけた。

『どう致しますか』と床屋はぼんやりしてゐる彼れを覺醒させるやうな聲で、またもどなつた。

『短く』と彼れは驚いた拍子に出たら目に言つてしまつた。

それから彼れは再び姿見の中の自分の姿を眺めた。そして『おれの顔はなるほど父にも母にも似てゐないな』とつく〴〵と觀察に耽つた。冷いバリカンが頭に觸れて、ざくり〳〵と毛を切る音に心地よく、半眠半醒の中に、自分が家を飛出して來た行きかゝりのごた〳〵を彼れは追想した。一昨日、父と衝突したことを考へた。

『おい、俊作、あなたは飛山の初枝を妻に迎へなさい』と父が言つた。

『私は何んの精神上の交渉もない女と結婚するのは御免を蒙ります』と俊作は言つた。

すると父は直ぐ怒り出して、

『あなたは父の言葉に背くのですか、不孝者め』と叫んだ。

『お父様が妻を迎へるのではありませんよ、私が妻を迎へるのですよ、私が妻を迎へるのは、私の運命の將來に關係することです。お父様の意志のために私の一生涯の運命が支配されねばならぬといふ道理はございません』と彼れが言ひ返すと、父は冷靜な態度に返つて、

『子は親の意志に從ふべきものだ、なぜならば子は親が產んだのだから……。親といふものは子の運命の好かれといふことをのみ願つて、何事もしてゐるものだ。子はたゞ親の言葉に從つてさへ居ればよいのだ』と言つた。

けれど、俊作は其時は、この言葉のごとく、親は子のためを考へてゐてくれるものと信じてゐたので、この父の言葉をすなほに受け入れてゐたが、今日になつて、それがすつかり崩れてしまつた。そして彼れは人の親といふものに對して滿腔の憤りが起り、反逆の念が湧いたのである。

彼れが今日の朝ぶら〳〵裏庭を散步して、裏木戸から顏を外に出すと、車夫のやうな見知らぬ男が一通の書面を彼れに渡して、逃げるやうに走つて姿を消してまつた。彼れは手紙の表を見ると、秋月俊作樣としてあり、裏を返して見ると、其處には何んにも書いてない。けれども書體は女の手

であるので、彼れは變な氣がした。それは上女中のお菊といふのが彼れに妙な素振りをしたことが あつたのを思出したからである。彼れは胸を轟かして急いで封を切つて讀み出した。

……その内にあなたのお父様は、あなたに飛山の初枝といふ娘を妻にせよと仰せられなさるべく候、されど〳〵飛山の初枝といふ女は耳が遠くて、言葉もろくに話せない女に候、そのために三萬圓の持參金づきになつてゐる女に候、あなたのお父様はいろ〳〵の事業に手を出して失敗なされ候ため、その急場の困難を凌ぐために、あの成金の飛山の三萬圓づきの片輪娘をあなた様に娶合せようともくろみなされたのに候、それをもしあなたが御存じないとすれば、あんまりあなたがお氣の毒ゆえ、お知らせいたし申候……

これが重要な文句であつて、終りの方へ以て行つて、「あなたを世界中で一ばん愛する者より」としてあり、また「それが誰であるかをお知りになりたいなら、婆やに聞いて御覽あそばせ」と認めてあつたのである。そして猶ほ「あなた様の將來のためにだまつて見てはゐられませんから、お知らせいたすので、ほかに他意があるわけではございません」とも附け足してあつた。

彼れはこの手紙を讀んだので、昨日の父の言葉がみんな僞りであつたのかと、驚き呆れずにはゐられなかつたのである。父は『親は子の運命の好かれといふことを願つて何事もしてゐるのだ』と言

つたが、實は父は、子の運命なんかを考へないのみか、自分の都合のために子の運命を犧牲にすることを何んとも思つてゐないぢやないか、自分の子が片輪の女を妻にする不幸を父自らが手を下して行ふのではないか、といふことが、俊作には能くわかつた。彼れは、

『父の勝手な意志のために子は一生涯の運命を支配されねばならぬといふ道理があらうか、そして父の意志に從はない時には、父から不孝者めといふ「人の子」として最も重罪とするところの名を着せられねばならぬものだらうか』と憤ろしい疑ひの心に惱まされた。

それからまた彼れは、飛山の初枝の親の心もけしからぬ考へであると思つた。三萬圓持參金づきは丁度まずい物を黄金の瓶に入れて賣るやうなもので、買ふ人は中身はまずいけれど、瓶が黄金だから買ふのであるから、買つた後には、中身は食はないで捨てることになる。自分の娘を賣品のごとくに取扱ふ親の心が知れないし、また持參金に目を暮れて片輪を妻にするやうな奴はろくな者ではなく、またそれを悖に貰はせる家の親もろくな者ではないのに、そんな家の親や婿に自分の可愛い娘をやるといふ親心の馬鹿なのに呆れた。娘を嫁にやる時に、後で困るやうな場合に何かの役に立つようにとて、鏡臺の中へこつそりと三萬圓を忍ばせてやるのなら、その親心の有りがたさがわかるが、三萬圓の金で娘を賣るといふことは人間といふものを汚してゐること、成金飛山なるもの

愚劣な奴であることに、俊作は憤慨させられた。それから三萬圓を鏡臺の中に忍ばせるといふ名案は自分の獨創かと思つてゐたのに、何かの教科書で讀んだ昔話であつたことを思出して苦笑した。

しかしながら俊作の腹のどん底までも掻き亂したことは、その匿名の手紙に『あなた樣を世界中で一ばん愛する者より、……それが誰れであるかを知りたいなら婆やに聞いて御覽なさい』といふ謎のやうな文句である。彼れはそれを自分に惚れてゐる女……戀人ではないかと思つた。すると誰だらうかと、空間に若い女の顏が幾つも描き出して見たが、どうも當がつかぬ。そんならあの女かしらと、例の小間使であつた女の顏を思ひ浮べて見た。しかしその顏からは不快な感じを覺えただけで、あんな者がおれを世界中で一ばん愛してゐるものかと打消した。そこで聞いて見るが早道だと氣がついて、女中部屋でたゞ一人、居ねむりをしながら古着の解き物をしてゐた、前代から勤めてゐる婆やのところへ飛んで行つて、その手紙を讀み聞かせた後、それが誰であるかを聞かしてくれと願つた。

『知らぬが佛で、若樣にそんなことをお知らせしないでゐた方がよかつたのになあ、あゝあ』と老婆は歎息した。

それは飛山の娘が啞であるといふことを知らせたことではなくて『あなた樣を世界中で一ばん愛す

る者』云々といふ文句のあることであるのだ。

『もう斯うなつては何もかも、一そのこと正直にぶちまけてお知らせした方が却て良いかも知りません』と老婆は眼に涙を浮かめて、ひそ〳〵聲で俊作に語つて聞かせたのである。

(二)

俊作の父も俊作の年頃であつた時に、他に望んでゐた戀人があつたのが、頑固な父の命令で、先妻をいや〳〵ながら娶つたのである。またその先妻も他に命をもと約束し合つた男があつたのだ。それを無理に引き裂かれて俊作の父へ嫁いで來たので、そのため彼女は俊作の父を嫌ひとほした。俊作の父だつて自暴自棄から妻を少しも顧みず、盛んに女狂ひをやつてゐた。こんなやうな具合だものだから、先妻は空虛な寂しい生活をしてゐねばならなかつた。そこへ燃え立つたのが抱え自働車運轉手との不義の戀の焰であつた。遂にその運轉手と、彼等社會に時々行はれたやうに、驅落してしまつたのである。今では何處かで運轉手と寂しく暮らしてゐるといふ話であるが、その先妻が俊作を世界中で一ばん愛してゐるといふ、その手紙の主であるのだとのことだ。

『だつて、お父樣の先の妻が私を一ばん愛するつてのは變ぢやないか』と俊作が怪しむと、老婆

は躊躇してゐたが、

『それはあなた様のお母様でゐらつしやるんですもの』と言つた。

既に老婆の話なかばから或豫感のために戰いてゐた俊作は、この言葉を聞かされると、すつかり打ちのめされてしまつた。やがて氣がついて見ると、自分は書齋に引つ込んで机の上に泣き伏してゐたのである。彼れは今の今まで、父の今の妻をほんたうの自分の母だとばかり思つてゐたのである。彼れは靜にいろ〳〵のことを考へて見た。父が自分で愛しもしない妻に俊作を產ませたといふことも、命をもと約束した男から無理に裂かれた女が自分の愛しもしない男によつて「父の子俊作」を產んだといふことも、彼れには少しも理解し得られない。互に愛し合はないで、愛する者は他にある身で、どうしてその嫌ひ合つてゐる同志が子供だけは作つたのかと、それが如何にも不思議な現象に見えてならぬのである。そして彼等男女がそのために一人の人間たる俊作をこの世に存在せしめるといふことを少しも恐しいことだとも何んとも考へてゐないらしかつたことが、俊作には腹が立つてならぬ。彼れは、母が父を捨てゝ自働車の運轉手と逃げ去つたことは理解もされ、同情も出來るのである。また母親の無い子となる俊作のことを考へもせずに捨てゝ去つた心も、愛さない男の種でそれがあるから、俊作なんかに愛着がなかつたのだと思へば、それも理解し、同情も出來

た。然るに手紙に『あなた様を世界中で一ばん愛する者より』といふ文句を見ると、それがさつぱりわからなくなつて來るのだ。子を捨てゝ運轉手と逃げた女の口からどうし　そんな手紙の文句が出るものか、俊作には不思議でならぬのだ。

父は『親は子の運命の好かれといふことのみを願つて何事もなすのだ』と言つたが、自分の愛さない女を妻とし、また自分を愛さない妻との中に子供を作つて、それを冷い家庭に置くことが、どうして子供の運命を好かれとのみ思ふ親心の持主の行爲であらうか、遂には自分は他の女に心を傾け、妻は他の男と逃げ去つて、子供は寂しい家庭にひねくれて育つやうな羽目になる運命の中にこのおれを產み出すといふことが、どうして親心と言はれようかと、俊作は親の手前勝手な振舞を憤らざるを得なかつた。彼れは自分といふものが單に男女の情慾の戲れのためにこの世の中に存在せしめられたのに、其子は自分自身の運命を負ふて、五十年の人生を單に戲れでなく、實際に自身で暮らして行かねばならぬことを考へて、親の無責任が怨めしくなつた。

彼れは、要するに必要なくして此世に產れて　た者であつて、この家にとつても必要ではない者なのだ、今の母の子の利彦が兩親の愛の中に產れ、育てられて來た者で、この家に存在してゐてもよい人間なのだ、おれはこの家にゐない方がよいのだ、おれは兎に角もうこんな不愉快なところに

住んでゐることはいやだ。この上父の失敗の尻拭ひの道具に使はれて、お爲ごかしに片輪の女を妻にして、第二のおれのやうな子を產んだり、啞の子を作つたりしては、その子に申譯がないと考へたの、、ぶらりと夢病者のごとき狀態で家を迷ひ出たのであつた。

（三）

俊作は頭が輕くなつて、すが〳〵しくなつたので、理髮床から出て又も小路々々をぶら〳〵して新橋の方へ歩いて行つた。彼はもう家へ歸る氣は起らない、だと言つて芝居や小說にあるやうに、見ぬ母をたづねて諸國をさすらふ心も無い。世界中で一ばん愛するなんかと言つたつて當てになるものか、……愛があれば自動車の運轉手と逃げ出す時におれを捨てゝ行く筈がないぢやないかと俊作は思つてゐる。まだ、……、……、……、……、……。

彼れは格子戸の綺麗に研かれた、簾だれを下げた、氣のきいた家の並んでゐる路次に出た。彼れはこれが藝者のゐる町だなと思ふた。簾だれ越しに覗いて見ると、中形の浴衣を着流し、裾から赤い腰卷や白い脚などを見せてゐる若い女などが見えるので、頬をほうと赤くし、胸をわく〳〵させて、早く其處を通り過ぎようとして足を早めたが、矢張り見たいので、隙間からちよい〳〵と覗いて見たりした。軒下に立つて一軒の格子戸から覗き込んで見ると、十五六歲ぐらゐの可愛らしい女が上りがまちにぐにや〳〵とすはり込んで、しく〳〵泣いてゐる。彼れは其時に妙に體中の血が湧き返つて、その女の肉體に吸ひ寄せられるやうな氣がした。そしてふと氣がついて、おれのやうなのが所謂不良少年とやらではないだらうか、お廻りさんに押へられて新聞に名前が出るのではないかと思ふと、急に恐しくなつて其處を駈け出ようとしたが、女がしく〳〵と泣いてゐるのが、可哀さうでもあり、氣持が好くありするので、どうしても其處から離れることが出來なかつた。それでぼんやりと立つて見てゐると、女は袖で覆ふた眼を袖の隙間から出して、俊作の方を怪しむかの如く見上げた。彼れはその目を見ると、その目から何物かを訴ふるやうな、やるせないやうな、押し迫つた情が湧いて來るので、蛇に見込まれたやうな、何んとも言へない陶醉的の氣分が體全體に駈けめぐるやうな感じがして、思はず、

『姉や、どうしたの？』と聲をかけて見た。

女は泣くのをやめて眺めてゐたが、この聲を聞くと、口をぽかんと開いて俊作をぢろ〳〵と見廻した。そしてまた目を下へ落して、しやくり上げて泣いた。

『よ、どうしたつての、叱られて？』と俊作は再び聲をかけた。

女も再び彼れを見上げたが、上品な身元の良いところの若樣らしい姿の青年なので、怪しい者では無いと思ふたかして、少しく恥かしさうに體にしなを作つて、

『あたし内へ歸りたいのよ』と言つた。

『ぢや歸りやいゝぢやないの』

『そんな氣儘なことは出來なくつてよ』と女はまた泣き出した。

『あ、さうか、僕は知つてゐるよ、この家にお金で買はれて來てゐるんだらう、そんなこと僕だつて知つてゐるよ、お金を拂つて身受とかすりやいゝんだらう？』

女は身をもじつて泣きじやくりしてゐる。俊作は格子戸をからりと開いて土間に立ち、

『ごめんなさい』と大きな聲を出した。

女はあつけにとられて、泣くことをやめて、涙に濡れた目で彼れをぽかんとして見てゐる。簾垂れ

の奥からぬつと小ぶとりにふとつた四十歳くらゐの脂ぎつた赤ら顏の男が立ち現れて、

『何御用ですか』と不審さうに問ふた。

俊作は直立不動の姿勢を取つて、

『私は麴町區三番町の秋月利定といふ者の長男俊作といふ者です。こゝにゐる婦人を身受けしたいのですが、如何ほどお拂ひしたら宜しいのですか、それが承りたいのです』と淀みもなく口上を述べ立てた。

これを聞いた男は奥の方を振り向いて、

『おい〳〵』と呼んだ。

それは『珍しい見世物が來たぜ、出て見ないかえ』といふ調子であつた。

『なあに』と女の聲がして、皺くちやの老婆が出て來た。

俊作はその婆々の面を見て、その面と今の女の聲とはどうしても同一人間ではないやうに思はれ、この社會はみんな斯うだらうかと考へた。

『何んですつて？』と男は、いま一べん口上を述べて見ろと秋作に言ふやうに問ひ返した。

『私は麴町三番町の秋月利定といふ者の長男俊作です、こゝにゐる婦人を身受けしたいのですが、

如何ほどお拂ひしたら宜しいのですか、それを承りたいのです』と俊作は同じことを繰り返して婆々の方を見た。

『まあ、秋月さんの若樣でゐらつしやいますか』と老婆は驚いて、男の方を向いて、

『秋月の若樣ですよ』と言つた。

『あ　さ　か』と男は言つたけれども、まだ腑に落ちないやうな顏をしてゐる、

『まあ、お上りなすつてくだいまし』と老婆は小氣味の惡いほど愛嬌を振りまいた。

俊作は父がどうしてこんな所までその名が知られてゐるのか、大に發展してゐるせいなんだらうかなどと考へてゐると、婆さんの『まあ、お上りなすつてくださいまし』といふ言葉に出つくはして、大にあわてゝしまつた。

『いえ、こゝで、こゝで澤山です、如何ほどお拂ひすれば宜しいのですか』と彼れは突つ立つたまゝ言つた。その樣子は『斷じて上らないぞ』といふ風に見えた。

男と老婆とは顏を引込ませて、何かひそ〳〵相談をしてゐたが、男が再び現れて、

『まあ、さうですな、一千圓いたゞきやせう、現金でなくちや……』と言ふと、

『では後程もつて參りまかすから、この場合、どうかこの婦人を大切に保護をして置いてくださ

い』と俊作は言つ放して、ぷいつと外へ飛び出した。

そして彼れは尾張町で人形町行の電車に乘つて、茅場町で下りて、兜町の方へ行き、交番で、

『石塚の店はどの邊ですか』と聞いた。

彼れはそれでも可成りまごついてから、やつと石塚株式店を探し當てゝ、

『次郎兵衛どんはゐますか』と聲をかけた。

若い店員が變な顏をして、

『へえ、どなたですか』と問ひ返へた。

『秋月の俊作です』

小さな小僧が向ひの店へ横つ飛びに飛んで行くと、直ぐ一人の分別くさい二十六七歳の男が小走りに出て來て、

『よう、若樣ですか、どうしてまあ』と言つた。

それが次郎兵衛どんであつた、彼れは俊作の樣子を頭の上から足の先まで目で測量してから、やう〳〵にこ〳〵と笑ひ出した。

『君、後で親爺に言つてもよいのだ、お金を一千五十圓ばり貸してくれ』と俊作は言つて、左の

手を掌を上へ向けて差出した。

『へえ？　場合によつては差上げても宜しうございますが、一たい何んになさるのですか』

『藝者を身受けするんだよ』

『御じやうだんでせう』

『ほんたうだよ』

『いつそんなこと覺えなさいました？』

『今、……僕がね、今日銀座の裏の方を散歩してゐたらね、綺麗な女が泣いてゐた、どうしたのかと問ふたら、内へ歸りたいつてんだ、歸つたらいゝぢやないかと言つたら、買はれた身だから自由には出來ないと言ふんだ、そこの主人に談判したら、一千圓よこせといふんだ、五十圓はその女にやるんだ、内へ歸る旅費にだよ、

『なるほど、わかりました』と五郎兵衛どんは名前の如く分別くさく兩腕を組んで、

『若樣、あなたはその女を身受けして、どうなさらうと仰しやるんです』と問ふた。

『いま言つたぢやないか、あの女の内へ歸らせるのだよ』

『へえ、たゞそれだけでいゝのですか』

『たゞそれだけ？　だつて、それでいゝんだらう？　ほかに何かしてやらなけりやならぬのか、旅費を五十圓やるんだぜ？』

『なるほど、な』と次郎兵衛どんは感心したやうに首を時計の振子の如く振り、

『そこで、その藝者屋は何と言ひますか』と俊作の顏を見て問ふた。

『それは知らん、聲と面と一しよにならんやうな薄氣味の悪い婆さんと四十くらゐのいやな男がゐたよ。それから秋月と言つたら、大變にお愛嬌を振り蒔いたところを見ると、親爺が行く所かも知れないぜ』と俊作が言ふと、次郎兵衛どんは驚いたやうに、ほんと手を叩いて、

『はゝゝあ、いやわかりました、實に妙です、因緣ですな、ようがす、わかりました、さあ參りませう』と言つて店の帳場で何やらがちやつかせてゐたが、紹の羽織を引つかけて、

『さあ、お供いたします』と言つて、茅場町から新宿行の電車に乘つた。

次郎兵衛どんは俊作の案内も待たずに、ぐん〳〵歩いて、最前の藝者屋の前へ來ると、

『こゝでせう？』と俊作に聞いて、彼れがうなづくと、

『若樣、あなたは暫く外でお待ちを願ひます、入つてはいけませんよ、なるべく遠くへ行つてゐらつしやい、私がその女を連れて出て來ますから……』と言つて、格子戸を開いて、だまつて中

へつか〳〵と入つて行つた。

泣いてゐた女はもう其處にはゐなかつた。俊作はあちらこちらと歩いて時間を潰した。時々ほか〳〵家の中からいろ〳〵の顔した女が俊作を見に出た。小一時間も面倒な談判があつたらしかつたが、格子戸の開くを見ると、次郎兵衛どんが、泣いてゐた例の女を連れて出て來た。女の樣子を見ると、旅をするといふ風も見えない姿をしてゐた。

『さあ、若樣、お受取を願ひます、また何か御相談がありましたら、いつでもお出でください』と言つて、さつさと行つてしまつた。

女と俊作とは道のまん中に居殘された。戸の隙間から人々が覗いて見てゐるやうな氣がするので、俊作は歩き出した。女もその後から歩いた。

『君の內はどこ？』と彼れは女に問ふた。

『沼津の在なの』と女は下を向いて小さい聲で答へた。

俊作は足を早めて歩いた。そして新橋驛の中へ入つて行つた。

『君、旅費はあるのかね』と彼れは女に問ふた。

『え、今のお方から十圓もらひましたわ』

『なに、たつた十圓か』と俊作は言つたが、自分の手元には十五圓ほどしかないので、十圓もあつたら足りないことはなからうと考へなほした。

『そんならお連者で……』と言ふや否や、その女を後に殘して、彼れはどん〳〵銀座の方へ駈け戻つた。

(四)

それから四五日すぎると、東京の新聞は通信社から廻つて行つた次のやうな意味の記事を社會欄に掲げてゐ。

「又も華族の子の家出、藝者を身受して逃亡した不良少年」といふやうな大きな見出しで、麴町三番町の某子爵の長男俊作(一九)なる者は前々から新橋の舞鶴屋抱へ米花(一六)と馴染を重ねてゐたが、去三日かねて父が關係してゐる兜町の石塚株式店を欺いて、一千五十圓の大金を借り込み、米花を受け出し、そのまゝ二人は手に手をとつて何處へか姿を隱してしまつた。子爵邸から捜索願が出たので、其筋では目下探索中だけれども、未だ行方がわからないといふのである。

そして此新聞は特種として、この不良少年の俊作は子爵の先妻の子である。先妻といふのは自働

車の抱へ運轉手と密通して駈落をし、今では高崎で同棲してゐるから、俊作は或は母のところへ逃げて行つて婆を隱してゐるのかも知れないといふので、其方へも手が廻つてゐるが、どうも立ち寄つた形跡がないとのことであると記してあつた。しかし其日の夕刊には、高輪警察署の某刑事が他の事件で管内の宿屋を調べたら、一人の素性の賤しくない二十歳ほどの若者が二三日前から花形屋旅館に泊つてゐるのを怪しみ、取調べたら、例の俊作であることが判明したので、警察へ連れて來て說諭を加へて歸宅するやうにしたといふ記事が出てゐた。

俊作は事實その通りに高輪警察署に留置されて親元から引取りに來る間に、署長の親切から出た取調に對して、藝妓身受の一件を正直に言つたので、署長も驚いて、徒に不良少年の名を被らせたことを悔いた。

『私をどうしようといふのですか』と俊作は之れが一ばん氣にかゝつたので、隙を見て問ふた。

『どうつて、お屋敷から迎へが來るのを待つてから、あなたを渡すだけです。親御樣にあまり心配を掛けないが宜しいです』と署長は飛び出た目を開いて言つた。

『私を親元へ引渡しなさつても、私はまた内を飛び出します』と俊作は言つた。

署長の顏は險しく變つて來て、

『そんなことをすれば、それこそほんたうの不良少年とみなされて、監獄へ入れられなけりやならぬ』とおどかして、そんなにことをさせまいとした。

すると俊作は肩を聳かして、

「内にゐるくらゐなら、監獄へ入れられた方が餘つ程いゝです』と答へた。

これを見た署長は、それには深い家庭の事情があるものと考へて、その理由を問ひたゞしたけれども、俊作は口をつぐんで一言も其事に關してはしやべらなかつた。署長もそれほどの祕密を白狀させるにも及ぶまいと考へなほして、その事は斷念した。彼れは署長の親切だけは感じてゐるので、暫くしてから、つと首を上げ、顏を眞赤に染めて早口で激情を制しながら言つた。

『私は不良少年かも知れません、しかしそれは、あたりまへの事かと思ひます。不良な男と女が不良な關係で產んだ子ですもの、不良少年になるのにちつとも不思議はありません。親がもし私が不良少年のために苦しむなら、それは自業自得といふものです。……』と言ひ終らぬ内に、涙がこみ上げて來たと見えて、下を向いてだまつてしまつた。

署長は氣の毒さうな目をして彼れを上の方から見おろしてゐた。

第十一篇　「放火犯の女」の子

（二）

秋も末の北國としては、今日は珍しい好いお天氣だ。幸吉は『天長節だから天氣かいゝのだ』と思ふた。天井張りも二階もない、大きな丸太の梁が縱横に組んである、煤けて黑い屋根裏の見える「茶の間」の壁にはさつと高窓からさしてゐる四角の形の日光を見ると、彼は思はず聲高に天長節の唱歌を謠ひ出すと、養父が少し鼻にかゝる聲で、

『馬鹿野郎』とどなりつけたので、びつくりしてぴたりと止めた。

家の中で口笛を吹いたり、歌を謠つたりすることは禁じられてあることに、彼は氣がついたからである。

『早く庭を掃け』との養父の言葉に、彼れは、

『はい』と答へて箒木を持出して、店から「茶の間」へと通じてゐる「通りの間」の所謂「庭」と稱するところを店の方から掃いたが、ふと氣がついて外へ出て見た。

近所の家の軒にはみんな國旗が揭げられて、景氣よくひら〳〵と翻つてゐるのに、自分の家だけは揭げられてないので、彼れは家の中に飛び込んで、

『お父さん、國旗を立てませうか』と言つた。

『いらんことを言はんで、貴樣は貴樣の仕事をしろ』と養父は言つた。

『だつて、天長節ですもの』

『なまいきぬかすな』と養父の叱り聲に、彼ればだまつて「茶の間」の土間の方を掃いた。

彼れは如何にも心外でならぬのだ。「侍といふものは忠義なもんだのに、どうして天皇陛下の御誕生を祝さないのだらうか』と思ひながら、なげしに掛けてある、もと養父が馬乘の前にたてさせたといふ三間柄の十文字の槍を見上げて「もとは侍だと今でも威張りくさつてゐながら……』と心に罵つた。その時不意に、

『その掃き方はなんだ』と頭の天上から降りかゝつたので、彼れはあわてゝ箒木に力を入れた。養父は土間に下りて幸吉から箒木を奪ひ取つて、土砂までも掃くように力を込めて掃いた。幸吉は『そんなに力を入れて掃いては穴があくのに……』と思ひながら、横を向いてゐた。

それを認めた養父はかつと怒りを發して、

『馬鹿野郎』と大喝一聲して彼れの頭を箒木でぴしやりと毆りつけた。

幸吉の目と口とには砂が入つた。彼れは目をこすりながら心の中で『いくら親だつて人の頭を箒木で

毆るつて法があるか』と叫んだ。

やがて「茶の間」に膳が三つ並んだ。脚のついた高い一つの膳は養父のである。幸吉と養母とは低い膳に向つて、養父の早くすはるのを待つた。養父は神棚や其他の天地四方に向つて朝の禮拜をなしてゐるのだ。幸吉は、養父が「高天原に……』と言ひ出して『……かしこみ〳〵申す」と申上げるのを、膝に手を置きながらもどかしげに眺めてゐる。彼れは八角時計を見上げた。午前八時三十分である。學校の祝賀式に行くのが遲くなりさうだのにと、彼れは氣がもめてならぬので、父のすること爲すことが癪に障る。『天長節に國旗もたてないやうな不忠義者が神樣にいくらかしこみ〳〵申すなんかと言つたつて、何んになるもんか』と心に罵つた。

それから、自分と養母とが斯うやつて待つてゐるところを見ると、隣の犬が「おあづけ」をされてゐるやうなものだと思つた彼れは、なさけなくなつた。また彼れは、お父さんは『男の子を育てるには白い齒を見せてはならぬ』と言つたか、『白い齒を見せないといふことは何んのことだらうか、笑顏を見せないといふことなのだらうか』など〻考へてゐた。

幸吉は學校の歸りに實家へ寄つた。店にゐる繼父の眼に觸れないやうにそつと寢間へ入つた。祖母が赤くたゞれた眼をしよぼ〳〵させて針仕事をしてゐた。

「お婆さん、なんか』と鼻聲で、何か食ふ物をねだつた。

祖母の顏はうるさげに見えたが、目には愛着をこめて孫を見返り、新聞紙で張つた仕事箱の隅から粉菓子を出して、

『早く歸れや』と言つた。

幸吉は尖り聲を出して、

『いやだ、いやだ、箒木で人の頭なんか殴つたりするもん』とぐづねた。

『おまへが言ふことをきかんからさ……』と祖母は言つて、糸のさきを嘗めてひねつては針の穴に通さうとして苦心してゐる。

幸吉は菓子を喰ひおはると、表二階へ上つた。そこには繼父の長男や弟どもが遊んでゐた。近所の料理屋の娘もゐた。娘は幸吉を見ると、直ぐ隣の部屋へ連れて行つた。弟どもは戸の隙間から覗いて見て、

『とくちやと兄ちやと嚊親爺』と大きな聲で囃し立てた。

幸吉は飛び出して來て、繼父の長男にあたる弟の横顏をがんと殴りつけた。繼父の長男は、

『兄ちやが叩いたあ』と泣きながら下へ下りた。

すると間も無く、繼父の長い體が見えて、幸吉の尻をうんとつねつた。幸吉は思ひさま大きな聲でわつと泣き立て、

『なんだ、なんだ、炭燒野郎、出て行け、出て行け、おれはな、てめえよりか先へ此家に產れたんもんだぞ、てめえはおれよりか後で、婿に來やがつた土百姓ぢやないか、おれが此家の大將なんだ、出て行け、たつたいま出て行きやがれ』と罵つた。

『この野郎』と繼父は青い顏をして怒り出し、今度は幸吉の耳を持つて小突き廻し、頰桁をうんと張り飛ばした。

幸吉はひい〳〵と泣き喚き、祖母の部屋へ下りて行つた。そこへ實母が出て來て、

『おまへが富を殴つたりするから……』と言つて、涙をほろ〳〵流しながら、幸吉の耳の切れて血のにじんでゐるところへ袂から袂糞を出して付けてやつた。

祖母は南無阿彌陀佛を唱へて、胸の中のむしやくしやを押へてゐた。

『幸吉や、早く下町へ歸らつしやい』と實母は優しく言つた。

彼れは投出した兩脚でばた〳〵と疊を叩いて、

『いやだ、いやだ、耳が痛いから泊るんだえ』と駄々をこねた。

すると實母は急に鬼々しい顏をして、白い眼を出し、冷かな調子で、

『どうでも勝手にしろ、親にばつかり心配をかけやがつてな、不孝者め。「おまへさん達が甘やかすから幸吉が下町へ歸ることをいやがるんだ」と、おまへのお蔭でおらは下町のお母さんに怨まれんけりやならん』と憎々しげに言ひ捨てゝ臺所の方へ行つた。

『因果な子だ』と祖母は獨語のやうに呟いて、また念佛を申した。

これを聞いた幸吉は『その因果の子に誰がした』といふ意味の憤りが無意識の間に起つて、無暗に涙がこぼれ『えゝ、どうでもなれ』と心の中で叫んで、やけに障子をぴり〳〵と破つた。すると急にお尻が痛くなつたので、考へて見たら、祖母がものさしでお尻を毆つたのである。

『なんだ、この糞婆々あ』と幸吉はどなつて、ごろりと引つ繰り返り、わあ〳〵と泣いた。

臺所では膳を並べる音がして、

『みんな御膳だぜ』と實母は呼んだ。

幸吉は織父が店から飯を食ひに來ると思ふたから、泣聲を止めた。祖母は『どつこいしよ』と言ひながら立つて行つた。幸吉は祖母のなま暖かな座布團の上に上り込んで、織物の切れを鋏で刻み始めた。臺所の方からは子供たちの聲で、

『下町の兄ちや歸つたかえ』

『辰がおれのさかなをとつたあ』などゝ叫ぶ音がする。

織父は喉に啖でもからまつたやうな咳拂をしてゐる。味噌汁の香がぷんと幸吉の鼻を打つた。彼れは最前の實母が言つた「親不孝」といふ言葉に就て考へた。……おれのしてゐることは親不孝ださうだが、親の言ふことをきかないのが親不孝なのかしら、なぜ親の言ふことをきかないのが「親不孝」なのだらうか、親不孝つては惡いことだと先生は言つた、どうして親不孝は惡いのだ。おれは親の言ふことでもきくことといやなものはいやだ、おれがきかれるやうな事を親の方で言へば、おれは親の言ふことを聞く、さうすればおれば親孝行になれるんだ、つまり親がおれを親不孝にするんぢやないか、親は自分の好きでおれを親不孝にして、そしてせつながつてゐる。……こゝまで考へて來ると、祖母か御飯と香の物とを持つて來てくれた。彼れは矢張りお婆さんだけがおれを可愛がつてゐるんだと思つて、有りがたかつた。

『こら、飯粒が落ちてゐるぞ』と織父が子供を叱る聲がしたので、幸吉は首を引つ込めた。

(二)

幸吉はがや〳〵とやかましい音がするので、ふと眼が醒めた。彼れは自分が實家に泊つたことに氣がついた。弟どもはみんな學校へ行つたと見えて、奥の方はひつそりとして靜かであるが、やかましい音は店へ近鄕近在の百姓が酒を立ち呑みに來て、わあ〳〵と言ひ合つてゐるせいなのだ。彼れは寢間と「茶の間」との間の襖の透いてゐるところから「茶の間」の方を布團の襟から見た。「茶の間」のまん中には高窓からさつとさしてゐる日光の中に蠅がダンスをしたり、互に衝突したりしてゐる。彼れは起き上つて「茶の間」に出て、店とのしきりの暖簾の下から店を覗いた。暗くなるほど客が入り込んでゐるのを見て、世の中からの除け者が世の中といふものを眺めてゐるやうな氣がした。すると彼れは、學校を休んだこと、下町の家へは歸らなかつたこと、遲くまで寢てゐたこと、自分ひとりぼつちにさせられたことなどが思はれて、寂しい不安な心になつて涙が知らず〳〵頰を流れた。其時彼れの眼には、死んだ祖父の白い髯のある顏が浮んだ。ぢつと眼鏡ごしに幸吉を見おろしてゐる祖父の老眼には『因果な可哀さうな子だ』と言つてゐるやうに見えた。と同時に、昨日の祖母の『因果な子』だと歎息した聲をもしみ〴〵と感じられた。彼れは、實父、繼父、養父、實母

養母、祖父、祖母の七人の親がみんな寄つてたかつつておれを可哀さうな人間にしたのだといふやうな氣がした。彼れの目に浮んだ祖父の眼は次第に險しくなつて來て「親不孝め」と言ふやうに見えて來た。幸吉はぢつとそれを見つめてゐると、祖父の顏がいつの間にか大きな龜甲の看板に變つた。龜甲の看板はこの家の酒の看板で、離緣になつた「幸吉の實父」が旅先から買つて來たのであつて、祖父がその甲羅のまん中に「酒」といふ金文字を入れさせて軒に掲げて置くのである。

がらりと外の戸が開いて、「茶の間」の土間に入つた者があるので、幸吉は障子の穴から覗いて見ると、そこには少しく亢奮してゐる養母の赤ら顏が見えた。彼れは驚いて、胸をどき〳〵させながら寢間へ飛び込んで布團の中へむぐつた。そして『誰れが歸るもんか』と心に言つた。暫くすると聲高に言ひ合ふ聲が「茶の間」からするので、幸吉は耳をたて〻聞いた。

姉さんやお婆さんが甘い顏を見せるから幸吉がい〻氣になつて歸らないんだあね』と金切聲で言つてゐるのは彼れを迎へに下町から來た養母である。

『おらもさう思ふけれど……』とおど〳〵して言つたのは祖母である。

『それぢや幸吉のためにならん』とみんなを叱りつけるやうに言つたのは矢張り養母である。

『もう幸吉が來たつて誰が上げるもんか、宿無し子になつたつて、おら知らんから』と怒り聲を

して言つたのは養母の姉である實母である。

『姉さん、幸吉は學校へ行つたのかえ』とやがて聲をおとなしくして問ふたのは養母である。

『いゝや、そこだ』と顎で廊間をさしたやうな言ひ方をしたのは實母である。

幸吉は養母に踏み込まれては大變だと思つて、布團から拔け出て、そつと裏の土藏の中へ駈け込んだ。約一時間も靜に潜んでゐた後にむく〳〵と動き出し、大工道具の眼鏡のこはれたのやなどを持込んで何か造り始めた。そこへ實母が藥品を出しに來た。彼女の顏には　しやうのない子だ』といふ憂はしい色が見えた。幸吉は『なぜ親といふものはみんなおれを見る時にへんな顏ばかりするんだらう？』と思ふた。

『何をこしらふのだ』實母は問ふた。

『寫眞の器械をこしらふんだ』と幸吉は答へた。

『富にもこしらつてやつてくれ』と實母は言ひ捨てゝ出て行つた。

『富』といふのは幸吉の弟で、繼父と實母との間に出來た繼父の長男であるのだ。幸吉は腹の中で『矢張りお母さんもおれよりか富の方を可愛がつてゐるんだ』と思ふた。そして『誰がこしらへてなんかやゐもんか』と反抗した。彼れは土藏から出て表二階へ行つて見た。もう弟どもは學校か

ら歸つて來てゐた。例の料理屋の娘も來てゐたが、彼女は幸吉を見るや、またも彼れを押へて、

『幸ちやん、いゝ眼か惡い眼か見てやろか、茶色の眼がいゝんだよ』と言つて、幸吉を仰向に寢かせて、其上に上り、眼を見るふりして、體を押し付けながら彼れの唇を吸つた。

(三)

『幸吉や』と祖母が呼ぶので、彼れは表二階から下へおりて行つて見ると、「茶の間」に貞作といふ小さな體を持つた色の白い男が來てゐた。この男は小學教員で、以前この家に子僧をしてゐたことがあるので、今でも出入をしてゐるのだ。幸吉は先生がゐるので、ぎよつと驚いて着物の前を合せなほして、圍爐裏を隔てゝすはつてゐる祖母の傍にくつ付いて膝を折つた。

『幸吉さん、なぜおまへさんは親不孝をするんだね。下町のお父さんに頼まれて私は來たんだが、おまへさんは少しも親の言ふことを聞かす、ぢき家を飛出して此處へ來るさうぢやないか。人間は親不孝といふことが一ばん惡いんだよ。親不孝をする人間なんかは決してろくな目には遭はんぜ』と貞作は重々しく言つた。

彼れは心の中で『ろくな目に遭はんでもいゝや』と言ふたが、叱られるのでだまつてゐた。

『なぜだまつてゐるんだね』と貞作は彼れをうながした。

彼れは、どう返事をすればいゝかわからないのだ。しかし親不孝といふものが恐しいものゝやうにも感じられるので、少しく不安であつた。

『親を可哀さうだと思はないかね』と貞作は彼れの返事を迫るやうに問ふた。

彼れは『おれを可哀さうだとは思はないのか』と反問したくなつたが、それは言はないで、

『親つては誰れのことですか』と、下を向いたまゝ問ふて見た。

貞作は突飛な質問に會つて、一寸と返事に閊へたが、首を前にのばして、

『親つて、わからないのか、下町のお父さんやお母さん、それから此家のお父さんやお母さんのことだよ』と言つた。

彼れは首を上げて貞作の顏をまともに見て、

『ぢや、その人達みんなに孝行しろなんて、いやなことです』ときつぱりと言つた。

『そりあ何んてことだ。え、そりや何んてことだ、まるで話にならん』と貞作は途方にくれたやうに、ひきかへるの如く前方を見た。

『おれは下町のお母さんと此處のお婆さんを可哀さうと思ふだけで、あとの人なんかちつとも可

哀さうでなんか無いや』と幸吉は泣き聲を押へて言つて、涙を落すまいとして、ぢつと疊の目を見つめたが、だん〳〵に曇つて來た。

貞作は引つかゝりを得たので、勢ひづいて、

『ぢやなぜ、その下町のお母さんや此處のお婆さんに心配をかけるんだね』と再び問ふた。

傍でだまつて聞いてゐた老婆はもう我慢ができず、ぽろ切れを出して涙を拭いてゐた。

『だつて、そらあ下町のお父さんが惡いんだもの、おれを可愛らないで叱つてばつかりゐるから、おらあ下町へ歸ることなんかいやだ』と幸吉は言つた。

『いや〳〵、親がどんなことをしようが、子は親の言ふことに叛かず孝行をすべきもんです』と貞作は言葉を强くして諭した。

幸吉は、それがへんな理屈だなと思つたけれども、それを反駁する言葉を知らないので、口を尖らしたまゝだまつた。

『さあ歸らう、歸らう』と立ち上つて、幸吉の右の手を取り、

『私が代つて下町のお父さんにあやまつてやるから……』と彼れを引き立てた。

此時に涙を拭いてゐた祖母は、

『まあお世話さまですね』と貞作に言ひ、それから幸吉に、

『いゝ子になつてくれや』と言つて、袂から何かを出して幸吉の左の手に握らせた。それは一錢銅貨であつた。

幸吉は祖母の言葉にすつかりかたくなの心を打碎かれ『お婆さん、勘忍しておくれ』と心の中で言ふ氣になつた。それから澁々ながら立つて歩いたが、道々、親といふものに就て考へた。そして親にはいろ〳〵の種類があるが、おれを產んだ親は一人しかない、其他の親はどうして親となつて、おれに孝行を強いるのだらうかと思ひ、また自分を產んだといふ酒屋の方のお母さんは、どうしておれのお父さんを追ん出したのだらうか……

……。

『先生、なぜ親はおれを產んだんでせう』とやるせなさそうな顏をして、幸吉は貞作に問ふた。

貞作は幸吉の顏を見おろしたが、何んと答へて見ようもないので、

『そんなことを言ふのがだいち親不孝といふもんだ』と言つた。

幸吉は『仕樣がないなあ』と、何んとも言へない不滿と憤ろしさとを感じた。貞作が下町の家に先へ入つて、養父に何か言つてから、外に待たせて置いた幸吉を呼び込んで、

『さあ、これからはお父さんの言ふことを聞くんですよ』と言つて、お茶を呑んでから歸つた。

之れまでだまつて傍にゐた幸吉を、貞作が歸るのを待つて、養父は眉の骨の高い下に窪んでゐる茶色な目玉を光らして見下し、賤しむやうな口調で彼れに向つてしやべり出した。養母は鎭守樣へ幸吉のためにお參りに行つて、不在であつた。

『こら幸吉、おれの言ふことを能うく聞け、貴樣は何んだと思つてゐる、貴樣はな、放火犯人の子だぞ。貴樣を產んだ酒屋の母親は十七歲の餓鬼の時に、自分の色男がほかの女と關係したつてので、その男の家に火をつけただいそれた女でな、おれの辯護のおかげで牢へ入ることだけは宥されたのだ。そんなことからして、貴樣の母親は自分の好きな男と夫婦になれずに、お爺さんとお婆さんが無理に押し付けた婿をとらんけりやならんかつた。そのいやな婿つてのが貴樣の親爺なんだ。ところが不都合にも貴樣の母親はその婿を嫌つて、先の色男とこつそり姦通してゐたのが知れて、貴樣の男親はやけくそを起して道樂を始める、そのためお爺さんやお婆さんに嫌はれて、とうゝ追ん出されてしまつたが、後では別な內へ婿に行つて子供を澤山こしらへてゐるので、貴樣なんか振り向きもしないのだ。そこでだ、貴樣の母親は二度目の婿をとつた、それは誰だと思ふ、その先の色男さ、火をつけてやつた、今の酒屋の親爺、貴樣には繼父のあいつがそれだ。

そしてまた五六人も子供をこしらつたから、もう貴様なんかは邪魔者で、酒屋の憎まれ者なんだ。それが可哀さうだと言ふので、貴様の死んだお爺さんの頼みによつて仕方なく、それぢや若し良い子であつたら後嗣にするし、悪い子であつたら追ひ出すといふ約束で、貴様をおれが引取つて養ひ育てゝ來たのだぞ、ありがたく思へ。それをな、有りがたいとも何んとも思はないで……、おれが救つてやらなけりや貴様は越後獅子にでも賣られてゐたんだぞ』

と養父が語り出す言葉を聞いてゐた幸吉は、なせ養父のしたことを有りがたく思はねばならぬのかわからなかつた。學校の月謝でも、本の錢でも、一文だつて出してくれもしないで、みんな酒屋の母親が店の錢箱から泥棒して出してくれてゐるんぢやないか。そして良い子だけりや後嗣にするけれど、悪いけりや追ん出すなんて、それぢやおれが可哀さうなので育てるのではなくて、自分が後嗣がないものだから、良いけりや自分の後嗣にしようと思つて、自分のために育てゝゐるんぢやないか、それも只ほい使つて飯を食はせて置くだけぢやないか、面白くもない、人を馬鹿にしてゐらあと、心の中で不平を並べてゐた。

養父は幸吉が横を向いて、自分の訓戒をうわの空で聞いてゐるらしいのを見て、かつと怒り、

『この野郎、ふつとい奴だ』と、どなつて鐵張りの煙管にひうと風を切らせて、幸吉の頭に投け

つけた。

幸吉はわつと叫んで頭を押へたまゝ表へはだしで飛出した。外はもう日が暮れて暗かつた。彼れは行き所が無いので、またも實家の酒屋の方へ歩いて行つて、軒下にたゝずんで中の様子を伺つた。幸吉の父親を嫌つた實母が下を向いて圍爐裏の中を長い火箸で突ッつきながら何か考へ事をしてゐるらしい。幸吉は『……、……』と心の中で罵つたが『しかし色男をほかの女に取られたんだから、火をつけるくらゐのことは當り前のことだ、おれだつても憎い奴の家なんか燒いちまふわ』と思つた。彼れは戸の隙間に口をつけて、

『お母さん』と小聲で呼んで見た。

實母ははつとしたらしかつたが、急いで立ち上つて來て、入口の戸に錠を下した。彼れには實母の行爲を解しかねた。今度は店の方へ廻つて中を覗いて見ると、繼父が帳場で首を垂れて錢勘定をしてゐる。軒を見上げると、龜甲の看板の煤けた金文字が光つてゐる。幸吉は『……「……」……』と考へた。

彼れは實家の家の中へ入ることが出來ないので、行く所に困つて途方に暮れ、寢しづまつた町をはだしでうろ〳〵と歩いた。劇場の前へ來ると、まだはねてゐないので、木戸口から光線が往來へ

さして明くなつてゐる。彼れはその木戸口に蹲つて中を覗いて見た。花道を綺麗な女が見たことも
ない立派な着物を着て、裾を長く引き、しく〳〵と泣いて歩いてゐるのが見える。彼れは『あんな
立派な着物を着てゐる美しい女がどうして悲しげに泣いてゐるのかなあ』と不思議であつた。する
と彼れの肩を突く者があるので、振り返つて見上げると、養母が立つてゐるのだ。彼れは首を振つ
て柱にしつかと抱きつき、再び養母の顔を見返つた。養母はだまつてぢつと幸吉の顔を見おろし
た。その眼からは涙がほろ〳〵流れてゐた。それを見た彼れはさあと水を頭からかけられたやうに
ぞつとして、吾れ知らず『お母さん、すみませんでした』といふ氣になり、反射的にだまつて立ち
上り、

『お父さんにあやまらんでいゝけりや歸る』と言つた。

『あゝ、あやまらんでもいゝから歸りな』と養母は悲しさうに言つた。

(四)

幸吉はその夜は裏口からこつそりと入つて寢てしまつたが、翌日の朝になると、養父が、

『あやまれ、あやまらぬ内は家へは入れないぞ』と言つた。

養母は幸吉のお尻を突いて、小聲で『あやまれ、あやまれ』と言つて氣を揉んだ。彼れは欺かれた
と思ふたが、仕方なく兩手をついて、

『今度から氣をつけますから御免なさい』と言ふや否や、ぷいつと立つて裏へ行つた。

そして溜めたくやし涙をどうと一時に流し出してだまつて泣いた。彼れは養父にあやまつたのが殘
念でたまらぬので、裏口から外に飛び出した。畑を横ぎり、鐵道の踏切を越えて田圃の畦路を傳つ
て山へ行つた。赤松のしんがすく〳〵と長く延びて、新しい綠色の光を放つてゐる。彼れはそれを
見て『松はのび〳〵と育つてゐるなあ』と思つた。山の裾から清水がちよろ〳〵と流れて、流れの
底には綺麗な小石が輝いてゐる。彼れは下駄をぬぎ、裾をかゝげて、その流れの中に脚を入れた。
冷い感じが頭の上までしみ通つて生き返るやうな心地がする。兩手に清冽な水を掬ふて呑んだ。松
の木のしんの頂上に小さな鳥がとまつて心ゆくまで『一筆啓上仕候、一筆啓上仕候』と早口に唄つ
てゐた。彼れは『ほう〳〵』と叫んで、兩手を高く捧げて駈け出し、林の中に躍り込んで、草の上
に倒れて仰向けに寢ころんだ。松の葉の間から青い澄んだ空が奥深く見える。靜かな林は彼れを包
んで慰めてゐるやうに彼れには感じられた。彼れは頗る幸福になつて、夕方まで獨して山の中で遊
び暮らしてゐたが、雨が降り出して來たので町へ下つて行つた。けれども養家へはどうしても歸る

氣がしなかつたので、實家の裏口から屋根へ攀き登り、窓から裏二階の物置へ忍び込んだ。下の「茶の間」からひそ〳〵話がするので、寢そべつて上り口から見おろすと、祖母と實母とのところへ養母も來て、三人が額を集めて何事かを相談してゐるのだ。彼れは『おれの始末に就て當惑してゐるのだな』と思つた。

『どうせいばいゝやら、困つたもんだ』

『剛情つぱりだがら……』

『困果な子だ』

こんな言葉がほつ〳〵聞えたやうに考へた彼れは『確におれのことを言つてゐるのだ』と心に定めた。しかし聲が小さいためとぎれ〳〵に聞えるばかりなので、何を言つてゐるのか能くはわからない。彼れはもどかしくて仕樣がなかつたが、耳を澄まして、どうかして聞き取りたいとあせつてゐると、聞えたのは、

『可哀さうだが……』

『猫いらず……』の二語であつた。

そして三人の女の頭が『さうだ〳〵』といふやうにうなづき合つたやうであると、彼れは思つた。

彼れは「猫いらず」と聞くと、一圖に或事が考へられて、ぞつとして身慄へがした。自分がそれで毒殺されるものだと信じ込んでしまつたのだ。彼れは胸をどき〳〵させて『ようし、そつちがそつちなら、こつちもこつちだ、どいつもこいつもくたばれやがれ』と心に叫んだ。

……………………、………………………、…………………………

…………………、…………………。……………………「…」……「…」……………

………………………。……………………………。…………………………

…………………………。………………………………。……………………

……………………………………………。『……………………………………

…………、…………………』…………………。…………………………

…………、……………………………、…………………。……………………

………………………………、………………………………。…………、……………

……………………………。………………………、……………、……………………

…………。……………………………………………………………

(五)

町でも有名な龜甲の看板の酒屋が猛火に包まれた、火事は二三軒を燒いただけであつた。火の中に白く肌を出して酒屋の土藏だけが殘つて立つてゐる。その土藏の屋根の上に火がちよろ〳〵と見える。女の金切り聲で、

『あれ、あれ、火が、火が、倉の屋根に火が、消さんけりや大變だ』と叫んだ。

それは幸吉の養母である。けれども誰もこはがつてその屋根の上へ登つて火を消さうとする者が無かつた。遂に土藏の中へ火が入つて燒け落ちてしまつた。

幸吉は野良犬のやうにうろ〳〵と歩き廻つてゐた。裏のお寺の臺所には繼父が長くなつて死んだやうにして倒れてゐた。便所の前には實母が髪を亂して、乳呑兒を懷に入れ、左の手には四歳の女の兒の手を引き、右の手には鍋を一つぶらさげてゐた。軒下には祖母が、鎭火の後に降り出した雨の中に濡れしよほれて、大地を這つてゐる笄びるのやうな有樣で、古いつゞらの蔭で風呂敷包に獅嚙みついてゐた。傍には「酒」と金文字の書かれた龜甲の看板が泥だらけになつて拋りつけられてあつた。幸吉は『……』と白い齒

を出して默笑した。そこへ養母と養父とが疲れ切つた樣子で來た。養母は例の金切り聲で、

『屋根の火を早く消せつてのに消さないんだもの、預けて置いた箪笥や着類をみんな燃されてしまつた』と愚痴を言つた。

そして繼父が長くなつて寢てゐるのを見ると、

『なんだね、この場合に寢てなんかゐてさ』と叱り飛ばした。

『先祖傳來の刀劍や甲冑を燃した、ほつこれ土藏なんかこしらひやがつて、不都合きはまる』と養父は鼻聲で繼父を睨んでどなつた。

幸吉は是等を傍觀して『ざまあ、見やがれ』と言つてやりたく、痛快でならなかつたが、そら恐しい氣もして、靑い顏をして慄へてゐた。

燒け出された酒屋の一家族は暫くお寺の座敷を借りて住んだ。放火か失火かまだ容易に判明しなかつた。幸吉は弟どもと一しよに本堂の廣間で遊んだ。そして賽錢を盜んでは買ひ喰ひをした。そのことが弟どものロから繼父に密告された。けれども繼父はそれを知つても知らぬ顏をしてゐた。

祖母と實母とがそれを知るに至つて、彼等は狼狽し出して、幸吉を打ち叩き、折檻して白狀させた。

祖母は幸吉を無理に引きずつて本堂に行き、阿彌陀佛の前にすはらせて、幾度か拜んで、幸吉にも

拜ませ、そして擦け出されの貧しい財布を開いて、中から幾つもの銅貨を摘み出しては佛前に投げた。それから再び長く〳〵禮拜し、幸吉にも禮拜させた。幸吉は深い〳〵一種の感に打たれ、悪いことをしたと思つた。そして祖母に對しても氣の毒のことをした、心配をかけてすまなかつたと考へ、あやまらうかと目に涙を浮べてゐたが、祖母の口の兩端の垂れ下つた形を見ると、むら〳〵と反抗心が起きて「親」といふものに對する憎悪心がまだも燃えたつた。

幸吉は夜中になつて眼をさましてあたりを見ると、薄暗いランプの光で祖母の寢てゐる顏が目についた。疲せ衰えて死人のやうな顏をしてゐる彼女の樣子を見ると、彼れは晝間佛前に、自分を拜ませて佛罰から宥してもらふやうに骨を折つてくれ、祖母のことが思出されて「おれのことをほんとうに心配してゐるのは、このお婆さんだけだ、おれはこのお婆さんだけには心配をかけないことにしう」と考へて、

『お婆さん、勘忍しておくなんさい』と心の中で言つて、起き上つて幾度か祖母の枕元に自分の頭をひよこ〳〵と下げた。

第十二篇　藥屋の家の内外

（一）

神林定吉は店の帳場にすはつてゐた。前のアラソーカフエーといふふざけた名の曖昧屋から蓄音機で『やつこらやのやあ、やつこらやのやあ』といふ俗歌が聞える。停留場に近いだけあつて、朝の内は學校の生徒が電車を下りて、どや〳〵と駈けるやうにして前を通り過ぎ、また反對に電車に乘らうとする會社員や女事務員などが、急ぎ足に行くのが、帳場から見物してゐると、盡きぬ興味がある。定吉は『もうあの女が來る時分だ』と思つて、帳場を見ながら、とき〴〵目だけを上へあけて往來を見た。そして一人の女に目をとめた。それは背は低いが、引きしまつた顏で、目の利口さうに光る女事務員らしいのが、矢張り定吉を見るやうで見ないやうな振りをして前を通る。定吉は胸をゝきめかして、その姿を見えなくなるまで横眼をつかつて見送つた。

『五十錢の星胃腸藥をくださいな』と、妾のやうな樣子をした潰し島田の女が店へ入つて來て、五十錢紙幣を出した。

小僧がお金を受取つて彼れに渡したので、定吉は藥品棚の硝子戸を開いて、それを出してやつた。そこへ一臺の母衣をかけた車がとまつた。彼れは『誰れだらう』と首を長く出して覗くと、まだ下りな

い内に母衣の中から顔を差出したのは若い女で、賑かな感じのする花のやうな笑を全面に漲らしてゐる。餘つ程の知り合ひらしい樣子だが、それが誰れであるか、彼れには一寸と考へ出せないでほんやりしてゐると、車から下りた彼女は店の中へづか〳〵と入つて來て、

『神林さん、お久しぶり、私よ』と言つて、嫣然として立つてゐる。

小僧は美しい娘が不意に飛び込んで來たので、あつけにとられてぽかんと口を開いて見てゐる。定吉は漸く思出せたので、

『よう、これは珍しい、まあどうして？　とにかく上りたまへ、一番で？』と元氣よく言つた。

『え』と女は答へて、上へ上つた。

『さう』と定吉は言つて、首を奥の方へねぢ向け、

『おうい、久さやんが來たよ、おうい』と呼んだ。

『はあい、どなた？』と定吉の妻が問ひながら小走りに駈けて來て、戸を開いて見ると、

『まあ、久ちやんぢやないの、どうして、さあ、ずつと奥の方へ、まあ〳〵珍らしいこと』と言つて、女を連れて奥の方へ引っ込んだ。

定吉は女の姿を見てからは急に浮き〳〵して、すぐにも奥へ飛んで行きたかつたけれども、妻の手

前や小僧の手前、さうも出來かねて、尻をもじ〳〵させてゐた。

女は久子と言つて、定吉夫婦がまだ國にゐた頃、よく遊びに來た女であつた。彼女は畫者の子で、その畫者が死んでからは、母親の妹の嫁いでゐる大工の棟梁の家に厄介になつてゐるのだが、定吉の妻が私立の裁縫學校へ通つてゐた時に、彼女も通つてゐたところから仲が好くなり、それが緣故となつて、彼女は定吉の家へ遊びに來るやうになつた。彼女は其頃はまだ十五歳ぐらゐでしかなかつたけれども、早熟であつて、中學生が袖を引つ張つたとか、文をつけられたとか言つて、自分で悅んでゐる女であつた。彼女は自分の方からやたらに男に向つて、男を引きつけるやうな眼を注いで男がそのために變な氣を起すのを樂しみにしてゐるやうな樣子であるが、其實その割りにだらしがないのではない。定吉もまた既に三十歳を越してゐたけれど、この十五歳の久子に對して心を動かされないではゐなかつた。それが四年振りで、立派な女になつて彼れの前に忽然として現れたので、彼れの心は顚倒するほどに騷いだ。彼れは帳場にすはつて前を通る人をぼんやりと眺めながら久子のことを考へ『あゝいふ女こそ男を惱まし、男に罪惡を犯さしめるのであらうか』と思つた。奥から響いて來る張りのある艶々した若い女の笑聲が聞えると、矢も楯もたまらず、

『おい、辰三、頼んだよ』と小僧に注意して、彼れは奥へ、いそ〳〵として引つ込み、

『すてきな美人になつちやつて、初めは誰だかわからなかつたよ』とにこ〳〵して、彼女の傍へあぐらをかいた。

『あら、いやだわ、あなたこそいつもお若くつてよ』と久子は相手を引きつけずには置かないやうに、にこりと笑つた。

彼女は何處と言つて特長は無いが、缺點も無い容貌で、顏の全面からのみではなく、體の全體からして異性を惱殺するやうな魔力が放射してゐるやうに、定吉には感じられた。

『どうして來たの、見物？』と定吉は何よりもそれが聞きたいといふ風に膝を進めたが、內心は何もかも無い、たゞ彼女と話をするのが嬉しいのである。

『あたし逃げて來たんですのよ』と彼女は事もなげに言ひ放つた。

『へえ、どうしてまた？』と定吉は彼女の顏に見とれて問ひ返した。

彼れは彼女が自分の家へ逃げて來たのが有りがたくて仕樣がないのだ。妻は彼女のために『何からう』と出かけて行かうとしたらしかつたが、久子がどんな話をするのか、それが聞きたいので、まご〳〵してゐた。

(二)

『私ね、お嫁に行つたんですけれど、いやだから逃げ出して來たんですのよ、御迷惑でも暫く置いてくださいな』と久子は言つた。

『どうしていやだつたの』と定吉は問ふた。

『大きな呉服屋の通ひ番頭で、私をそれは親切に可愛がつてくれますけれど、商賣以外のことは何んにも趣味も道樂もない人ですの。朝は夜があけると、飯も食はずに直ぐお店へ行つて、お晝飯だつて歸つて來ず、夜の十一時過ぎにやう〳〵歸つて來るんですが、歸つて來ると直ぐ寢てぐう〳〵の高鼾で、夜があければむくりと起きて、またお店よ。酒一つ呑むぢやなし、私を一つ叱るぢやなし、じやうだん一つ言ふぢやなし、まるで內からお店へ往き來する器械なんだもの。私なんのために生きてゐるんだかわからなくなつてしまつたんですのよ。ちつとも面白いことも、心配も、苦勞も、張り合ひもない、怠屈で、怠屈で、監獄が丁度あんなだらうと、つく〴〵考へたんですわ。私はまだ若いのに……と思つたら、東京の賑かさが目にちらついて、ふとあなたのお內のことが頭に浮かんだんですよ。さうするともう居ても立つて

もゐられなくなつたんですわ。それで……』と久子は膝へ重ねて置いた長い袖を手でいぢくりながら語つた。

『まあ、さうですか』と妻は驚いた顔をして言つた。

『では、追手が掛かゐんぢやない？』と定吉は懸念さうに問ふた。

久子は入れ毛をしない自分だけの黒い澤山の髪を重さうに無造作に束ねた頭を左右に振つて、

『いゝえ、私、去狀を書いて來たの。……でも誰か來たら追つ拂つてくださいな』と言つた。

『こゝへ來ゐつてことは知つてゐるの？』

『え、男は知らないでせうが、內の者は知つてゐますわ。私、こつちへ來る時、內へは此處へ來ゐつてことを言つてやつたんですから……』

『女の方から去狀を書く奴もないんもんだ』と定吉は笑ひながら言つた。

妻は漸く決心して外へ出て行つた。久子はちらつと定吉を見た時に、定吉も彼女を見たので、はたと瞳が合つた。二人はうろたへて他にそれを反らした。小僧がその時、

『驗溫器は品切れなんですか』と間の硝子戸を開かずに店の方から問ふた。

『あ、品切れだ、明日來ゐよ』と定吉はそつちの方へ向いて答へてから、

『久ちやん、向ふから人が來たりなんかすると、男が戀しくなつて歸りたいやうな氣になりはしないかね』と問ふた。

『そんな、そんなことは決して無いわ。だからあなたからきつぱりと斷つてくださいよ。私ほんとの事情を申しますから、あなた、私を信じてね』と久子は定吉の方へ摺り寄つた。

『まだ、ほんとの事をしまつて置いたのか』と定吉は言つたが、側近く寄つて來た久子を抱擁したい衝動に驅られさうなのをぢつと我慢した。

『え、きまりが悪いから、けれど言はなきあ、あなたから力を入れてもらへないでせうと思つて……』と久子は兩袖で顏を覆ふた。

『何んですか、きまりなんか悪いことがあるもんか』

彼女は赤い顏をして下を向きながら語り出した。

『あの、あなたも御承知な、森村つて中學生がゐましたでせう？』

『うん、柔道のうまい、不良少年のやうな』

『え、實は前々からあの男と關係してゐたんです、けれども今のやうな不良少年で、中學校を中途で退學され、それからは何處へ行つたか、暫くは姿を見せませんでしたが、それで私もそれつ

きり、その男のことは忘れるつもりでゐたところへ、お嫁の口がありましたから、さつきの番頭さんのところ參つたんですわ。すると何處をどうして來たものか、森村が驛の改札係になつて姿を現したんで、また行き來するやうになつてしまつたんですの。それも最初は私もいやだ〳〵つて撥ねつけてゐたんですけれど、昔のことをみんな亭主にぶちまけるぞとおどかされて遂ひ……。それが私、いまの亭主がだん〳〵嫌ひになつて、森村の方が……、それで二人が相談の上、東京へ出て一働きするから、お前さんも改札係なんかしてゐないで、東京へ出て何かして、末には一しよになりませうと約束したところが、森村も自働車の運轉手がお金になるから、大森とかにある自働車學校へ入る、さうすれば三ヶ月の後には免狀を貰へると言ふんで、さう定めて、私は一足さきに出て來たんですの』との話に、定吉は森村のことに就て妬ましさを感じた。そして兩腕を組んで目を塞いで暫く考へてあたが、ふと目を開いて久子の顏を見ながら、

『久ちやん、あなたはその森村に對しては心から惚れてゐるんですか、森村はあなたを欺くやうなことはないのですか』と念を押した。

『私、そんなことはないと信じてますわ。』

此時に妻は用を達して歸つて來て、二人がおれの留守に何をしたかを探るやうな目をして密に二人

の顏色を伺つてから、お茶を入れかへて出した。定吉は何んとなく、いま〳〵しいやうな感じが起きたが、また森村が眞面目な態度で久子のことを思ふてゐてくれゝばいゝと願つた。さもなければ此女は非常な不運に陷らねばならぬと考へた。そして、この久子は美貌が確に禍をなして、自分も罪を犯し、男にも罪を犯させ、自らは數奇の運命に翻弄せられると思ひ、また彼女が浮氣心のあるのが嬉しいやうな氣もするのである。

（三）

久子は戀人と思つてゐる森村が今日の一番で出京するので、上野驛まで出迎に行つた。定吉は仕入の用で日本橋方面へ出かけた。妻は小僧を相手に店番をしてゐて、またあの朝鮮人が來る頃だと思ひながら、目に觸れる家並、電車、人馬などをノートに寫生してゐた。彼女は二十五六歲の今日まで繪といふものを描いたことがなかつた。學校は小學校も滿足に終へなかつたほどの女だから、振假名づきでなければ小說も讀むことの出來ないくらゐの程度であるので、勿論自分が繪などを描けようとは夢にも思はれなかつたのを、店番をしながらふとした衝動に驅られてノートに鉛筆でいたづら書きを始めて見ると、人間が人間の子供を產むやうに、何かゞひよこり〳〵と紙の上へ產れ

て出るので、さあ面白くて面白くて、息をはづませて眞赤になつて描いてゐる。彼女の寫生は他の人の寫生と違つて、實物を見ながら一線一畫を引いて行くのではなく、最初に實物を見ると、頭の中にそれがちやんと印象して『あ、面白いな』といふ感じが起ると、後は實物などは見ずに、自分の頭の中にあるものを目あてに出たら目にノートの上に線を引つ張つて行くので、出來る物は實物とはまるで違つたものであるが、不思議にもその實物から受ける或感じが端的に表現されてあるのだ。山本鼎が提唱し出した兒童の自由畫か、さもなければ原始時代か未開人かの繪畫みたいなものが描かれるので、線が自由で、物の感じがその簡明な不定形な内に力づよく注ぎ込まれてゐるのだ。彼女は自分の畫が驚くべき逸品であることなどは知らずに、定吉にも見せず、たゞ自分の樂しみとしてノートに一日に數個の作品を產んでゐた。

彼女は定吉に連れられて產れて初めて東京へ來たのは一昨年であるが、彼女の第一印象は東京には立派な好い男が澤山ゐるのに驚かされたことで、好い男を見る度に胸を轟かした。曾て有樂座の清元會を聞きに行つた時に、定吉から『あれが菊五郎だ』と敎へられて、廊下に多くの藝者に取り圍まれてゐる靑々とした髭跡のある男らしい男を見た時には、ぶる〳〵と身が慄へたほどに男性美に陶醉し、彼れの身近くに寄ることの出來る藝者といふものを羨しく感じた。彼女が店番をしてゐて

の樂しみは寫生することゝ、前を通る立派な男を眺めることゝである。いま彼女が寫生してゐながら、その頭に隙を見て飛び込んで來たのは一人の朝鮮人であつた。彼女には西洋人だの、支那人だの、朝鮮人だのといふ區別なんかない、たゞ男を見てゐるだけ、西洋人は障れば赤い血でもにじみ出るやうな肌をしてゐるので觸れる氣は起らないが、同じ黃色人種であるところから支那人や朝鮮人に對しては日本人と少しも差別を置いてゐないのである。むしろ好い男は支那人や朝鮮人の中にあると思つてゐるのだ。彼女の好い男といふのは體格の立派な男のことである。

彼女が、いま頭に浮べた朝鮮人は明治大學生で、身のたけは五尺七寸ぐらゐあり、横もそれに相當した、顏色の白い、輪廓のとゝのつた、感じの好い男で、印度人、支那人と合同して東亞評論といふ月刊雜誌を計畫し、前月その創刊號を出すと、卽日發賣禁止になつたので、定吉の店へ來て、その朝鮮人が妻に『困つた、困つた』とこぼしてゐた。彼れに對する是等のことは、彼れ自身が彼女に物語つたのである。彼れは最初、定吉の妻の店番姿を見て心を動かし、仁丹を買ひに入つたのが始まりで、三日に一度くらゐづゝは仁丹買ひに來て、妻ばかりで定吉のゐない時には帳場のところへ近づき、腰を掛けて煙草を一本吸ひ上げるまで居るやうになつた。彼れが好い男の上に、氣障でなく、いやらしい樣子もないので、彼女は彼れを好きになり、歡迎して、特別の目と笑顏とを見せ

てゐた。彼女は肉體は人の妻となつてゐる以上は不自由だが、心は自由に天地に驅けらしてもいゝものだといふ自家一個の非學問的の哲學を案出してゐるのである。

彼女が心待ちに待つてゐたとほりに、例の朝鮮人は入つて來た。小僧は『また來たな』といふやうに、横目にかけながらにや〳〵してゐた。朝鮮人は關税的にもう仁丹を買ふことは止めにして、木戸御免の格でづか〳〵と彼女の傍へ來て腰を掛けるやうになつてゐた。

『何が出來ますね』と聲をかけた。

彼女は鼻の穴をふくらませて繪に熱注してゐたが、この聲を聞くと、ノートを手早く袖の下に隱して、につこりと朝鮮人の顏を見て笑ひ、目で『いやよ、盗み見なんかしたり』と言つて、そのほかにも何物かを送つた。

『繪ですか、どれ拜見』と朝鮮人は重ねて言つて、手を差出した。

『いゝえ、これは私ないしよなの』と彼女は言つて、今度は膝の下へ入れてしまひ、それから、

『雜誌はどう？　第二號は……』と問ふた。

『明日でます、また發賣禁止かな、困る、實際困る』と、何物にこの怨みを訴へようかといふやうに天井を見上げた。

『氣の毒ねえ、同情するわ』と彼女が言ふと、朝鮮人はつと頭をじやうだんらしく下けて、

『有りがたう、今の政府のやうな遣り方、却て反抗心をおこさせます』と言つた。

『私は何んにも知りませんが、どうして人間は仲好く暮らして行かれないんでせうね。私どもなどはちつとも戰爭してくれだの、よその國をとつてくれだの思はないのにねえ』

『あなたなんか私どもと斯うして隔てなく交際してくださるけれど、日本人の中にはまだ私ども別物扱ひする人、多いんで困ります。その心お互にとり去らなければ、眞から世界中のもの仲好く出來ないでせう』

『私なんか學問がないから、支那や朝鮮が何處にあつて、日本とどんなやうに違つてゐるつてことすら知りませんから、支那人だ、あなた方の國の人だつて區別する氣なんか起りませんけれど、矢張り學問していろ〳〵の國のことなど知ると、區別したくなるんでせうかね。私ほんとにあなたの國の人、可哀さうよ』

彼女の言葉を聞いてゐた朝鮮人は感激の涙を湛へ、

『誠にありがたう、ありがたう』と言つたが、言葉が閊へたので、また一寸と手を出して、

『その膝の下、入れたもの見せて下ださい、お願ひします』と熱心に言つた。

彼女は體にしなを作つて　膝の下へ手をやり、

『私、耻かしいから此處で見てはいやよ、持つて行つて雖もるないところで、こつそり見るならお貸してもいゝわ、約束できて？』と朝鮮人の顏を首を傾けて覗き込むやうにして言つた。

朝鮮人は差出した手を慄はし、目を輝かして、

『え、承知しました、約束します、直ぐ持つて行きます、嘘いひません』と力を籠めて言つた。

『ほんたう？』と彼女は溢れるばかりの愛嬌を見せて、膝の下へ手を入れ、すつと彼れの前にノートを突き出した。

朝鮮人は胸をそらして、それを見るや、だまつて受取つて、

『ぢや、さよなら、直ぐお返しします』と言つて、嬉しさうに頁みて出て行つた。

(四)

店をしまつてから、定吉と妻と久子とは二階へ上つて、定吉夫婦の寢間になつてゐる六疊に入り、寒いので長火鉢を圍み、お茶を呑みながら話を始めた。

『久ちやんは大へん浮かぬ顏をしてゐるだやないか、森村君は來て？』と定吉は先づ問ふた。

『え、一番で來たことは來たんですが、上野公園で暫く話をしてから別れましたー』と久子は言つたが、急に兩袖で顏を隱して、不明瞭な言葉で、

『私あなたから能っく聞いて判斷して頂きたいですわ。そしてどうしても森村の心が變つてゐるものとすれば、私はふッつりとあきらめてしまひます』と言つた。

『まあ、どうしたといふんですの』と定吉の妻は心配さうに問ふた。

久子は袖を顏から取つて赤い目を伏せ、

『私ありのまゝを言ひますから、判斷してくださいよ』と言つて、今日の會見の顚末を逐一に物語つた。

『停車場から二人して出て、私が前の宿屋へ上つてゆつくり話をして、今夜はそこで泊りませうと言つたんですのに、そんなのんきなことはしてゐられない、直ぐ自働車學校へ行つて手續を濟まして寄宿舍へ入るんだから、公園へ行つてベンチにでも腰掛けて話をしよう、それも三十分間くらゐだと言ふんです。それから寒いのに山へ登つてベンチに腰を掛けると、いきなり「お前のやうな意志薄弱なものは駄目だ、直ぐ約束を破るやうぢや末の見込みがない」と言ひ出すぢやございませんか、私は「何が意志薄弱なんです、なに約束を破りました」と、もう喧嘩を始めたん

ですもの。森村が言ふには「意志薄弱さ、お前さんは自働車學校へ入つて勉強してくれ、私はどこかへ女中に入つて働くからと言つてゐながら、神林へ行つて遊び暮らして……」と、それから、まあ人に言はれないやうなことを言ふんですもの……」

『どんなこと?』と妻は好奇心にかられてゐるらしく問ふた。

定吉はそれがどんな話であるかといふことを略ぼ察して不快を覺えた。

『え、國にゐたとき神林へしよつちう行つてゐたことを知つてるぞ、と言つて、へんなことまで言ふんですもの、私くやしくつて、くやしくつて……』

『まあ、ね』と妻は呆れた。

『それから?』と定吉は早く話題を變へさせた。

『ですから、私は「あそこが一ばん安全でいゝから神林さんに保護してもらふつもりで行つたんです、お前さんの氣に障るなら直ぐ出て奉公でも何んでもしますわ」と言つてやつたら「今になつてそんなことしたつて駄目だ」と言ふのです。で私は、仕方がないから、ほんとの事を言つてしまつたんです。』

『よくほんとの事を持出したもんだね』と定吉はほゝ笑んで言つた。

『だつて……』と久子は身をなまめかしくもじつて、

『あの、「實は私、お前さんの子を宿してゐるので勤め奉公なんか出來ない」と言つたんですの』

と語つた。

定吉夫婦は驚いて互に顏を見合せてから、

『ほんたうかね』と二人が一しよに問ふた。

『え、ほんたうなのよ、すると森村はびつくりしたやうですが、せゝら笑つて「誰れの子だか、呉服屋の番頭の子をおれに押付けようたつて、さうはうまくは行かないや」と言つたかと思ふと、急に前よりかもよそ〳〵しくして「おい、おれはね、自働車學校へ入るたつて只では入れないんだよ、それでね、前田つて驛の助役がおれに目をかけて居てくれるから、そいつに相談したんだ、すると娘を妻にしてくれゝば、三ケ月でしかないから貰いでもよいと言ふんだ、だがその娘つてのが、あんまり芳しからぬ女でね、しかしお金は先で、結婚は後だから、お金をもらつた後は、また其時のことさ、それで斯うして出て來たのもみんな助役のおかけなのだよ」つての。私すつかり呆れ返つてしまつて、物が言はれませんでしたわ。それで私は「お前さんはお金のために女を捨てるのか、私は今迄そんな男とは思はなかつた、愛相もこそも盡き果てた」つて、大喧嘩し

つ放しで別れつちやつたんです」と久子は言ひ終つて、ハンケチを出して眼を拭ふた。

定吉の妻は呆れ返つたといふやうな顔をして、氣の毒さうに久子を眺めた。

『神林さん、どう、森村の心は？　私ほんとに心細いわ』と久子は暫くしてから斯う言つた。

『さうだな　私の考へでは、森村君自身も久ちやんとその助役の娘だかの兩方に立つて迷つてゐるらしい、が、そんな男ならたとひ久ちやんの方へ結局は心が傾いたにしても、末しじうの良人としては頼母しくないと思ふ。しかし、だと言つて、まあ言へば久ちやんの初戀だから、森村君と別れるといふことは猶ほ不幸のことだ。だからもし森村君が久ちやんを何處までも愛するといふ心でゐるならば、久ちやんは森村君を逃がさないやうにせねばならぬ。けれども森村君が久ちやんにいや氣が、ではない、それよりかもお金に目がくれて助役の娘と結婚する氣なら、久ちやんは今の内に思ひあきらめなけりやならん。だから久ちやんが是れから取る道は森村君の心を確めることだよ』と定吉は考へ、考へ言つた。

久子は目を上げて定吉の顔を見て、

『心を確めるつて、どうするんですの』と問ふた。

『それは、二三日したら大森の自働車學校へ行つて見るんだね。森村君が人並の心を持つてゐな

なら明日が明後日か久ちやんのところへ、自働車學校へ入つたことを言つて來るに違ひないから、そしたら會ひに行つて來るんです。それが手紙をよこさないやうだつたら、よこすまで辛からうが、ぢつと辛抱して行かないでゐるんだ。もし久ちやんに心があるなら、久ちやんの方から手紙もやらず、會ひにも行かないとすると、氣を揉み出して、手紙をよこすなり、自身で出向いて來るなりするからね、それで若し明日でも明後日でも手紙をよこせばまだ脈があるのだから、會ひに行つて、ようく森村君の腹の中を聞いて來るんです。そしてその一部始終を私に聞かせなさい、さうすれば確かなところがわかると思ふんだ』

『どんな風に森村に會つたら言へばいゝでんですの』と久子は體全部を定吉の方へ向けて問ふた。

『久ちやん、腹の子は森村君のだと、どうしてわかるね、御亭主の子でないことは確かなの？』

『え、私どうしてもその男が、別に憎いとは思つてゐませんけれど、一しよになるのがいやで、この半年ばかりといふものは、病氣だ、病氣だと言つて逃げてゐたんです。お醫者から見てもらつたら三ケ月くらゐだと言ふんですの。そんなら森村と……』

『さうかなあ、ではね、森村君の心を確めるに、その腹の子をどこまでも持出すんだね、この子をどうしようかと聞くんだ、さうすると森村君はずべこべ何とか一寸逃れに逃れようとするには

違ひないから、そこをぢり〳〵と押しつめて、徹底した返事を吐かせるのさ。具體的にちやんとした態度や處置を言明させるんだ。そしてその返事を私のところへ持つて來なさい。私が判斷して、右か左かの道をあなたに示します』と定吉はしつかりした言葉で言つた。

外は夜が更けたと見えて、電車の走り方が早くなつて、凄じい音が響いて來る。

(五)

店番は午前を定吉が、午後を妻が、夜分は一日更代といふやうにして平常は定めて置いた。今日も定吉は例の女事務員が前を通るのを注意してゐながら、何度か考へたことの『あの女は亭主があるのだらうか、どうか』といふことを今も再び考へた。いろ〳〵の人が通る中から、彼れは彼女を見逃さなかつたが、今日は遇然が故意かぴたりと二人の視線が合つたので、彼れは胸を躍らせた。そして『どうかしてあの女と話して見たい、あの女がおれに心があるなら、何か買物をしに入つて來るやうになるに違ひない。さうしたら話をしかけて親密になり、あの女の休み日の時、さうだ、日曜日か何かに何處かへ一しよに遊び行かう、芝居好きかと聞いて見て、もし好きだと言つたら、芝居見物に誘はうなど〻空想を逞うして行つた。すると、いつかの定休日に妻を連れて市村座、の

二階正面桟敷にゐると、その隣へ藝人らしい男と下町の娘らしいのが入つてゐたが、幕間にお茶屋の方へ行つて、幕が開いても歸つて來ず、芝居の中頃になつて歸つて來たが、そのすはり樣子が、御飯をすましたとか、顔を洗つたとか、着物を着かへたとか、何んであれ、兎に角一仕事をしたといふやうな風に見えて、娘はいそ〳〵と嬉しさうにしてゐたのを眺めた定吉は、妙なことを推想して妬ましく感じたことがあつた。あの時の男は實に好い男であつて、妻が『隣にゐる男は馬鹿に好い男だわ、にがみ走つてゐるつてのはあんな男のことかしら』と言つてゐた。彼れは是等のことを思出し、『おれもあの女を連れて行つて……』などゝいふやうなことを、それからそれへと思ひを走らせて樂しんでゐると、

『あなた』と、少しく變つた聲で妻が後に來て呼んだので、彼れは驚き、今の腹の中のことを勘づかれたんぢやないかと、彼女の顔を見た。

彼女は何んとなく思案に餘つたといふやうな樣子でもあり、また何か罪を犯してゐる者のやうな風にも見える表情をして、そこへぺつたりすはつた。

『なんだ?』と彼れは體をそつちの方へ向けて問ふた。

『これを……』と言つて、彼女は寫生をしたノートを彼れの前に差出し、

『あたし奥にゐますから、後で來てください』と言ひ置いて、急ぎ足で奥へ引つ込んだ。

彼れは妻の樣子に不審を抱きながら、ノートを開いて見て驚いた。「これはすばらしいものだ、これは颯々亭さんに見せよう、確にこれは、人間は純な心を持つてゐればみんな繪が描けるといふことの實證だ』と考へて、次々とページを繰つて行くと、小さな西洋封筒の封を切つたのがある。「李花のごとき人へ、亡國の民より」と、下手な手で書いてあるので、はつと思つて、顏色を變へて中を急いで見ると、洋罫紙に簡單に次のやうな文句の書いてあるものがあつた。彼れは兩手を慄はして讀んで行く内にだん〳〵青ざめた。

いつも、いつも店さきでお話させてもらひ、　しく、嬉しく思ひます、十五日、ゆつくりお話したい、午前十時まで、駿河臺下停留場、待つてゐます、どうか來てください、亡國の哀れな者、日本のあなた一人の友だちに持たせくだされば、まこと、まことに嬉し思ひます。

定吉は嫉妬の焰が心頭にまで燃え上つた。けれども『妻がこれをおれに見せる以上は、何事か考へてゐるのだ、これは嫉妬の念の起るのは起らせて置いて、おれは能く妻から事情を聞きとつて、おれも妻も幸福な者にならねばならぬ、自ら不幸を招くべきものではない』と考へなほし、小僧に店を頼んで、彼れは奥へ入つて行つた。

『この手紙はどうしたんだ』と彼れは彼女の前にすはると、直ぐに問ふた。

彼女は彼れの顏をちらつと見てから、その手紙の方へ目を移して言つた。

『あなた、どうぞ宥してください、私とんだことをしました』

『何んでもよろしい、終へたことは仕方がない、二人が幸福をとりかへすやうに、これから努力することを相談しよう』と定吉は激情を押へて言つた。

『あたし有りのまゝをお話いたしますから、……』と彼女は面を伏せながら物語つた。

『……その手紙をよこした男はときゞ〳〵私の店番をしてゐる時に遊びに來てゐたのです、私も面白かつたから、いろ〳〵相手になつて話をしてゐたんですが、ノートに繪を描いてゐた時にも來て、何を描いてゐるんだ、是非みせろと言ふのですけれど、居る前で見られるのが恥かしかつたから、持つて行つて誰にも見せないやうにして、こつそり見るのなら見せると言つて貸してやつたら、昨日それを返してよこしたんです。するとその中からそんなものが出たのでございますけれど……』

『今迄どうしておれに見せないで、今おれに見せる氣になつたんだ』

『私、十五日、今日、行かうと、今の今迄さう思つてゐたんです』

『ふん、それを、どうして行かないで、おれに見せたのか、と定吉は餉を轟かせ、膝を彼女の方へ進ませて問ふた。

彼女はそれだけ體をすくめて、

『あなたがいつぞや瓢三郎さんと話してゐた言葉が、ぴかりと私の心に光つたんです。……男は純な心で女の友達を持たれないものだつていふことを……』と言つた。

『それは良かつた、それが一歩ふみ出す間際に心に閃いたといふのは、運命に感謝せんけりやならん。お前はあまんまり自分を信じ過ぎるから危い目に遭ふのだ。自分は大丈夫だと信じ過ぎてゐるから、男と交際するのを危險と考へないで、無邪氣に、好い男なら好い男と思つたゞけで、それを樂しんでゐて濟まされる心を持つてゐると信じてゐるのが實に危いのだ。それは自分はどこ迄もさうであるにしてからが、男の方では氣に入つた女に對しては單に友達關係だけで止めて置くことの出來ないやうに生理的に產みつけられてあるものだ。或は多くの男は最初から一つの野心を持つて仕掛かつてゐるのだ。その男は朝鮮人らしいが、それなんかは最初からお前を物にしようともくろんでゐるのだよ。それを知らずに、おまへは氣に入つた男なので際を見せたのが惡るかつたので、それでもまだ氣がつかずに、今日その男と何處かへ行つて見ろ、どんな出來心

がお前に起らないとは誰れが斷言できよう。その男はもう精神的に毎日お前を汚してゐるのだ。いま一歩にしてお前の體を汚すのは今日であつたのだ。一たい過失は却つて自分の心をのまりに信じ過ぎ、また相手の心をあまりに信じ過ぎる者にあるものだ。それは、私は女の友達が欲しい、お前は男の友達が欲しい、しかし異性の友達は或垣を隔てゝ交際してゐれば實に愉快なものだ。けれども車に乘つてゐるやうなものだ、下り坂に踏み込まぬやうにせねばならぬ、自分が幾ら意志堅固にしてゐても、車はがら〳〵と急轉直下するものである、人間は腹の中では隨分不潔な不屈至極なことを考へてゐるものだ、しかしその場合に遭遇しないから、それが單に腹の中で思ふてゐるだけで事が濟んでしまつてゐるのだ。人間は場合といふものに注意せねばならぬ、所謂「君子危きに近よらず」と言ふ言葉はそれを意味してゐるものだと思ふ』

妻は上半身を定吉の膝の上に投げかけて、

『よくわかりました』と言つてから、彼れの顏を見上げて、心配さうに、

『あなた、……その男にはどう言つたらいゝでせう?』と問ふた。

『默殺してゐればいゝ、また來たら奧へ引つ込んでゐるさ。おれが代りに出て、奴の顏をじろじろ見てやれば、それで奴はもう來ないよ。お前は一人の男の友達を失つたのだ、それはお前が惡

い、隙を見せたからだ。どんな男でも、十二三歳から七十、八十歳の老人に至るまで、下は乞食から上は貴人に至るまで、男といふものは常に女を汚すやうな心を以て女を見てゐるのだといふことを決して忘れないやうに……。おれなんかも前を通る女にはみんな姦淫を行つてゐるんだ』

と定吉は兩膝に手を突いて言つた。

定吉から離れて體を崩してすはつてゐた妻は櫛で前髪をなほしながら、

『さうでせうか、私なんか男を見るに、たゞ好い男は好い男、すいた男はすいた男で、その先のことなんか身に感じたことなんかないわ、そんなところまで思はせるやうなことを男がすれば、すいた男もいやになるわ』と言つた。

定吉は妻の言つたその心持を解することが出來なかつた。

『さうかな、それは女でも少なからうよ。時田の細君なんか、好い男を見ると、すぐ肉體の方に感ずるさうだ』と彼れは言つて、店の方へ聞き耳を立てた。

妻は店へ誰かゞ來たのを『もしや』と思つたと見えて、體を一寸と浮かせた。

(六)

『どうだつたね』と定吉は自働車學校へ行つて來た久子に問ふた。

『また喧嘩して來ましたわ、もう駄目です、あきらめました』と久子を言つた。

それを聞いた時に、定吉は嬉しく感じた。久子は會見の模樣を報告した。

『行つたら學校にゐたんで、すぐ近くの蕎麥屋へ上つて、かけ二つづゝ食べて歸つて來ました。私が「腹の子をどうするつもりか」と言つてやつたら、どこまでも「番頭の子だ」と言ひ募るのですの。私かその事情をよく話してやると「そんなことを言つたつて、だまされるもんか、腹の子をかすがひにしておれを放すまいと言ふんだらうけれど、おれはそんなことに頓着しないからね」と言ふんです。それは、たとひ子供があつたつて、いやな女と別れることなんか造作もなく別れられるといふ事を言つてゐるんです。私は腹が立つたから「自分の子をどこまでも子でないなんかと言ふ人は父でないのだから父でないものは良人でもない」と言つてやつたら、「そつちがそつちなら、こつちもこつちだ、人の子なんか孕んだやうな女にはこつちから御免だ、もうお前とは夫婦でも何んでもないから……。それでもお前がほんとにおれと夫婦になりたけりや、その腹の子を……」と、まあ恐しいことを言ふんですの。私は「自分の可愛い子をそんなに言ふのは、もう私にいや氣がさしてゐる證據だ、私もお前さんのやうな薄情男はまつぴら御免だ」と言ひま

した。すると「ふん、ほかに好い男でも出來たんで、おれにそんな愛相つかしを言ふのだらう、こつちはもつけの幸ひだ、自働車の運轉手なんか急にいやになんたんだらう、薄情者とはそつち・のことだ」と言ひますから、私も「お金のためにほかの女と見かへるなんか、薄情者のするこつた」と言ひ返してやりました』

定吉は聲を出さずに笑つて、

『それで森村君は怒つて、あなたを毆つたりなんかしなかつかね』と問ふた。

『いゝえ　たゞせゝら笑つてるたゞけです』

『さうか、さうすると、私の鑑定ではもう脈が無いものと言つていゝね。そこで怒るとか、毆るとかすれば、まだ少しは熱があるのだけれど、さう冷淡に構へられるやうになつてゐては……。それで、何より大切なことがあるんだが、あなたは森村君と出會つた時、また話をしてゐる時に、懷しいとか、嬉しいとか、または男の心と自分の心が一つになつてゐるやうな内感がありはしなかつたかね』

久子は首を上げて、左右に髪が搖れるほどに振つて、

『いゝえ、そんな氣は起りませんでしたわ、なんだか二人の間には壁でも出來たやうに、こつち

から飛びつきたいと思つても、それが出來ないやうな堅い冷かな感じしか與へられませんでしたわ』と寂しさうに答へた。

定吉はうなづいて、

『さう……まあ私の鑑定では、あなたはまだ男に對して心があるけれども、先方では大分あなたから離れてゐるやうに思はれる』と言つたが、

自分の心の中では『こんな美人を色女に持つてゐながら、それを捨てゐらしい森村は一たいどうしたんだらうか、いや〳〵森村は久子を放す氣はないのだ、冷淡らしく見えるのは、そこに何か譯があるのかも知れない』などゝ考へた。

『私だつて、もうちつとも未練なんか無いわ』と久子が言つたので、定吉は吾れに返り、

『まあ、總てのことは時間が能く解決をしてくれます。あなたは暫く此處にゐたがいゝでせう、そしてあなたは自分の心をよく見ることに努めなさい』と言つて机の引出から一通の手紙を出して來て、それを開き、

『今日あなたの内から手紙が來ましてね、かうです、その要領は、……久子が貴兄のところへ逃けて行つたさうだが、誠に御迷惑だらう、久子が自分の子なら如何やうにも父の權利で押へつけ

られるけれども、人の子であつて見ればさうも出來ず、そのために到途そんな女になつてしまつたのは、矢張り私共の至らなかつたせいだと後悔してゐます、しかしながら、だといつて、今後とも無理に嫌ひな亭主の所へ連れ戻すといふことも出來かねる、まだ籍が入つたわけではないから歸らないでゐれば、それはそれつ切りで、たゞ先方で道具や荷物を押へて戻してよこさないのを捨てゝしまへば事は濟むわけだ、先方から二三度かれこれと言つて來て、久子の居場所を聞かしてくれなんかと言つたけれども、曖昧な返事をして置いた、久子の一身は貴兄におまかせするから最上の方法を講じてくれ、こつちから何かしてやりたいけれど、御承知の通り子供も多勢であつて困るから、その邊のところは御迷惑でも貴兄の方で何んとか、久子を勸め奉公にでも出させるなりしてつと、まあ、さう言つたわけだ』と告げた。

『ほんたうにあなた方には御迷惑だわ』と久子は頭を前に下げた。

『なんにもお構ひしませんのに……、だが森村さんは一たいどう思つてゐるんでせうね』と定吉の妻は言つた。

『もうお金のために心が變つたんですわ』と久子は、さもわかつてゐるとふやうに言つた。

定吉は妻が汲んで出した茶を呑み干して、

『それで、森村君のことは自然の成り行きにまかして、あなたはあなたで今後の方針を立てゝ、森村君なんかを念頭に置かないで進まねばならぬ。その内にどうしても念頭に置かずにはゐられないやうな、森村君を戀しく思ふ心が起きた場合には、またその時の事にして、今はとにかく自分の身の振り方を考へるんだね』と說いた。

『え、私もそれに就ていろ〳〵考へてゐるんですが、タイピストにならうかと思つてゐますわ』と久子は言つたが、定吉にはそれが心の底から要求してゐることではないやうに感じられた。けれどもそれに調子を合せずにはゐられなかつたので、

『それは良い考へだ、獨立の出來る何か手に職を持つといふことは力づよいことだ。それにしても英語が出來なけりやならんが……』と言つたが、彼女をしてほんたうに心の底からその氣になるやうに力をこめる氣に自然となつた。

『少しは下地がありますから、新聞の廣告を見ると、この近所に養成所がありますし〳〵』と久子が言つたのを見ると、幾らか本氣らしいので、

『そんなら其處から規則書を取つて見たらいゝでせう』と定吉は熱心に勸めた。

『え、さうしますわ』と久子は言つた。

暫くみんなは默つてゐたが、やがて定吉は久子の腹のあたりを見て、

『それにしても姙娠では……』と言つた。

『え、それが一つの苦勞ですわ』と久子は長い袖で覆ひ隱すやうにして言つたが、腹はまだ少しも目だつほどには何んともなつてゐなかつた。

『あなたは腹の子に愛着を感じてゐますか』と定吉は女の目の中から眞實を知らうとして覗き込んだが、彼女はそれを避けようともせずに、

『いゝえ、何んとも感じてゐませんわ、たゞ厄介者と思ふたけですわ。だつてまだ子供が腹の中にゐるやうな感じなんか何んにもしませんもの、姙娠してゐるのか、私にはそれすら疑はしいくらゐに思つてゐるんですの』と言つた。

『さうですか、私よく考へて見ませう、私にそのことはまかされますか』

『え、おまかせ致しますわ』と久子はちらつと定吉の顏を見た。

(七)

産科婦人科の私立病院に定吉の親しい友で、定吉が醫科大學を中途でよす迄は、定吉を先輩とし

て敬仰してゐた男がゐる。定吉は午後の手隙の頃を伺つて、彼れを訪ふて、病院の應接室で小聲で談話をかはした。

『……』

……。

『……』

『……？……』

……。

……、……………………。……………………、…………………
……、…………………、……………………、………………
……………、……………、……………、………………』
「………………、……………………、…………………、……………………
………………、………………、…………、…………………
……、……………………………………？」
『……、……』……………………。
『……………………………………、……………
……。……、……………、……………
……。……、……………………、…………、…
……………………。……………、…………
……………………………、…………
……、……………、……………、…………
……、……………………、……………、………

……………………。…………、……………、……………
…………、……………………、…………。…………
……、……………………………。……、………
……、……………………。…………、………
……、……………………。……、……………」』

定吉はそれに就て、一しよになつて笑ふことが出來なかつた。彼れは一そう小さい聲で言つた。

「君の思想はほゞさうだらうと察してゐたんたがね、僕も君と同じ意見なんだ、そこで一つ頼みがあるのだ、敢て君に法律の罪を犯してくれといふのぢやないが、明日一人の女を君のところへよこすから能く診察をして、仁術としての醫師の立派な行爲をやつてくれたまへ、その女はね、處女時代に一人の男と關係したんだ、ところがその男は少しく不良性を帶びてゐるので、それつきり遠く別れてゐたのだ、その間に女は自分の好まない男のところへ嫁にやらせられたが、いやでいやでたまらないので、最近には同衾すらも拒んでゐたといふんだ、そこへ以前の男が現れたつてのさ、遂にその女は自分で去狀を書いて東京へ出奔して來たが、男も東京へ來て共働きして大に働かうといふ約束なのだ、ところが男は自動車學校へ入るお金のために他のお金の出る所の娘

と結婚でもするつもりか、女から離れた形だ、女もさういふ輕薄な男には此方から愛相がつきたといふわけで、獨立生活の方針を立つたのだが、どうもその男、亭主であつた男のことではない、最近に再會した以前の男の子を孕んだらしいんだが、無論其男は自分の子とは認めないと言つてゐるのだ、それがほんとに認めないのか、たゞ口實としてさう言つてゐるのか、要するにその子が此世に產れ出るならば、或は父無し子となり、母は前途が行きつまつて不幸の目に遭はねばならぬといふ次第なのだよ。それで兎に角その女を明日よこすから、能く診察してくれたまへ』

醫師は定吉が語る間、彼れの目を見てゐたが、

『君、その女の腹の子をその女が言ふ通りのものと信じてゐるかね、僕はいま漠とした考へだけれども、矢張り先の亭主の子でないかね、同衾しなかつたなんかて事は容易に信じらるべきことではないぜ、女つてものは……』と言つた。

定吉はうなづいて、

『さうかも知れない、だが僕の考へは、要するにその女自身も自分の腹の子がどつちの男の種だか判然しないのではないだらうか、その女は自分で嘘をついてゐる氣はないのだけれど、自分の都合の好いと思ふ方へ自分の心持が向いてゐるのだと、僕は思ふよ』と言つた。

『よし、まあ、明日その女をよこしてくれたまへ、僕は僕としてその女の行爲や心持を能く診察して見よう、そして最善の方法の相談相手になつてやらう』と醫師は確乎として言つた。

定吉は樂々とした氣持になつて、

『よし、そんなら……、君の方からも一度その女の事情を能く確めてくれたまへ、僕には隱してゐる事情や心持があるかも知れんから……。君の口調ぢやないが、女つてものは自分では嘘を言つてゐるつもりはなくても、一つの事實をいろ〳〵に作りなほして、左も眞實であるかの如く自分が先づ第一に信じ込んで、人に語るのだから、ほんとのことが幾つもあるらしいのだ、はゝゝ』と聲を出して笑つて立ち上つた。

『どうだね、これは、ちとやつて來たまへ』と醫師は碁を打つ手つきをして見せた。

(八)

久子は翌日、早く病院へ行つた、そして『安靜にして居れ、二三日は苦しいが』といふので、二階の六疊の隣の三疊に寢た。三疊の部屋は階段の口元にあるので、六疊へ行くには必ず通らねばならぬところだ。その日になつて妻の知合のタイピストが寄宿舍がいま一ヶ月たてば部屋があくけれど、

今は滿員だといふので、一ヶ月だけ置いてくれと頼んだので、そのタイピストをも二階で寢せねばならなくなつたが、久子を定吉夫婦の六疊へ寢せるか、そのタイピストを寢せるかといふ段になつて、定吉は妻の意見にまかしたので、久子が三疊へ追ひやられることになつたのだ。下の奥の部屋は小僧が寢るので、店は人が寢る餘地などはないのである。

久子はその晩は夜つぴと苦しんでうなつてゐた。定吉は自分で起きて腹でもさすつてやりたいけれど、妻の手前それが憚かられた。だと言つて、妻にさうしてやれといふことも出來なかつた。彼れは曾て久子の傍を通り過ぎる時に、一寸とじやうだんらしく彼女の手を握つたら、彼女も握り返したりしたことがあつたので、彼れは久子のことに就ては、妻をして久子を歡待せしめるやうなことを自分から言ひ出しにくいのだ。

その次の日、定吉は例によつて女事務員を見ることを樂しみに午前中、店番をしてゐると、痩せて細長い三十歳ぐらゐの男が寒中だといふに單衣を一枚だけしか着ず、棒のやうに體を堅くして入つて來た。

『私はかういふ者ですが、御主人にお目にかゝりたいです』と一枚の判紙に「遠山遯吉」と大きく書いたものを出した。

定吉は『この男は狂人ぢやないか』と思ひ、次には『久子の亭主であつた番頭かな』とも思ふたが、樣子が書生上りのやうに見えるので、何んであるか、さつぱり見當がつかなかつた。

『私が主人ですが、何御用ですか』と定吉は店一ぱいになるやうな大名刺と其男の顏とを更代に眺めながら問ふた。

『さうですか、上らして頂きます』と言つて、彼れは案山子のやうな格好で上り込んだ。

定吉は仕方なく、

『ぢや奥へ』と言つて、奥へ通した。

座が定まると、彼れは寒さに慄へながら、

『私はお願ひがあつて參つたものであります、こちらにおゐでの御婦人、あの美婦人ですよ、あなたの御令嬢か、御令妹かどうか存じませんが、あの方を私の妻に頂戴したいのです。私の心はこれです』と言つて懷中から、名刺に使用した判紙と同じ判紙を一枚だしてひろげた。

定吉は無言でそれを開いて見ると、

『日本の神、印度の佛、孔子の天、西洋の神、マホメットの神、天地萬有の神に誓つて、予は御身を妻として愛す、未來永劫その心は變らじ、こゝに血書して誓言す、大正六年一月二十五日、

東京市神田區表猿樂町十七番地、箕輪上總介の二階の住人、遠山遯吉、明治二十八年十月五日生、と書いてあつて、名の下にはどす黑くなつた血の指紋がついてゐた。

『私はこのとほり寒中といへども單衣を着てゐます、これを見ても私の切なる情を汲んで頂きたいです』と遯吉は目に涙を浮べて言つた。

『あなたはあの女をいつ頃から御存じになつたのですか』と定吉は問ふた。

『え、一週間ばかり前から、この店の前を通つて知りました。私は一見してもう私の心は囚へられました。私は腦丸を買ひに入りまして、あの令孃の手から藥を頂戴しました、その際に御令孃は「あなた、腦がお惡いの、お氣の毒ね」と言はれました。私は實はその時、頭に白い繃帶を卷いてゐましたものですから……。なか〳〵御同情ぶかい御令孃と思つて感激してしまつたのです。私が求めに求めた未來の配偶者は彼女をおいて他に無いと考へて、私は眞劍になつたのです。あなたは私を狂人とお思ひでせう、狂人と思はれてもいゝです、私は眞劍なんです。狂せんばかりに私のハートは戀に狂ふてゐるのです』と次弟に亢奮して、言葉を發することが出來ず、ぶるぶると慄へてゐる。

これを聞いてゐる内に定吉は『おれはこの男のやうに、なぜ熱注することが出來ないのだ、おれは

現在の妻などを捨てゝ、久子を自分のものとする勇氣が無い意久地なしだ』と考へたが、自分の考へに自分で呆れて、ふと眼前の男の顏を見ると、はたと當惑した。どうしたなら此男をおとなしく歸すことが出來るかと思案に困つた。

『あなのたお心は能くわかりました、あの女は私の知合の家の娘です、當人は勿論のこと、親元には相談しなければなりませんし、殊に今あの子は病氣で寢てゐますから、暫くお待ちを願ひますと』定吉は言つた。

『えつ、御病氣ですか、それは大變だ、私はこれから家へ歸つて、祈願をこめて病氣平癒を神樣に祈ります、どうぞ宜しくお願ひいたします、また參ります』と言つて、あたふたと飛び出して行つてしまつた。

(九)

三日目の朝になつて、定吉の友の醫師が久子の樣子を見ながら來た。彼女は日中は何んともなくて、病院へ通ふこともしてゐるにのだ。醫師は二三回ふ定吉と闘はしてから、

『今度から僕が白だよ』と言つて歸りしなに、靴の紐を結びながら、

「總てうまく行つたよ」と小聲で言つた。

『さうか、ありがたう』と定吉は禮を述べた。

定吉は血書して來た男のことを久子に語ると、久子は愉快さうに聲を高く出して笑つた。

『お天氣の好い時にどこかへ遊び行かう』と定吉が言ふと、久子は、

『ほんに、ねえ』と天井張を見上げた。

定吉は久子が來てからといふものは、何んとなく心が浮き〳〵して顏色よでが良くなつて、妻にひやかされたりした。久子は『一寸親類まで行つて來ます』と言つて出て行つたが、夜になつても歸つて來ないので、どうしたことかと、妻と二人で心配してゐると、夜の十二時ごろになつて、表の戸をとん〳〵叩く者があるので、小僧を起して誰れだかと問はしめたら、

『池袋の黑田ですが、久子さんが急に病み出したんです、しかしほかの醫者には見せられないのだと言つて、どうしてもこちらのお知合の先生でなくつてはと申しますので、甚だ御迷惑でせうが、直ぐにどうか……』といふのだ。

それで定吉は小僧にその使の者をつけて、友の醫師にやる手紙を持たしてやつた。定吉は久子の持つて來た信玄袋を押込から出して見たが、中はいつの間にかからつぽになつてゐた、彼れは久子が

自分の家から逃げ出して黑田へ行つてしまつたものと認めた。そしてそれは自分の妻が嫉妬を起して、辛く當るものだから逃げて行つたのだと解した。けれども妻がさういふ氣を起して久子を邪魔者にして冷遇するのも、みんなおれが惡いのだといふことを知つて、妻の仕打を止むを得ぬことだとは悟つても、何んとなく大切な物を無くしたやうな物足りなさを感じた。妻は定吉の樣子をそれと勘づいたらしく、暫くはだまつてゐたが、遂に良人の體にはでな寢卷姿で倒れ伏して、傍にタイピストが眠つてゐるので、小さな忍び聲で言つた。

『あなた、すみません、人間の心つてものは淺ましいものですね、私はほんとに申譯のないことをしました、私は、久ちやんが來てから、あなたの樣子が急に嬉しさうに明くなつたので、それはみんな久ちやんのお蔭だと思ふと、久ちやんにあなたを奪はれるやうな氣がして、それも仕方がない、器量と言へ、教育と言へ、歳と言へ、とても私は及びもつかないと考へたら心細くなつて、私もそんなら私だと、遂にほかの男のことなどを考へ、遂ひ隙を見せた爲めにあんな朝鮮人に馬鹿にされて、……久ちやんが今夜歸らないのも、私の素振りが惡いものだから、そのせいなんですわ、あなた、どうぞ勘忍してください』

定吉は妻の背中に手を廻して、神の前に懺悔でもするやうな態度で、

『なあにお前よりか、おれはもつと〳〵不都合なことを考へたり、したりしてゐる、おれこそお前に謝罪せなければ……』と言つた。

妻はひしと定吉に縋りついて、忍び泣きに泣いた。

第十三篇　親孝行と入籍

（二）

一人は早稲田の大學部の學生であり、一人はその保證人をしてゐる楠井といふ横濱の大商店の手代である。彼等は今夜、有樂座にある井上正夫の酒中日記を見たその歸りで、上野行の省線電車を待つとて、有樂町驛のプラットホームに立つてゐるのである。

『まつたく偉いもんだなあ、今でも思出すと、涙が出さうだ』と大學生が言つた。

『うむ、僕は井上が芝居してゐるのだとは思へん、井上自身があの苦しみを受けてゐるものとしか考へられん』と手代は言つた。

二人はその劇の或場面を意識に復起させて、それに漬かつてゐるとみえて、暫くは默つてゐた。

こゝで蛇足かも知れないが、彼等が會話を進めて行くのを傍聽して、その意味を解する上に於て知つて置かねばならぬと思ふから、その「酒中日記」の梗概の必要な部分だけを摘載する。眞面目で正直な大河校長が學校新築費の寄附金百圓を預つて机の引出へ入れて置いた。下宿屋をしてゐてお客と私通したりしてゐる贅澤屋の母親が大河校長のところへ無心に來て、その百圓をこつそり盜んで去つた。大河校長は後でそれを知つて下宿屋の母親のところへ『返してくれ』と歎願に行くと

母親は飽迄も知らぬと言ひ、遂には『お前は親を泥棒にするのか』と母親からどなりつけられたので、彼れは手を空しうして歸路についた。彼れは進退きはまつて途方にくれてゐると、途に落ちてゐる鞄を拾つた。その中には數百金が入つてゐたので、それを持つて家に歸つて、焦眉の急を繕つたが、後でその拾得物隱匿が暴露して破滅の運命に陷つた。これが荒筋である。

『君は大河校長をどう思ふね』と手代は大學生に問ふた。

『僕は、あんなにびく〳〵しなくたつていゝと思ひますね、あんなにびく〳〵してゐるから知れてしまつたのです』と大學生は言つた。

『それがね、中途半端な人間だからさ、拾つたお金を屆け出るほどの正直者でも無く、また拾つたお金を隱して平然としてゐられるほどの不正直者でもないからだ』と手代は言つた。

そのとき青い目玉を光らして、櫻木町行の京濱電車が入つて來て、客を乘降させてからまた出て行つた。「次は京濱電車」といふ掲示が今度「次は山手線」と變つた。

『親孝行つてのも辛いもんだなあ、親が何をしても子はどうすることも出來ないものかね、どういふ譯で、そんなに親つては絶對の權利を持つてゐるものかなあ』と大學生は言つた。

『僕が大河校長のやうな場合になつたら、親不孝かも知らないが、母親が剛情を張つたら、喉を

締め上げて、さあ出すか、出さぬか、出さぬとあなたを殺して私も死にますぞ、あの金がなければ私は自殺しなければならぬのだから、お氣の毒だがお母さんを道連れにしますと言つて、ぐん〳〵締めつけるのだ、そして白狀させるさ』と手代は亢奮して言つた。

『さうですね、それがいゝな、大河校長は孝行に中毒したんですね、はゝゝ』と大學生はプラットホームにゐる人間をみんな呑み込むやうな大きな口を開いて笑つた。

『僕の知合ひに斯ういふ母親がある、亭主がぐうたらであつてね、亭主の生きてゐる内は隨分と身持が惡かつたが、亭主が死んで、悴が一家の主人となつたところがね、その母親は猶か翅をのばして發展しさうなものが、頗る謹直になつてしまつた。それは心からさうなつたのではなくて、さうならざるを得なくなつたのだね、といふのは、母親は悴が怖いのだよ、悴の鋭い目でぐつと睨まれると、母親は隅へ小さくなつてしまふのだ。……僕は考へたね、姑が嫁いびりをするのも、嫁が大河校長のやうにおとなしいからだと思ふ』と手代は語つた。

山手線の電車が來たので、彼等は前の箱に乘つて、寢るやうに身を投げると、

『僕はね、横濱の方をやめるつもりだ』と手代は言つて、洋服のポッケトから金口の三笠を出しかけたが、氣がついて引込ませた。

「どうしてゞすか」と大學生は問ふた。

『昔つからの階級制度があつてね、實に馬鹿々しいよ。店の大將をてんちやう樣と呼ぶんだ、僕は最初『天朝樣』とは怪しからんと思つたよ、ところが「店長樣」のことさ、はゝゝゝ』と今度は手代の方が大きな口を開いて笑つた。

(二)

大學生は或日、例の大商店の手代のところへ欠席屆に保證人の印を押してもらひに來た。この時は手代はもう手代をやめて、洋行の準備をしてゐる頃であつた。元手代は大學生の出した欠席屆を一寸首をのばして見て、

『あれだね、市内電車は中等學校の生徒には割引するが、大學生は紳士と見なして、割引をしないさうだ、ところが學校では大學生を子供と見てゐるんだね』と言つて、また新郎新婦の寫眞に出てゐる「淑女畫報」を見た。

『斯うして見ると、日本の禮服はいゝね、花嫁の正裝は實にいゝよ、ところが傍に立つてゐる花婿のフロック姿はどうだ、まるで大工かなにかゞ突つ立つてゐるやうだ。花嫁が純日本式だのに

なぜ花婿は純日本の羽織袴をつけないのかなあ、羽織袴は禮服としてはいゝになあ』と獨語のやうに言つた。

大學生は籐椅子に體を埋めて、その日の讀賣新聞の婦人欄を熱心に讀んでゐたが、それを元手代の方へ突き出して、

『これを讀んだですか』と「女學生の批評」といふ見出しのところを指した。

『いや、まだ』と元手代は言つて、その新聞を受けとり、そこのところを讀み出した。

その記事は、野口の妻になつた濱田榮子が實家の母に入籍を請求したけれども、聞き屆けられないので、「猫入らず」を呑んで自殺した事件に對する、麹町高等女學校生徒の感想が載せてあるのだ。元手代が讀んで行くと、その代表的なものとしてこんなのがある。

榮子さんの死に對してはたゞ同情のほかありません、生みの母を捨て、家を捨てたのは或一面からは親不孝と非難されるでせうけれども、純な戀に生きんとならば、何事も犠牲とせねばならぬでせう、しかし正式に結婚できないのを苦にして蓮の花ひらく未來を夢に旅立つたとしたら、やつぱり榮子さんも弱い！〳〵女性の一人だつたのでせう。

次には、

榮子の死に驚いて病氣になつたお母さんの心を汲んであげたいと思ひます、我儘な娘にいろ〳〵のことを仰つてやつたのは娘の身の上を心配し、彼女を愛したからでせう、私はお母さんが可哀さうでなりません、

次には、

死なゝくてもよいであらうが！　これが私があの記事を讀んで一ばん感じたことでした、裏面にどんな複雜な事情があるか知れないけれど、榮子さんはほんとに死ぬべき時の死でないやうな氣がいたします、死ぬだけの强さ、それを生に求めて來るべき自己の運命を開拓するだけの强い人でありたかつたと思ひます。

大學生ほ元手代が讀み終るのを待つて、彼れの目を見ながら、

『どうです、一ばん最後のゝがいゝぢや有りませんか』と言つた。

『さうだね、この答案を書いた女は、教科書では此處まで到達することが出來ない、小說を讀んだせいだね、それも「不如歸」とか「金色夜叉」なんかでないものを……。榮子は書置に「どうか復讐をしてくれ」と書いたさうだね、なぜ自分が生きてゐて、亭主と相談して闘はなかつたのか？』と元手代は言つて、うまさうに煙草を吸つた。

二人は暫くだまつてゐた。彼れの細君は犬を屋根の上へ連れて行つて遊ばせてゐる。犬が遊ぶ餘地すらも下には無いのである。

『だいち僕にはわからないことがある、籍を入れないから死ぬ、籍つてものがそんなに大切なものだつてことが僕にはわからん、籍と夫婦とは何んの關係もないぢやないか、自分の戀しい男と同棲してゐれば、それで夫婦ぢやないか……。僕なんか、いま「屋上の狂人」をやつてゐる女と夫婦になつてからもう三年にもなるが、未だに面倒くさいから籍なんか入れてないよ、結婚屆には保證人が二人もいるんださうだ、自分の結婚を保證してもらふのは馬鹿げてゐるからね。妻の實家では、籍も入れてくれないやうなところへは行かれないと言つて、母親はまだ一ぺんも僕の內へ來ないがね、どうして籍なんてことを命ほどに大事にするものかわからん』と元手代がしやべつてゐると、大學生が、

『榮子つて女だつて、そんなに籍を欲しがつてゐるんぢやなくて、亭主の野口つてのが責めるから、それで籍を入れることに氣を揉んだんでせうよ』と言つた。

元手代は目を見張つて、

『その野口つてのが、またどうしてそんなに籍をやかましく言つて、榮子を責めるんだ？』と不

審さうに問ふた。

『それが矢張り、その籍といふものに財産がくッついてゐるのでせうよ』と大學生は言つた。

『あ、さうか、さうなると問題はおのづから別になるね、なんにしても榮子は弱かつたね、弱いものは大河校長でも榮子でもみんな不幸な目に遭ふんだ』と元手代は感慨ぶかさうに言つた。

そこへひよつこり「屋上の狂人」をやつてゐた妻が姿を現した。

『いちつしやい』と彼女は大學生に挨拶をした。

『おい、入日はよかァなかつたかね』と元手代はからかつた。

『まだ朝ですよ』と妻はつんとした眞似をした。

第十四篇　産兒を拒む女教員

（一）

『正直の頭に神やどる、人間は正直でなければなりません、なんでも正直にさへしてゐれば間違ひはありません、嘘は泥棒の始まりと言ひまして、嘘をつくやうな人間はろくな者になれません よ、みなさん』

彦六は神岡先生から修身の時間に聞かされたこの言葉が心に深く刻み込まれた。彼れは神岡先生が大好きであつた。それは神岡先生は年が若くて元氣が好くて、庭球が上手で、面白い話を澤山きかしてくれるからである。

今日はどうしたことか、つひ休んだことのない神岡先生が休んで、いつも唱歌を教へる曾田千鶴子といふ女の先生が自分の級と掛け持ちで教へに來た。彼れはこの女の先生をあまり好まなかつた。彼女は、夏になると、よく澤山とれて始末に困つて脂を搾つた後を肥料にするため濱に積み重ねてある金蝿で埋つた鯖のやうに、うまいところを搾り取られた後の干からびた魚のやうな感じがする血の氣の無い、骨と皮ばかりの、つんけんした二十七八歳の女であつた。

『神岡先生は何んで休んだのですか』と彦六が聞いたら、

『御病氣です』と彼女は只一言いつたきり教案簿のページをめくつた。

すると、後にゐる貸座敷「綠屋」の青瓢簞のやうな子供が足の先で彦六のお尻を突ッついて、

『嘘だぞ、神岡先生はな、今日お嫁さんをとるんだつて』と敎へた。

傍の子供たちはみんな肩をすほめて「くす〳〵」と笑つた。曾田女敎師は黑板の方に向いてチョークを持つてゐたのが、首をねぢ向けて『何を笑ふのか』と咎めるやうに側のある目を光らしたので子供たちは急にしかつめらしい顏に變つた。

『なぜ曾田先生は嘘をつくのだらうか、お嫁取りと正直に言つては、どこが惡いのか、嘘は泥棒の始まりだと言ふから、曾田先生はいまに泥棒になるのかしら』と彦六は思ふた。

彼れは讀本をひろげて、佐々木といふ子供が曾田先生に名指されて朗讀してゐるのを聞いてゐる內に、その方からは心が離れて、挿繪に注目してゐたが、その挿繪の中の多くの學校兒童がみんな袴をはいてゐるのを見て、自分の腰に目をやり、それから周圍の子供の腰をも机の隙間から覗いて見た。彼れは自分たちが誰れも袴をはいてゐないのに氣がついて、再び挿繪の中の子供の袴姿を眺めた。彼れは不思議に感じたので、佐々木といふ子の朗讀が濟むと、手を擧げた。曾田先生が、

『山田さん』と名を呼んだので、

『先生、この本の中の生徒はみんな袴をはいてゐますが、式の時のほかも袴をはいてゐていゝのですか』と質問した。

曾田女敎員はにつこりともしないで、つッけんどんな調子で言つた。

『ほんたうはみんな袴をはくべきものです、この地方はまだ開けないで野蠻ですから着流しなのです。私の產れた地方はどんな山奧へ行つても學校の生徒はみんな袴をはいてゐます、洋服を着てゐるものさへあります。元來和服はこれからの何んでも活潑にやらうとする者には不便なものでみつともないものです。いまにみんな洋服にすべきものです』

彦六は心の中で『この先生は大嫌ひだけれど、言ふことは大へん良いことだぞ、なるほどそれに違ひない、早く洋服を着られるやうにこの町も開けるといゝなあ』と思ふた。

讀本の中に「子寶」といふ言葉があつた。或子供がその言葉の意義を質問した。

『先生、子寶つては何んのことです』

曾田女敎員は敎案簿をぢつと見たまゝ暫く考へてゐたが、首をつと上げて說明を與へた。

「世の中にはいろ〳〵の寶があります、たとへばお金とか、金銀珊瑚に綾錦とか言ふでせう、さういふお寶よりも、子供の方が猶ほ一そう尊いので、それで子寶と言ふのです、お金さへあれば

何んでも買はれませう、けれども幾らお金を山と積んでも、子供の產れないお母さんがあります。なぜ子供が大切かと言へば、年をとつてから親切に世話してくれる者が無ければ困りませう、死んだ後にその家を嗣ぐものなどが無ければ、先祖からの家が絶えませう、お金を澤山ためて置いても、それを引受ける者が無ければ、寂しくて、たよりなくつて、張り合ひの無いものです。年をとつてから、「お爺さん、お婆さん」と子供から言はれて、大切にしてもらふといふことは、幾らお金があつても子供の無い人には出來ないことです。それから戰爭があつても兵隊になつてお國のために盡す者がなければ困るでせう、だからお金よりかも人間は子供を澤山うまなければならぬものです。子供は家の寶、國の寶です、わかりましたか』

彦六は曾田先生の言葉にます〳〵感心してしまつた。けれども嘘をつく先生だからろくな人間ではなからうと言ふ觀念からは離れることが出來なかつた。

わあ〳〵と騷がしい人聲が外から聞えるので、彼れは首をのばして窓の外を覗いて見たら、高等科の生徒がみんな集つて、何か相談をしてゐる。これを知つた子供達は曾田先生の叱るのもかまはずみんな窓のところへ寄り集つて外を覗いて見た。すると誰が言ふとなく、

『明日のお祭に學校が休みでないもんだから、それで高等科の者が團結して校長先生に休みにな

るやうに願つてゐるんだ』と言ひ傳へた。

全校生徒が「蛸」と呼んでゐる一ばん恐ろしい先生が出て來て鞭をひう〳〵と鳴らしたら、高等科の生徒は鯨波の聲を上げて裏門から砂濱の方へ逃げ出して行つてしまつた。蛸先生は後からよち〳〵とふとつた體を運ばして追ひ駈けた。

放課後になつて、彦六は雨中運動場の掲示板の方へみんな人が向いてゐるので、自分も向いて見ると「明日校舍修繕のため休業」と記されてあつた。一同は喝采して外に出た。彦六は『學校の先生はみんな嘘つきだな、お祭で休むんぢやないか？』といふ憤激の情が湧き立つた。

（二）

中林校長は明日の休業を斷行する時には隨分くるしんだが、いよ〳〵休みとしてみると、家へ歸つて來ても、明日の休みが心うれしくて、明日どうして遊ばうかと、そのプログラムを頭の中で考へながら、白い兵古帶に裾をはし折つて、細い脛を出し、朝顏に水をくれてゐると、臺所で夕飯の用意のため味噌を摺つてゐた筈の細君が頭から手拭をとり去つて、少しくあわて氣味に、

『一すと、あなた、來ましたよ、また、あの、それ、いつか、日の暮れるまで子供を留めて置く

法はないと、醉拂つて文句を言ひに來た新聞社の職工が……」と聲を潜めて言つた。

『なに？』と中林校長が解しかねてゐるので、細君は右の手で招くやうな格好をして、

『あの、それ、翌朝、おかみさんに引張られて、砂糖一斤もつて、あやまりに來た……』と早々思出させようとして、手を二三べん動かして「おいで！〳〵」をした。

『は〳〵あ、山岡彦六の親か、……また來たのか』とやつと思出したといふ顏をして、尻をおろして椽から上りかけた。

『え、さうですよ、また醉拂つて來てゐるんですよ』と細君は心配さうに言つた。

『また翌朝は砂糖一斤さ』と中林校長は聲を出さずに笑つて、部屋へ入つて行つた。

部屋には鉛毒のために青ぶくれな顏をます〳〵青くして、血走つた眼を据え、鼻息を荒くしてゐる三十五六歳の爺むさい男が體を堅くしてすはつてゐる。

『やあ、山岡さん、結構なお天氣で……』と校長が先に聲をかけた。

『天氣はどうでもよい、わしは文句を言ひに來たんだ、校長先生と一つ談判を開始するんだ、わしは學問をしないが、毎日々々活字をいぢくつてゐるから、門前の小僧ならはぬ經を讀むで、何んでも知つてゐるぞ』と職工は次第に膝を崩して、腕をまくり出した。

『やあ、私んのは青學問だが、あんたのは新しい學問だ、とてもあんだにはかなはぬ』と校長は成るべく氣を鎭めさせようと仕かゝつた。

『そんなことで人の教育が出來るか、日進月歩の今日に於て、新しい學問を知らんなんて、それを得意にしてゐる、それが校長先生か』

職工の鋭鋒には寧ろ默殺したがよいと考へた校長は、それからはすつかりだまり込んでしまつた。

職工はべら〳〵口をついて論じ出した。

『校長先生、まあ聞いてくれ、此間わしが彦六の野郎に、つまり奴を追ひ使ふ方便に、お祭には輕業を見せに連れて行つてやるぞと言つたんです、すると野郎、今日になつて、輕業を見せに連れて行つてと言ふんだ。べら棒め父つあんは忙しくてそんなことは出來ねいと言つたら、野郎おこりやがつて、父つあんは嘘をついた、嘘は泥棒の始まりだ、父つあんは泥棒するんだらうとぬかしやがるんで、この野郎とんでもねいことをぬかしやがる、おれがいつ泥棒をしたと言ふと、先生が言つた、嘘をつく奴はろくでもない人間だ、泥棒だとぬかしやがつたんで。校長先生、わしはその理屈がわからんのだ、え、校長先生、時と場合には人間は嘘をつかんちやならぬ、それで世の中が丸くおさまつて行くのでございませう。野郎、今日こんなことを言つて泣いてゐました

ぜ、何んとか先生がお嫁を取るとて休んだのを病氣で休んだのだとか、明日はお祭で休むのを校舍修繕のため休業だとか、嘘をついてゐるつて……。しかしわしは、それは貴樣がまちがつてゐるぞ、馬鹿！　と叱りつけてやりました。だが、校長先生、なぜ學校では自分達もやつてゐる嘘方便といふことを、子供には正直にしろ、嘘をいふ奴はろくな人間にはなれないとかなんとか教へゐるんですかえ？　吾黨の政談演說のあつた時、聽衆がそんなに無くても「立錐の餘地なし」と書くのが新聞でがすよ。世の中に立つてどうしてもしなけりやならんことを、學校では、してはならぬと言ふのは一體どういふ譯ですかえ？　ねえ、校長先生、どうです？　返事のないのは降參したのですか、降參したのなら。それでよろしい。

第二、第二には、さうだ、袴をはかなくちやいかん、洋服を着なけりやいかん、この土地の者は野蠻で、開けないから駄目だといふのはどうした譯ですかえ、わしは月給三十圓で、夜業して三十五圓の、餓鬼の五六匹もある人間は、開けようたつて開けられるもんぢやねい、毎日それは羽織袴で四角張りていは山々だが、さううまくは問屋が卸さねい、明日の米櫃の中に入るお米の算段にも困るわしらは、野蠻にならざるを得ねいでがすよ。わしらは子供に贅澤を覺えさせるとて學校へ通はせて置くんぢねい。子供に惡い智慧をつけさせて、親を困らせるといふのは如何なる

理由ですかえ。おい、校長先生、矢張り返事の無いのは降參かな、そんなっよろしい。

えゝ第三と、第三にはだ、そのう、これはどうしても承知か出來ねいことだ、　郎が言ふには、子供をそんなに粗末にしてはならねいと言ふんだ、子供のあるのを有りがていと悅べと言ふんだ。この野郎、ふていことをぬかしやがる、こつちは貴樣達のあるお陰で樂ができねい、くたばつてしめいやがればいゝと思つてゐるんだ、毎日たけいお米を食はせて育てゝ學校へ入れてやつてゐるのだ、貴樣の方でこそ親を有りがていと思へ、とんでもねい間違つたことをぬかしやがると言つてやつたら、彥六の畜生。先生が、金銀珊瑚や綾錦よりか子供は寶だ、子寶だと、桃太郎みていなことを教へたんださうですぜ。子供に親不孝を教へる學校がどこの世界にあるか。わしは名前は言はん、名前は言はんか、その子寶つていことを教へた女の先生だ、そのあまちよめ、親夫婦があんまり子供を產むもんだから、私がいゝ歳をして獨身で教員をしてゐるのはお前さん達や兄弟のためです、少しは私の前へ遠慮して愼しんでもれひていもんですと文句を言ふので、親夫婦も誠に濟まねいと思ふが、さう思ひながらも、矢張り人間の淺ましさには子供を產むので、女の先生は非常手段をとることにして、母親を下に、父親を二階に、ふたりを別れ〳〵に寢させ、自分は階子段のこん中で寢ながら番をしてゐたが、不思議や、それでも母親の腹が次第にせり出して

くるのです。女の先生は學問はあつても、世間のことは暗いのです、夜でなけりや子供は產めぬいものと思つてるるんですぜ、へゝゝゝ。どうです、校長先生、子寶が殖えることをなぜ禁ずるのですかえ』

職工は辯じ立てゝるる內に醉ひがだん〳〵醒めて來たので、周圍を多少かへりみる心が出て來て『これはいかん』と氣がついたらしいが、今更ひつこむ　けには行かないために、無理に勢ひをつけるやうな態度で、

『かう、校長先生、正直にしろとか、羽織袴とか洋服とか、子寶とかなんかんと、金持の學問を敎へることはやめてもれひませう、こちとらは貧乏人ですぜ、貧乏人が世渡りの出來る學問を敎へてやつてくだせいよ』と言ひながら、彼れは干し物が風に搖ぐやうな格好でお辭儀をして、ぷいつと出て行つてしまつた。

中林校長は明朝の砂糖一斤なんてことは忘れたやうに兩腕を組んで暫くぢつとすはつてるた。塀の節穴から近所の子供が目をぱち〳〵光らせて覗いて見てるる。

第十五篇　妻と母との差別

（著者、關西辯を知らず、自己流の會話を以てす）

（二）

英國船マクダフ號は最後の甘藷を積み込み終つて、横濱港を出帆することになつた。三等船客は既に乘り込んで船尾の室に入つた。英國人の第一運轉士と日本人の事務長とがデッキの階段口に立つてゐると、ランチで運ばれた上等船客が四人、ブリソヂを恐る〳〵登つて來た。日本人の事務長は彼等に向つて一々敬禮した。間もなく汽笛が鳴つて、機關の運轉する音が聞えた。

お天氣が好くて、まだ秋も淺く、寒くはないものだから、三等船客は船尾の上甲板に、二等船客は中甲板に出てぶら〳〵した。日本人の荷物方は船尾のハッチの傍に俄造りに建てられた事務室兼食堂の小さな堀立小屋みたいな中に入つて、積込み荷物の送狀の整理をした。支那人の下級船員は荷役で汚くなつた甲板をポンプで汲み上げる海水で洗ひ流した。

藍色の大島を左に見て進む頃になると、日本人の荷物方はみんな事務を終つて、反對の船側にある堀立小屋のやうな寢室に引込み、お蠶棚のやうな各自の寢臺の中に寢ころぶもの、一脚のテーブルを圍んでトランプをやる者などがある。七人の荷物方の中で、只一人、仲間から離れて事務室に居殘つて、徳富蘆花の「思出の記」を讀んでゐる顏色の悪い小男がある。そこへ上等船客の一人が

人つて來た。それは婦人で、二十四五歳にもなるか、髪をまん中から分けて眼鏡をかけてゐる樣子が智識階級に屬する者のやうでもあるけれど、どこと無く仇つぽいところが見える、肉づきのよい色白な女だ。

『なにを讀んでゐらつしやるの』と彼女は馴れ〳〵しく荷物方に聲をかけて、彼れが腰を掛けてゐる同じベンチに腰を下し、テーブルの上にひろげてゐる「思出の記」を覗いた。

『なに、つまらないもんですよ　と荷物方は笑ひながら言つて、本を伏せ、兩手を上に差上げて大きなあくびをしながら、鋭くその女を觀察した。

『あたし蘆花のものでは「思出の記」が一ばん良いと思ひますわ、まあ見られるのは是れくらゐのもんですわね」と女は「思出の記」の表紙を撫でながら言つた。

『どちら迄ですか』と荷物方は問ふた。

『神戸まで……』

『いまお一人、御婦人が乘られましたね、お連れですか』

『いゝえ、あの方は只おひとりなんですよ』

『さうですか、あの年の若い方の立派な紳士のお連れぢやないんですか』

『いゝえ、あたしも最初はさうかしらと思ひましたけれど、さうぢや無いんですわ。でも、後にはどうなりますことか、ほゝゝゝ』と言つて、彼女は荷物方の目を見た。

荷物方もその目を見返した。小屋の中が暗くなつたので、二人が入口の方を振り返つて見ると、そこには大きな體をした英國人の第三運轉士が入口一ぱいに突つ立つてゐた。

『こんにちは』と英國人は言つてにこ〳〵して婦人の方へ向つて愛嬌を振り蒔いたが、その後に續ける日本語を知らないと見えて、たゞ口を動かすだけで默つてゐた。

『カムイン』と荷物方は言つた。

英國人は婦人に接觸するやうにして腰をかけた。女は馴れた形で、唐もろこしの毛のやうな毛の生へた大きな「英國人の手」と握手して部屋を出て行つた。

後に殘つた日本人の荷物方と英國人の第三運轉士とは英國語でしやべり出した。日本人の荷物方の方の言葉は英國語でも米國語でもない英語であつた。彼等の主要なる會話の一部分は、いま去つた女のことに就てである。それもつゞめて言へば、荷物方の方で『おれに手數料を幾らかよこせば、あの女を取り持たう』と言ひ、運轉士は『望みどほりに出すから周旋してくれ』と言ふのだ。

(二)

荷物方と女との話題になつた、いま一人の女と紳士とは、もう仲が好くなつてゐた。中甲板の籐椅子に身を倚せて、斜に向ひ合ひながら話をしてゐる。男は三十五六歳で黒い色の背廣を着て、髭を短く刈り込んだ、大會社の課長級の人物に見える。女は三十歳になつたか、ならぬくらゐの所で、缺點は眼が少しく飛出てゐることゝ、顔の割合に鼻が小さいといふだけのもの、先づ美人といふ方であるが、彼女が光つて見えるのは、盛んな情熱と智的の閃きとがあるせいであるらしいのだ。男の方では熱心に女に注目し出して來た。

船は遠州灘をとほり、時は夕方になつて來てゐた。彼等二人はお互のことを聞き合つてゐた。それは二人とも異性の友を長い間もとめてゐたのを、いま偶然の機會からそれを果し得たのを悅んでその歡樂に陶醉してゐる風に見えた。

『汽車は早くていゝけれど、殺風景ですわね、ほんに海の上は何んとも言へぬいゝ氣持がします わ、あたし今度初めて乘つて見たんで御座いますが、いゝことをしたと思つてゐますのよ』と女は幸福を海に感謝するやうに周圍を見渡した。

『私は神戸の支店と東京の本店とを毎月一度ぐらゐづゝは往復するんですが、いつもは汽車ですけれど、海が好きなもんですから、一年に一度ぐらゐは急ぎの用で無　時を狙つて、かうして船に乘るんです。もうこの太平洋に面すると、陸にゐた時の胸のむしやくしやなんか、すつかり洗ひ流されてしまひますよ』と男は言つて、胸を張つて一ぱいに海氣を吸つた。

女は何處を見るともなく空を見つめて、

『あたしは斯うして、海の上のことだけを思つてゐる時は幸福ですけれど、陸のことを思出すと急に眞暗な穴の中へ陷つたやうな感じがします。でも海のことは夢で、陸のことが現實であるのですから、思出さずにはゐられません』と言つて、首を垂れて膝の上を見た。

男は女の樣子をぢいと見て、

『ぢや、あなた、陸の現實と海の夢を取り替へたらどうです?』と問ふた。

『え、それが出來るくらゐなら……、女は不自由なものですわ』

『ぢや、海の夢を長く續けてゐたら?』

『え、でもこの船は走つてゐますもの』と女は仕樣ことなしに笑ふやうにほゝ笑んだ。

『私は斯う考へてゐますね、私には現實だの、夢だのつて區別なんかありません、いつもが現實

で、また未來も將來もありません、たゞ當面してゐる現實そのものしか念頭に置きません、ですから、今はあなたと斯うして偶然お親しくして頂いてゐることを樂しんでゐるだけです。この船が神戸に着いて、私が上陸すれば、また一商事會社の支店長となるまでのことですよ』

男のこの言葉を目を輝かして聞いてゐた女は、少しく亢奮して來て、

『でも、あなたんのは、船に乘る前の陸も、船から下りての後の陸も、お樂しいことですから、つまり幸福の延長ですもの、そんなのんきなことを仰しやられるんですわ。あたしは寂しい、焦燥な神戸の陸から幸福を求めて東京に參りましたけれど、罪惡と憤怒の焰の中に投じましたので、やう〳〵の思ひで、この海へ逃げて、ほつとしてゐるんですが、また明日は寂しい、焦燥の陸の中に身を沈めてゐなけりやなりませんのですもの』とだん〳〵聲が細くなつて、彼女自身も次第に籐椅子の中に沈み込んでしまつた。

船の一ばん高い所の運轉臺には第一運轉士が右の端から左の端まで行つたり來たりする靴の音がことり〳〵と下へ聞えて來る。時々は機關室へちりゝんと信號が傳達して行く音がする。遠洲灘で日は暮れて、翌日は伊勢灣に入り、船は四日市に投錨した。逞しい體とは不釣合なまぬるい言葉を使ふ荷役人夫が乘り込んで來て、ハッチの蓋を取り、起重機をがら〳〵云はせる音がする。日本

人の荷物方がノートと鉛筆を持つて飛出して來た。

(三)

船は荷役を濟まして、今は志摩沖を熊野浦の方へ向つて走つてゐる。首も脚も細長い荷物方の一人が葡萄酒の箱のこはれて赤い汁が垂れてゐるのを事務室へ持つて來て、

『あの野郎どもはわざとこゝろんで、箱を柱にぶッつけやがつて、こんなにして、流れ出た葡萄酒を呑んでけつかる』と獨語のやうに言つた。

すると前日、高等淫賣を英國人の第三運轉士に取持つと言つた荷物方が、

「やあ、おかしいことがあつたよ、横濱でね、型鋼が一つ足りないと、ぬかしやがるので、僕がこはれた箱から鮭の鑵詰を二つばかり出して、こつそりくれたら、奴、小さな聲で、『旦那、型鋼はありましたよ』と言ひやがつた。はゝゝ』と聲高に笑つた。

三等船客の散歩所となつてゐる船尾の上甲板にはいやらしい婆々が横濱からまだ土くさい十四五歳の娘を連れて乘り込んだのが、娘を腰付けにしてベンチにすはつて海を眺めてゐる。この婆々は神戸の女郎屋のおかみで、土くさい娘は買はれて行くんだと、三等船客の中で物知り顔に語つてゐた

者があつた。二十歳か二十二三歳の娘ともつかず、人の妻ともつかぬ二人の女の跡を、三角形の頂點といふやうな位置をとつて從つて、ついて歩いてゐる職工長といふ格好の男が重い靴をばたりばたりと運んでゐる。職工長を扈從させてゐる此二人の女は、一人は目のめぐりが黑いし、他の一人の女は前齒がまつ黑である。三等船客の中の學生風の男がそれを「齒黑に眼黑」と言つて、始終かなつぼ眼で追ひ廻してゐる。

荷物方の寢室の方を見ると、新しく見習として採用された男が上の寢棚の中にひつくり返つて講談本を讀んでゐるだけで、誰れもゐない。そこへ高等淫賣を毛唐に取持つと言つた荷物方が、自分よりかも背の高い例の仇つぽい其女を連れて入つて來て、見習の寢てゐる下の寢臺に並んで腰をかけてから、前の續きらしい話をしてゐた。

『それで、私は今かうして仕方なくやつてゐますけれど、機會を見てまた上陸します。そして東洋大學へ歸るつもりです。だから正服正帽はちやんとあのトランクの中に仕舞つてあります』と荷物方は言つた。

『こう、感心ね、あたしあなたが一日も早く此處から足をお洗ひになることを祈りますわ。でも、そのお方は今頃どうしてゐらつしやるでせうね』

と女が言つてゐると、上の見習生はむくりと起き上つて、ノートを裂き、鉛筆で「この女、金五圓」と書いて、節瘤だらけの手をのばして、その女の梯のところへ挾んだ。

船は志摩から熊野の陸に近く沿ふて進んでゐる。昨日から見ると、ずつと親しくなつた上等船客の紳士と婦人とは再び中甲板の籐椅子に並んで腰を下して沿岸の景色を眺めてゐた

『では、男の方に慾望を制しろといふのは無理なことでございませうか』と女は、前からの問題となつてゐるらしい口調で言つた。

『まあ、無理ですな、生物學上、男は多量に廣く散ずるやうに出來てゐるのですからね、しかし奥さん、私は、だからあなたの旦那の行爲を是認するんぢやありませんよ。私は妻には妻としての敬意を拂つて、しかして後に妻を辱しめない程度に於て、つまり秘密にです。……御婦人はどうか知りませんが、男は半年も一年も品行方正にゐられるもんぢやありませんよ。

女は男の言葉に上體を微にゆすつて、

『女だつて同じことですわ、それを男ばかりに許して、女は愼まなければならぬなんて、もうもう私は神戸の子供と女中とのたつた三人暮しの生活には耐へ得なかつたのです。それでも良人は一年ばかり前までは二週間目ぐらゐには歸つて來てくれましたけれど、此頃では忙しいと言つて

ふッつり來なくなつたんですもの。私はもう氣が變になるほどに悶えました。それは良人が東京で一人持つてゐると、また餘計なことを私に聞かせる者があるもんですから……。私だつて今迄の行爲でとても一人でゐられる人ぢや無いと思つてゐますから、諦めは諦めてゐましても、長の間のたつた一人暮しの寂しさにはもう耐へ得ませんので、來いとも何んとも申しませんでしたけれど、不意に行つて見たのです。すると噂の通り、ちやんと立派に一人ゐるんですもの。それだけならまだいゝですけれど、どつちが本妻だかわからないやうな態度でゐるんです。が、それも仕方がないとしましても、良人がそれを默認してゐるのが、あたしは腹が立つて、腹が立つて、思ふさま良人を罵つて東京を飛出したのです。つらあてに死んでくれようかと存じましたけれどそんなことで自分の大切な體を無くしては損だと考へなほし、ふと氣がついたのが、この船に乘つて見る氣になつたのでございます』とハンケチを皺くちやに揉みながら語つた。

『さうですか。それはあんまりひどいですね、私だつて、そこ迄は男に同情できませんな。しかしそれも今迄の女の罪かと存じますよ。男のさういふ我儘を女房たるものは貞女として默許してゐるはまだしも、寧ろ相手の女に義理や情を運んだもんですぜ。だからです。……』と男が言ふと、女は言葉なかばに、

『だつて、女をさういふ風に長い間「女の道」として馴らして來たんですもの。……私は決して良人を許しません。私はもう此海から陸へは歸りたくございませんわ』と萎れて言つた。

『ぢや、どうなさらうてんです』と男は女の顏を見て問ふた。

『え、でも陸へ上らないわけには參りませんから、……あたし家を去ります』

男はそれを聞いて、何んにもそれには應ぜず、女と共に考へ込んでしまつた。

(四)

船は夜に入つて熊野沖にかゝつた。海は荒れ模樣なので、みんな船室へ閉ぢ籠つた。見習生の荷物方に「この女、金五圓」といふ札をつけられた例の女は、英國人の上級船員の寢室の廊下の方へ暗黑の中から探り〳〵入つて行つた。三等船客の室は上と下とに仕切られてある老若男女の混合雜居である。薄暗いカンテラが二三ケ所についてゐるだけである。四十歳ほどの色の黑い旅商人らしいのが落語をやると稱して上の段にすはり込んだ。それを聞くとて起き上るのもあり、寢ながら首だけをねじ向ける者も　る。聞くのは耳だからといふやうにお尻を向けて、二人抱き合つて寢てゐるのもある、齒黑と目黑との二人の女は職工長をまん中にして膝にもたれかゝつてゐた。落語はま

るで春滿を言葉になほしたやうなもので、いやらしい笑聲が各所に起つた。

到途あらしがやつて來た。甲板の上を波が洗つて荷物方の堀立小屋にはどしん〳〵と浪がぶッつかつた。内では椅子やテーブルが轉けるので、兵古帶を出し合つて、みんな結びつけ、そしてトランプを始めた。一ばん古參の荷物方は病毒がうつッたといふので、新參の荷物方に洗面器を持たせて患部を洗滌してゐるが、時々船が横波を食つて、はふるので轉げようとした。英國人の上級船員が數とりにする碁石を借りて行つてゐるので、古參の荷物方の一人は、

『おい、廣岡、毛唐のとこへ行つて碁石をとつて來い』と命じた。

新參者の廣岡は棒子を見計らつて甲板に出たが、うッかりすると波に浚はれるので、波の引いた時を狙つて鐵砲玉のやうに飛んで、上級船員室の入口へ突き入つた。英國人の上級船員は寄り集つて矢張りトランプをやつてゐた。廣岡は、

『グットナイト、ブリーズ、ギブ、ミ、ブラックアンドホワイト、スモールストンズ』と言つたが英國人等は、

『ドントノー』

『ノウ、アングースタンド』とマドロスパイプを咬へた首を振つて受けつけなかつたので、彼れ

はしほ〳〵として歸つた。

三等客の室は芋を洗ふやうにごちや〳〵してゐる。右の方へ船が傾けばごろ〳〵として人は右の偶へ一かたまりになり、左の方へ船が傾けば、今度はそつちの方へ一かたまりになる。けえ〳〵と吐く者があり、男女の差別なく獅嚙みついてゐる者もある。齒黑と目黑とは兩方から職工長に縋りついて呻いてゐた。齒黑は職工長の妹で、目黑は職工長の弟の妻だと、他の船客は言つてゐたけれども、そんなことは當てにならぬのである。

上等船客の例の紳士はトランクの中から小さな鑵を出して向ひ合つてゐる部屋のドアーを押し開いて入つた。そこには彼れと親密になつた婦人が船酔ひに苦しんで呻吟してゐた。

「奥さん、これです、これをお上りになればどんな船酔ひでもなほります、洋行して來た男があちらから買つて來たのですがね、私は酔つたことが無いもんだから、そのまゝになつてゐるのです、さあ』と男は言つて、腰をかゞめてそれを差出したが、船が搖れるので、女はそれを取り棄ねたので男は女の手を握つて、それを持たせてやつた。

『待つてください、私、水を持つて來ますから』と、紳士は部屋を出て行つたが、やがてフラスコの中へ八分目ほどなまぬるい水を持つて來た。

『御厄介がけましてね』と女は面を伏せて言つた。

『いゝえ、どう致しまして、私は死んだ妻を二三週間も看病したことがありましたが、……』と男が言ふと、女は首を上げて、目を見張り、

『あなた、奥様はおなくなりになつたのでございますか』と、藥は呑んだけれども、まだ幾分か苦しさが殘つてゐると見えて、苦しさうに言つた。

『え 昨年なくなりました』

『さう、ぢやお寂しうゐらつしやいませうね』

『なに、却てのんきですよ』

女は上體を起した。男はその寢臺の緣に腰をかけた。

『どうです、お心持は？』と男は問うた。

『はい、おかげさまで、大ぶ氣持がよくなりましたが、……あつ、おゝ、……』と女は胸の下あたりを押して前に身をかゞめた。

『どうしました え、奥さん』と男は首をのばして、そこを覗き込むやうにした。

『え、こゝが苦しい』と女は言つた。

その時に船は大きな波を受けたと見えて、急に傾いた。二人はその動搖に會つて偶然か故意か一つに押しつけられてしまつた。

(五)

昨夜の荒れはけろりと忘れて、今日は綺麗に晴れ、和歌の浦を右に見て船は瀬戸内海を辷るやうに運んでゐる。海は少しの波も立たず、たゞ少々廣いうねりがあるだけだ。左に淡路島が見え、前には武庫山が見えて、船はやがて白い字で大きく「フローチング、ドック」といふ字が見えるところでとまつた。もう船が神戸港に入る頃になると、船客はみんな荷物の用意を濟まして、甲板の上に出て陸の方を物珍しさうに眺めてゐた。

神戸の女郎屋のおかみといはれる婆々に猿廻しの猿のやうに一時も傍を放さず引きつけられてゐた横濱在の土臭い小娘は、不思議にも船が神戸に近づくに從つて、一枚づゝ澁皮が剝けて行つたので、日本人の荷物方の中では、そろ〳〵その小娘に注目し出して來た者がゐた。上の棚にゐて女に「この女、金五圓」といふ紙札をつけた荷物方はまだ微兵檢査が終へたばかりくらゐの男だが、ブリッヂの緣に肱をついて神戸の市街を眺めてゐると、常に三角形の一點づゝを位置どつてゐる「齒

黒」に「目黒」に職工長の一隊は、その形を急に崩し、三角形の一點たる「目黒が」抜け出して來て、その若い荷物方の傍に寄り添ふて並んだ。

『まあ、神戸の町は小さいこと、……』と目黒は言つた。

『小さいの、　どうして？　隨分廣いぢやないか』と若い荷物方は言つた。

『だつて、この船よりかも小さいぢやありませんか、それ、この船の長さの、それ、この船の中へ納つてしまつてゐるぢやありませんか』と女は兩手を擴げて、神戸の町を船の中へ入れてしまふやうな格好をした。

『馬鹿だね、そんなこと言へや、この船はまた僕の眼よりかも小さい、それ、みんな眼の中に入つて入るぢやありませんか』と若い荷物方は「目黒」の目の側へ自分の丸い目を近づけた。

『まあ、えゝ、くやしい』と「目黒」は發作的に叫んで荷物方の兩手をしつかと握り締めた。

すると其處へ三角形の他の一點を占めてゐる職工長が急いで駈けて來て「目黒」を引張つて去つてしまつた。

ランチが船側について白い泡を吐くと、上等船客は階段を下りて行つた。例の紳士と婦人とは昨夜の嵐で一そう親密になつたと見えて、夫婦かの如き樣子で船を去つた。それを、まだ船を下りようともしないで、「この女、金五圓」の札をつけられた女は仲の好い東洋大學生たる荷物方と眺めて居たが彼等の姿がランチの中へ入つて消えてしまふと、顏を見合せて、

『ほれ、ね、私の言つたとほりでせう。當時の奥樣方は私共よりもうわ手よ、ほゝゝゝ』と女は言つて笑つた。

乘客が行つてしまふと、代つて荷役人夫が押寄せて來た。營養不良な痩せて小さな、ぼろを着た半裸體の人夫が一俵の米に二人もしがみついて動かせないでゐる。ハッチの口元の甲板にころがつてゐた一俵を、通りかゝつた英國人の第一運轉士が太い手をのばして片手で持上げ、二三度も持上げては落し、鼻を蠢めかして去つた。

『まあ、毛唐は力があること』と第二ハッチの受持ちの東洋大學生の傍にゐた例の怪しい女が言つて、風でほつれる鬢を搔き上げた。

『人夫は神戸が一ばん惡いですよ、まあ一等いゝのは小樽ですね、服裝と言ひ、體格と言ひ』と荷物方は語つた。

『もう、下りようかしら』と女が言ふと。

『今夜もう一晩どうです』と笑ひながら荷物方は言つた。

『え、ゐてもいゝわ、面白いことがあつて？』

『いまにね、うまい酒を御馳走しますよ』

『お酒？』と女は驚いたけに問ふた。

『え、灘の生一本なんてものぢやない、飛つ切り上等を……』

『どうしてそんなのが手に入つて？』

荷物方は萬棒を四角な鮮を引いた中に書き込みながら話した。

『揚荷がすむと、直ぐ積荷になるんですがね、このハッチには全部お酒を積み込むのです。ところが廣小まへを間に敷くのですけれども、鏡が抜けることがあるんですよ、それはみんな會社で辨償せんけりやならんのです。ところが艀の船頭が陸から此處へ持つて來る時に、もうさしとか、いたみとか、かぶりとかいろ〳〵の故障があるので、それを此船に積み込む時に能く見て、三つあるものは五つ六つと餘計にしてやるんですよ。さうすれば此方の方では自分の損害が幾分か減じられますからね』

『まあ』

『すると船頭がせつながるんです、さうでせう、船頭は今度荷主に責められますからね。そこで

奴等は自分の飲料として庫から持つて來た酒を私達に分けてくれて「旦那、どうかお手柔かに」と言ひやがるんですよ。その酒がなか〳〵生一本なんてもんぢないんです』

『まあ、さう、面白いわ』

荷物方は「送り」をコッピーにとるとて、荷物方の事務室の方へ行つた。女は船長室のドアーから此方を見てゐた英國人の第三運轉士を見て、異樣に目を光らせた。

（六）

上等船客であつた彼紳士は新しい友となつた婦人と一しよに陸に着くと、自働車を飛ばして或旅館に入つた。

『先づ此處で暫く休んで、御相談しませう』と紳士は言つた。

彼等は二室つゞきの奥まつた部屋に通された。女は女中が去ると、着物を着かへて大柄なきんしゃの袷の上に伊達卷をしたなまめかしい姿となり、體を崩してすはつた。男はワイシャツ姿になつて兩脚を投げ出して煙草を吸つた。女は耻ぢ入つてゐると見えて、疊の表を見つめたまゝ首を上げなかつた。男は女の樣子を伺つてゐたが、脚を引つ込めて、すはりなほし、眞面目な態度になつて、

『かづ子さん、お名前を呼ぶのを許してください、二人が斯うなつたことをあなたは後悔してゐらつしやるか知りませんが、私は決して後悔をしてをりません。私は初つから眞面目な心を持つてあなたを愛し、尊敬してゐるのです。しかしあなたはこれを過失として、それを過去に葬り去つてしまふお考へですか、再び知らぬ顏をして廣川家へお歸りなさるおつもりですか。あなたがそれを過失としておしまひになれば、私は悲しいですけれど諦めます。が、かづ子さん、さうすると、あなたは姦通をした不貞な女にならねばなりませんよ。……』と此處まで言つて來ると女は上體をばつたりと投げ出し、兩袖で顏を覆ふて疊に伏せ、泣聲になつて、

『いゝえ、いゝえ、私を姦通にしてくださいますな、不貞の女から救つてください、あたしは、あたしは、どこまでも過失ではなく、眞面目な行爲として將來も續けたいのでございます。そのためには、あたし、どんな制裁も、どんな苦しみも耐へます、現在の寂しさと焦燥と嫉妬と怨恨と罪惡との中にあつて苦しむよりかも、ほんたうの戀のために苦しむのは……、それがどんなに苦しくつても耐へて見せます、どうぞ、あなた、あたしを墮落の中から救つてください、あなたが今お手をおひきなさいば、あたしはもうもう地獄に落ちねばなりません。……』と叫ぶやうにして言つた。

男は窮屈さうに曲げた膝の上に兩手を突いて、頭を下げて聞いてゐたが、

『よし、わかりました　御心配には及びません、私も男です、決してそんなことは致しません、あなたがその氣なら私も突進します。二人は過失から姦通から罪惡から、拔け出て、戀の勝利を讃美しませう。けれどもあなたがほんたうに廣川さんから離れ、子供から離れて私の所へ來てゐるのかどうかは、今あなた自身も自分の心を能く知らないのではないですか』と彼れは疑はしげに問ふた。

かづ子はこの言葉を聞いて、面を擧げてきつと男の顏を見つめ、強い調子で、

『村井さん、あなたは私を不貞の妻、姦通した妻とお認めになるのですか、私は決して過失や罪惡を犯したのではございません。私はもう陸から海へ來た時には、良人も子供も捨てゝ來たのでございます。……あの海の上でのことは決して私の出來心や浮氣心から起つたのではございません。……私は、もうあなたを……』と言つて體を柔かくして面を伏せた。

男は低く首を垂れて、

『いや、失禮なことを申しました。……かづ子さん、許してください。……私共はこれから二人の將來を御相談せねばなりません。私は決心してゐます、このために法律上または社會的の

制裁があるならば、それを甘んじて受けます』と言ふと、女は悦びに陶醉してゐるやうな眼を細くして男の顔に注いで、

『私だつてさうですわ、あゝ、私には初めて戀といふものがわかつて來ました、いろ〳〵の罪を犯した女の人だちに同情されます』と聲を慄はして言つた。

二人は感極まつて相寄り添ひ、堅く手を握り合つて暫く沈默を續け、目で物語つてゐた。

『かづ子さん、あなたは有馬の溫泉へ暫く行つてゐてくださいませか、私は事務を整理して二三日の内に參りますから……、そしてゆつくり相談いたしませう、いゝでせう?』と村井はかづ子の機嫌を伺ふやうに問ふた。

かづ子はたゞうなづいてゐたが、

『早く來てくださいよ』と體にしなをつくつて言つた。

『え、一時も早く參ります。あなたは直ぐ此處から行きますか』と村井は問ふた。

『いゝえ、私はひとまづ廣川の留守宅へ歸りまして、後の事を能く乳母に言ひつけ、それから參ることにします』とかづ子は考へ考へ言つた。

村井は樂に體を崩して、

『子供の顔を見て未練を起すんぢやありませんか』とじやうだんらしく言つた。

かづ子は下を向いて、

『え、それは仕方がありませんわ。けれども陸から海へ逃げる時にもう覺悟してゐたんですもの、私は薄情なのか知りませんけれど、とても子供のために自分を犧牲にする氣は起りません。自分が生きるためには子供なんか捨てねばならぬといふ強い心を持ちたいのです。でも、そのために子供に非常な不幸でも及ぼすとなら、それもためらはれますけれど、廣川は子供だけは大變に愛してゐますし、女中兼帶の乳母がゐまして、子供は私よりかも乳母に能くなついてゐますから、私の跡を追ふやうなこともございませんし、……』とだん〳〵獨語のやうに言つて來るのを、村井は聞きながら支度して、

『御讀みになつたのがあるかも知れませんが、これを……』と言つて、新刊小說を四五冊だし、かづ子の前にやつた。

かづ子は立つて上衣を彼れに着せながら、胸と顏とを彼れの背に押しつけて暫くは動かなかつた。

村井はそれから外套を着て、

『私は、それではこれから宅へ一寸と寄つて、直ぐ會社へ參ります。あなたはゆつくりして……

……、多分明後日は行かれると思ひます、きつとです』と言つて、ポケットから財布を出して彼女に渡さうとした。

彼女は少しく躊躇してゐたが、だまつて受取つたので、

『では……』と言ふと、二人はつと相抱いて……。

彼女は男の心を狂はうしくさせるやうな姿をして打伏してゐたが、立つて欄干に倚つて村井が自働車で去る後をぢつと見送つてゐた。その樣子には、男はこれつきりで自分のところへは來ないのではないかといふ不安と、戀の甘きに醉ふ歡樂と疲勞と、心の底にじわ〳〵と湧く罪の惱みとを感じさせるものがあつた。

(七)

澁谷の高燥な地に大きな屋敷があるが、主人は二三年前に死んで、後は未亡人と子供と二人の無人であるのと、部屋が澤山あるところから、離れの二室を人に貸して置く。此離れを借りてゐるのは廣川と言つて、大きな市の中學校長までした男だが、文部省と喧嘩して休職となり、今は東京で一の事業を企てゐるとて、有志を集める爲に奔走しつゝあるのだ。郷里は神戸の近村で、其處には

妻のかづ子と三歳になる男の兒とがあるのだ。彼れは事業の都合上、東京にゐねばならぬので、家族も共に連れて東京に移住したならば良かりさうなものが、彼れは文部省と意見が衝突するやうな進歩した思想をも持ち、勇氣もありながら、妙に郷土に就ては執着心を有し、先祖の跡は斷ちたくないのである。一つには多少の世襲財産があつて、それを土地の人の少數に貸付けてあつたりするので、それらの事務もある關係からして、妻子だけを先祖の地に止めて置くのである。

そして彼れは東京で部屋借りの生活をしてゐるのであるが、その供給所から家政婦と稱する者を一人よこしてもらつてゐる。しかしそれは今迄の姿と實質に於ては變らぬので、たゞ文明がそれに尤もらしい衣服を着せたゞけのものであるが、審姿を誇りとしられない今日に於ては、紳士にとつては都合の好いものである。

妻のかづ子が久しぶりで來たのに、怒つて泊りもせずに直ぐ歸つた後で、廣川が家政婦の岸邊定子を少しも顧みず、腕をこまぬいて考へ込んでばかりゐた。それを見た岸邊定子には何事か決心するところがあつて、彼れの前に出て言葉を改めて言つた。

『あなた、私にお暇を頂かせてください』

廣川は不審さうにして問ひ返した。

『なぜ？』

「私がをるために、奥様とお仲が悪くなりましては、私が濟みませんでございますから……』と彼女が言つたので、廣川は皮肉な笑を面に浮かべて、

『あなたはそれを本氣で言つてゐるのですが、駈引はよしませう、もし私が「さうですか、それなら御隨意に……」と言つたら、どうしますか』と詰つた。

愛國婦人會といふやうな樣子をしてゐた岸邊定子はかつとなつて、すつかり顏の造作を崩し、無教育のヒステリーの女のやうな木地を暴露して喚き出した。

『いゝえ、私は失禮ながら駈引などは致しません、もうあなたが何んと仰しやつてもお暇を頂きます。しかし此まゝでは參りません、婦人を弄び、欺いたことに就ては、名譽回復と損害賠償の訴へを致しますから……』

廣川は益々落ちついて、

『あなたがお暇をおとりになることは御隨意ですが、どうして私に名譽回復と損害賠償の訴へをなさるのです。私がいつあなたを弄び欺きましたしか』と問ふた。

彼女は膝で二三寸も歩き出して來て、

『さうぢやございませんか、その内にあなたを本妻にするなんとか言つて、たうと私を……、ですのに、今日あんな女にさん〴〵罵られても默つてゐるやうなあなたでは、いつ私を本妻になほしてくださるのか、今も今とてそんなにふさぎ込んでゐらつしやるところを見ると、私はもう斷念しました。私は欺かれたのです、え、え、私はもう決心しました』と遂に聲を擧げて泣き伏してしまつた。

廣川はつと立つて帳簞笥の前に行き、腰から鍵をとつて、帳簞笥の引出をあけ、小切手帳と實印とを出して來た。それから暫く萬年筆を持ちながら考へてゐたが、小切手に數字を書き込み、實印を押して、泣き止んだ岸邊定子の前に突き出した。彼女はすつかり泣くのをよして、その小切手の額面を見て、それから廣川の顏を見て、驚いて何んにも言ふことが出來ず、たゞ默つてぽかんとしてゐた。廣川は顎でその小切手を示して、

『さあ、それを差上げますから、直ぐお引取りを願ひます、その小切手で、まだ文句があるなら御勝手にお訴へなさい』と嚴しく言つた。

これを聞いた岸邊定子は眞青の顏になつて、

では、ほんとうに、ほんとうに私を……』と聲を變へて問ひ寄つた。

『さうです、私の妻を「あんな女」とは何んです、私の妻を侮辱し、且つ私を侮辱するものです。私は今日妻が來た時に、あなたから下座に下つて、妻を上座に直して、私の妻としての敬意を拂つてもらつたら、私はどんなに悅んだでせう、妻が怒つて歸つたのは尤です、いや、決してあなたのやうな女に對して怒つて歸つたのではありませんよ、私に對して怒つて歸つたのです。私はあなたのために妻に下劣な男として見下げられてしまひました。その上またもや「あんな女」とは何んですか。……私は決してあなたを欺きはしないのです、其内に妻を出して、あなたを本妻に直さうと考へてゐたのです。けれどもあなたの今日の態度や今の言葉では私はあなたを見損なつてゐたのです。欺いたと言へばあなたこそ私を欺いてゐたものです、今日その本地を漸く現したのです。私の妻はあなたにくらべれば、數等立派な心の女です。妻が怒つて歸つたことが、私の胸をいま頻に責めてゐます。あゝ、私はとり返しのつかぬことをしたんではないかと、不安の念に驅られて惱んでゐるのです。あなた、早く私の前から消えて無くなつてください』と彼れは眼を血走らせて激昂して來た。

女は打のめされたやうにして、兩手を突き、首を垂れて、

『あなた、どうか許してください、私が不心得でございました』と言つたが、顏はその殊勝な心

を裏切つてゐた。

『いゝえ、いけません、早くその小切手を持つてお引取りください』と廣川は言つて、次の部屋の書齋に入つてしまつた。

岸邊定子は小切手を手に取つて、書齋の方へ目をやつて、うんと口をへし曲げた。

(八)

廣川は家政婦を追出した後には母家の娘から食事を運んで貰つてゐた。彼れは心に何か考へることがあると見えて、その後は事業のために奔走せず、終日部屋に閉ぢ籠つてゐて、時たま障子をあけて庭を眺めたりしてゐた。

其處へ明るい輕い下駄の音を立てゝ母家の娘が郵便物を持つて來て、

『近頃はちつともお出ましになりませんのね、どこかお悪いんではございませんか』と愛嬌を面に堪へて問ふた。

『いゝえ、その、少し頭が……』と彼れは答へてはゐるが、多くの郵便物の中から女字の封書に目をつけると、その方へ氣をとられてしまつてゐるので、娘はそのまゝ、また下駄の音をたてゝ

立ち去つた。彼れが心を引かれた女文字の手紙は彼れの妻かづ子からのであつた。裏を返して見ると「有馬溫泉、兵庫屋方　としてある。彼れは眉を顰めて首を傾けた。そして兎に角といふので急いで封を切つて長い〳〵手紙を讀み出した。最初に「廣川忠次樣」としてあつた。彼れは先づその書き初めに驚かされたらしかつた。

廣川忠次樣、私はこれからあなたを左樣お呼び致すことにしました、先日澁谷のお宅でお目にかゝりました以來、私はもうあなたから去つた者でございます、私は數年間あなたの不身持について悲しみ、苦しみ、悶え、怨みました、けれども日本の女の悲しさには、自分を侮辱されたものとは思ひませんでした、そして己惚れ深いために、それでもあなたが私を愛してゐてくださるものと信じてゐました、いや、自分で信じようとして來てゐました、信じようとして來てゐました、そして留守宅をあなたのため、子供のために寂しいながらも守つて來てゐました、あゝ、私はあなたが東京で他の女をお持ちになつてゐることも聞かされて、どんなにか嫉妬の焰を胸に燃しましたことか、あゝ、私は一年此方、たゞ獨りで、寂しく、どんなに毎夜々々、人知れず狂ふ血をぢつと押へてゐたことか、遂に戀しく、焦れる身に耐へ兼ねて、來いとも仰しやらなかつたけれども、あなたの許へ參りました、參つてすぐかり私は打のめされてしまひました、あなたが他の女をお持ちになつてゐることは仕方の無いことゝして、日本の女たる私はだまつてゐるつもりでした、けれど、あゝいふやうに、これ見よがしに私の前へ突き出され、どつちが家の主婦であるかわからないやうにされましては、私の妻たるの體面、人格がみんなゼロになつてしまひました、私はあの女の態度に就て、あの女を怒るのではございません、私の良人であつたあなたがあの女にそんな態度をさせて傍觀してゐらつしやるのを私はあなたに對して怒つたのでございます、私はあなたの態度を見て、魂の底から怒りが起りました、私はあなたのために悲しまされ、苦しまされ、嫉妬を燃させられました、けれども侮辱されて居るとは存じませんでした、ところが眞向上段に鐵槌を以てがあんと叩きのめされたやうな侮辱を受けました私は、いくら日本の女でも許して置くことは出來ません、それに、それに實に殘念で無念でなりません、あの女が私よりも肉體的にも精神的にもずつと立派で優れてゐて、私が思はず頭が下るやうな女であれば、私は或はあの女の侮辱を仕方のないものとして諦めたかも知りません、けれどもあの女はどう見ても、私よりは肉體的にも精神的にも、殊に精神的に於て劣等の女です、あんな女と私が見かへられたかと思へば、口惜しくて、遣る瀨なうございます、私は其時のあなたの態度を見まして、私が侮辱されたことを感ずると同時に、あなたの人格を見下げ果てゝしまひました、私はあなたの妻として甘んじてゐる心

は根底から無くなりました、私はもう殺されてしまつたやうな思ひをして、あなたから逃げ出しまして、心の死んだこの身は一そのこと肉體も殺してしまへと思ひ込みましたけれど、自分の身が大切なためにあなたから侮辱されて憤つた私が、そのために自分の身を亡ぼしてしまふといふことは矛盾したことで、死ぬなんかてことは自分を輕んずるものだと氣がつきまして、海上に逃げ込みました、茫々たる太洋は私を廣い世界に出してくれるものと存じまして、心からあなたと永久のお別れを告げまして、英國船に乘りました、太洋は私に實に廣い麗し　世界を開いて見せてくれました、私はその廣い麗しい世界のエデンの花園に飛び込みました、そして私はその花の香に醉つてしまひました、私はいま幸福を感じてゐます、私はあなたを捨て、子供を捨てゝいまは松岡商會の神戸支店長である村井八太郎といふ男の妻となつて、この有馬溫泉にをります、あなたは私を不貞な妻として姦淫罪にお問ひになるかも知りません、けれども私の心は姦通もしません、不貞の妻とも思ひません、私は澁谷のあなたのお宅を逃げ出す時にあなたを捨て、子供を捨てた者です、私は自由な身を以て自由な行動をとつたまでゞございます、しかしあなた及び世間や法律は私を姦通した不貞な妻として責めるでせう、その制裁は甘んじて受けます、村井もまた言明しました、そのためには名譽も社會的地位も拋つて悔いないと申してをります、あなたは

あなたのお心まかせに、私共を姦夫姦婦として御制裁をお加へくだされても私共は決してお怨みは致しません、あなたを私が捨てたやうに當りますけれども、あなたは私より先に、私をもうお捨てなさつたのですもの、私共はいま二人して有馬溫泉にゐます、逃げも隱れもいたしません、私共は眞面目な戀に生きてゐるのでございます、天地に恥づるところは毫もありません、しかし世俗から見ますれば確に罪人でございます、私共も肉體を所有してゐる限りは世俗に從はねばなりません、故に私共はこの有馬溫泉であなたからの充分の處分を從順に待つてゐるものであります、私が英國船の中に於て村井に心を許すときに既に充分の覺悟をきめてをりました、神戸の家は後始末をよくして出ました、後のことは乳母が子供を大切に保護して留守居をしてをる筈でございます

これを讀み上げた廣川はすつかり其場にへたばつてしまつた。彼れは再び腕をこまぬいて考へたが全身を駈けめぐる苦痛に堪へ兼ねて、部屋の中をころげ廻つた。

『あゝ、おれの豫感が的中した、取り返しのつかぬことをした、おれが惡るかつた』と彼れは唸くやうに口走つた。

(九)

廣川忠次は幾ら考へてもどうして見ようも無かつたと見えて、彼れは仕掛けた事業の方から手を引いて、取る物も取りあへず、神戸に急行して自分の宅に一年振りで歸つた。汽車の中を考へ通しに考へ通して來た。三歳の男の兒を抱いた乳母が安心したといふやうな面に笑を浮べて出迎へ、

『これ、お坊つちやま、お父さまがお歸りになりましたよ、お久しぶりに、覺えてゐらつしやいますか』と子供に言つても、子供は怪しい物を見るやうな表情をして乳母にしつかりと抱きついてしまつた。

子供の顏をぢつと見て、それから乳母の顏を見た廣川は首を垂れて、

『あゝ、濟まなかつたね、許しておくれ、おれに捨てられ、今度はお母さんに捨てられ、坊や、今度はね、おれかお父さんが側について決して離れないよ、今迄の倍の倍も可愛がつて上げるよ』と小さな手を取つて言つたが、目には涙を溜めてゐた。

乳母は袖で顏を覆ふて泣き出した。それと同時に子供もわつと泣きわめいたので、急いで乳母は乳房を出して含ませた。廣川はその大きな豐滿な乳房を物珍らしさうに眺めた。それから彼れはづか

づかと奥の座敷へ行くと、妻の殘して去つた白木の箪笥が一年前に見たところに矢張りちやんと据えられてあつたのに目がとまるや、つと寄つて右の手をそれに掛け、その腕に顏を押しつけて、體に浪を打たせて搾り出すやうな低い聲を出して泣きくれた。

乳母は泣き止んだ子供を寢せつけてから、主人の部屋へ火を持つて來、お茶を出して退いた。彼女は彼れの悲歎の樣子を見たが、何んにも言はず、同情ぶかい目を送つては、ほろ〳〵と涙を流してゐた。廣川は箪笥から離れて、自分の部屋として長い間彼れを待つてゐた座布團の上にすはつて、沈思默考をしてゐた。それから彼れは再び立つて箪笥の中から押込に至るまで、すつかり調べて見た。そしてまた座布團の上に歸つて來て、傍にあつた机を自分の方へ引寄せ、その上に體をねじ向けて両肱を突き、顎を手の上に乘せた。暫くしてから彼れはかづ子へ宛てゝ手紙を書いた。

私はあなたに對して、廣川かづ子樣と書くことの出來なくなつたのを、憤怒と怨恨と悲歎とに悶えてゐる、しかしまだ「村井かづ子樣」と書くことが出來ないでゐる、私は憤怒と怨恨と悲歎とにくれてゐることはゐるが、あなたの行爲を仕方のないことゝして同情が出來る、何んと言はれても何をしられても、私はあなたを咎めることは出來ぬ、まつたく私が惡かつたのである、けれども是れだけのことは了解してゐてもらひたい、それは斯うである、私はかの家政婦たる岸邊定

子を追出した、その理由は、あなたが來た時の彼女の態度は、あなたを辱しめ、また私をあなたの前につまらぬものにさせたからだ、そして今は計畫した事業の一切を抛つて鄕里に歸り、あなたが殘して行つた子供のために一生を捧げることにした、あなたは私を捨てた、されど私はあなたを捨てない、あなたは私を良人と思はなければ、確にそれは良人ではない、しかし如何に考へても子供はあなたの產んだ子供だ、時間を逆に返すことが出來ないとすれば、子供をあなたの腹に返すことも出來ない、この意味に於て、あなたは何處までも子供の母であり、私はどこ迄も子供の父である、私は母としてあなたを捨てようとしても、子供の存在が確實であるだけ、それだけあなたの母たることは確實なことだ、故に私の家はあなたが如何なる場合に於ても、如何なる所業に於ても、子供の母として歸つて來ることの正當の權利があり、また私にそれを拒むの權利がない、それであるから、私はあなたが歸つて來ることを何時でも歡迎するつもりである、私はあなたが私から去つて、新なる戀に自分の生きる道を發見したことを皮肉でなく本氣に祝福する、しかしその戀の對象として村井八太郎を撰んだことにとつては、多少の疑惑と不安とがある、私は村井八太郎なる者を能く知つてゐる、彼れは一種の色魔であつて、彼れのために如何に多くの女が弄ばれ、傷けられ、欺かれ、不幸な境遇に陷れられたかは知る人ぞ知るだ、あなたが運命とは

言ひながらそんな男の手に落ちたことを悲しむ、しかし彼れがあなたのために名譽も社會上の地位も捨てると言つて、私からの制裁を甘んじて受けると稱してゐるのが、どれだけの眞實性を有してゐるかは知らないけれども、その態度には敬服させられるものがある、でも、それが僞りのものであるとすれば、彼れのあなたを陷れ、弄ぶ奸計の巧妙さに驚嘆せざるを得ない、そんなやうな所からして、私はあなたの前途にとつて、頗る危險と不安とを感じてゐるのだ、しかし安心するがいゝ、あなたは母として、自分の子の家が私の所に在ることを忘れないで、いつでも行き詰つた時には來ることが出來る、私は其時の來ることをあなたのために悲しむが、またそれを悅ぶ心もある、子供のためにはそれが最も幸福のことであらうと思ふからだ、あなたは村井の態度に就て疑しい點を發見しないか、まだ發見しないとなら、今後の態度を能く注目して、彼れのために女性を蹂躪されぬやうにせねばならぬ、私は子供と乳母とで現在の家にいつ迄も住んでゐるつもりだから、歸りたくなつたらいつでも歸つて來てよい、私は子供の母としてあなたを厚手を擧げて迎へるであらう、あゝ、私の過失からして、二人の仲を取り返しのつかぬことをした、これは私の一生涯に於ける一大恨事である、私の嫉妬と寂寥と悲憤とは言句に盡されぬものだ、この苦しみと同じ苦しみをあなたに今迄させてゐたかと思へば、私は自分の現在の苦しみを耐へて

行かねばならぬと考へ、ぢつと靜かにその悶えの中に浸つてゐることにせねばならぬ、子供のことは心配しないでもよい、乳母と私とが全身を擧げて彼れのために盡すから……、籍の方はそのまゝにして置くつもりだが、あなたが村井の方へ引取りたいと言つて來れば、いつでも、心好くではないが、必ず引渡すことにする。それまでは私の所に置く、

彼れは書き終つて、いま一度それを讀みなほし、乳母に投函せしめた。そして彼れは仰向けに寢て「あゝあ」と苦悶に耐へぬやうなあくびと嘆息とまじつたものを發した。乳母が郵便を出しに出て行つた後で子供が目をさまして、わあ〳〵泣き喚いた。彼れは起き上つて子供を抱き上げ、妙な格好をして、それをだましに掛かると、子供は泣きやんで、彼れを見て笑ひ出した。彼れはそれを見ると、子供の頰に自分の頰を摺りつけて、涙をほろ〳〵と流した。

(十)

かづ子は村井八太郎と有馬の溫泉に中年の燗熟したる戀に身も心も陶醉せしめてゐた。彼女は湯上りのなまめかしい姿をして、緣に近く持出したちやぶ臺に村井と向ひ合つて座し、晩餐の酒を呑みかはしてゐた。

『ね、あなた、一人でゐるのなんかいやよ』と彼女は體を搖つて、あまへるやうに言つた。

『だつて、私は忙しい身だもの、いつまでも斯うしてゐられやしないよ、一週間もたてばまた必ず來るからね』と村井はなだめるやうに言つた。

『それは私だつても、あなたの御職業のお妨げしようとは存じませんわ。あなたの行らつしやるのをお引止めするんではなくつてよ。あたし此處に斯うしてゐるのはのんきでいゝけれど、ひとまづ私はあなたのお宅へ身を落ちつけて、それからまた出遊びたいわ。さうしなくつては何んだか心が定まらず、身の納まりがつかず、だいち私はあなたをほんたうに自分の良人だと思ひ込む氣になれんのですもの、このまゝ斯うしてゐるのは、何んだか旅先で浮氣でもしてゐるやうな調子で、私いやだわ』と彼女は思ふさま體を曲げて頸を襟の中へ埋め込んで怨ずるやうに言つた。

『はゝゝゝ、女つてものは、自ら好んで家といふ殼の中に閉ぢ籠りたがるものだなあ』と村井はあぐらをかきながら、胸を張つて言つた。

『だつて、……家を殼として見るんぢやありませんわ、二人のホームとしての家を要求してゐるんですわ、ホームをかたち造らなくては、そこにほんたうの夫婦らしい感じは起るまいと思ふのは間違つてゐて！』

女は酔つてとろりとした目で村井を見つめると、彼れは二三度うなづいて、

『いや、私もそれは考へてゐるさ、けれども私の今の家へ直ぐと言ふ譯には……、それはね、私の姑といふのが馬鹿にやかましいので……、その内には……、うまい具合に樣子を見て姑に納得させて正式にやるつもりだが、それまでは……』と言つて來ると、女はそれを引取つて

『それはわかつてゐますわ、私、なにも今すぐにお姑樣と一しよに暮したいといふんでは無いのよ、別に家を持たせてくだざればいゝぢやございませんか』と少しく鼻聲で言つた。

男は聲の調子を強めて言つた。

『それだから、私が一たん歸つて、適當な家を目付けるのさ、それからあなたを迎へに來るんだよ、わかつた?』

かづ子は片手を疊に突いて、別な方の手で疊を撫でながら、安心したらしく嬉しさうに、

『そんなら、いゝけれど……』と言つた。

そこへ女中が郵便を持つて來て、彼女に渡して去つた。彼女は裏の差出人の名を見ると、さつと顏色が變へて、村井の方を上目づかひにちらつと伺つてから、手先を慄はして封を切つて讀み出した。

彼女は讀んで行くに從つて次第に全心をそれに打込んで行くやうに、樣子を見てゐた村井には感じ

たらしく焦燥の氣が眉宇の間に漂ふて來た。彼女は遂に涙が頰に傳つて手紙の上に落ちたのに驚いて村井に隱すとて全く身を彼れから背けてしまつた。そして讀み終ると、帶の間へしつかり仕舞ひ込んだので、手を出しかけた村井はその手を引つこめて、沈み切つてゐる彼女に、

『おい、何處から來たのだ』と問ひかけた。

『え、廣川から來てよ、……私が惡いので、お前から逃げられても仕方のないことだ、私はあきらめてゐるから、お前の自由にしろ、籍も欲しいければ、いつでもやるつて言つて來ましたわ』と彼女は咽ぶやうな聲で言ひ終つた。

『へえ、馬鹿に思ひ切りよくあきらめたもんだなあ、矢張りあなたに愛相がつきてゐたので、願つたり、かなつたりなんだね』と村井は廣川を小馬鹿にしたやうな言ひ方をした。

すると彼女は、駿馬が鬣を立てなほしたやうにきつと面を上げて村井を見、

『あなた、廣川をそんなに侮辱するやうな態度を見せてくださいますな』とたしなめた。

『ほう、これはあなたの御亭主を私が若し侮辱してゐたならばお宥しをねがひます』と彼れはわざと皮肉に頭を一つ下げた。

『あなたはまあ、……』と彼女は言つたが、憤激のために言葉をもう續けることが出來ず、眞

奮な顏をして村井を睨みつめた。

『おい、その手紙を見せろ』と村井は顏色を變へて手を出して、言葉あらく言つた。

彼女は兩手で帶のところを隱すやうにして、上體を左右に搖つて、きつぱり退けた。

『なに？　いやだ、私に見せられないやうな手紙を男から受取つてゐることは許すべからざることだぞ、さあ、見せろ』と村井は醉つて少しくよろめく足を女の方に運ばせて、

『さあ、見せろ、怪しからん、手紙を見て泣いたりなんかしたぢやないか、享主が戀しくなつたんだらう』と罵つた。

彼女は依然として帶をしつかと押へて、鋭く聲を振り搾つて、

『あなた、何を仰しやるのです、ものには言ふべきことゝ、言ふべからざることゝあります』と言つて、怒りのために身をわな〳〵と慄はせた。

『なにを、……手紙を私に見せないのが何よりの證據だ、さうで無かつたら見せろ、見せなければ腕力に訴へても取つて見せるぞ』と村井は喚いて、女の頰桁を一つぽかんと喰はせた。

彼女は忽ちに石の如く堅く冷たくなつてしまつた。その面は凄愴の氣を示して來た。その樣子を見た村井は正氣に返つたのか、たじ〳〵として、そのまゝ其處に突つ立つて喘いでゐた。彼女は靜に

帶の間から最前の手紙を出して皺をのばし、臺の上に置いて、

『さあ、御覽なすつてください、私はあなたにそれをお目にかけては、あなたをお辱しめ申すやうにあたりますから、お目にかけないことにしたのでございます、それをあなたが腕力に訴へてまでも私からそれを取らうとなさるのは、今度はあなた自らお招きになる不愉快でございますから……』と緩かな調子で言つた。

しかし村井はそれを取つて讀まずにはゐられなかつた。彼れは手紙をとり上げ、どかりと腰を下して讀み始めた。

……私は村井八太郎なる者を能く知つてゐる、彼れは一種の色魔であつて、彼れのために如何に多くの女が弄ばれ傷けられ、欺かれ、不幸な境遇に陷れられたかは知る人ぞ知るだ。……

この文句を讀むに到つて、彼れは非常に激昂してしまつた。彼れは手紙を能くも讀み終らずに、それを力を込めて投げつけ、女に向つて腕をのばし、前襟をつかんで、

『貴樣は、貴樣はこの文句を信じて、さつきからあんな態度をおれにしたんだらう、おれが、色魔だと、ようし、さう思ふなら、思へ、これ、貴樣はそれを信じるのか』とどなつて、彼女を押し倒し拳を奮つて毆りつけた。

『え、殘念だ　あんな奴にこんなことを言はれて……』と獨語を言ひながらどし〳〵と部屋の中を歩き廻つてゐた村井はぷいつと外へ出て行つた。

男にされるまゝにしてゐたかづ子はやう〳〵起き上つた。頬から冷い涙が流れて、それが夕方の光線に光つてゐた。彼女は村井が投げつけて行つた手紙を再びとり上げて、初めから讀みなほした。次第に頭を下げて行つたが、遂に疊の上に上體を伏せて明び泣いた。そしてその手紙をしつかと抱きしめた。其時ぱつと電燈がついた。

（十一）

かづ子と村井とはその夜は兎に角、仲なほりが出來た。昨夕の衝突がなかつた前は、今朝村井は神戸に歸ることになつてゐたのが、今朝になつて見ると、昨夕の衝突が原因を爲したのか、どうかは知らぬが、村井は「歸る」といふことをおくびにも出さず、朝つからごろ〳〵と寢ころんでゐるので、彼女の方で氣を揉み、

『あなた、お歸りにならんで宜しいのでございますか』と注意した。

『あなたは私を邪魔にするのか』と村井は物に當るやうな言ひ方を直ぐした。

『知りません』と彼女は横を向いて冷く言つて、堅い顔をするやうになつた。

村井は寢せてゐた首を起して手をのばし、時計をとつて時間を見ると、むくりと起き上り、

『一寸と散歩して來る』と言つて、そわ〳〵して丹前の兵古帶を締めなほして出て行つた。

かづ子はそれをぢいつと見送つてゐたが、またも疊の上に上體を投出して、青い疊の冷い感じを頬に受けながら泣き暮れた。そして何回か讀んだ昨日の廣川の手紙を更に讀んで考へた。それから彼女もぶらりと外へ出て行つたが、一時間ほど過ぎると、青ざめた顔をし、打ち萎れて、力なげに歸つて來た。そして女中を呼んで、布團を敷いてもらつて、額まで搔卷を被つて寢てしまつた。女中が晝飯を持つて來たのを、そのまゝにして、猶ほ三時間も眠つた。誰かゞ廊下をぱた〳〵と駈ける音に目をさまして、自分が長く眠つてゐたことに氣がついて驚いて起きた。湯に入つて來てから、椽の柱にもたれて、空を見上げながら何事かを考へてゐた。

やがて村井は醉つて歸つて來た。かづ子が射るやうな目をして自分を見てゐるので、彼れはまぶしさうに横を向いた。そして、

『おい、私はこれから歸る、また直ぐ來る、適當な家を見付けて……』と言つて、トランクの前に腰を落した。

彼女はその言葉には應じもせず、

『もし、あなた、どちらへ行つてゐらつしたんですの』と詰るやうに問ふた。

村井はちらつと女の方を顧みたが、直ぐにまたトランクの中に首を突つ込むやうにして、

『須磨樓の前を通つたら、懇意な得意先の先生に引つ張り込まれてしまつて……』と言つた。

『さう、得意先に藝者をお持ちなんですの』と突つ込むやうに女は言つた。

村井はしたゝか參つたと見えて、暫く言葉がなかつたが、やがて盛り返して、

『それはあるさ、お前、それがどうしたつてのだ』と逆襲した。

すると天候の急變するやうに、彼女の顏は曇つたが、忽ちに雨となつて、兩袖で顏を覆ひ、

『私はあなたに欺かれました』と言ひ放つた。

『色魔かな、はゝゝゝ』と村井は少しも響きの無い聲で笑つて。立ち上つて彼女の傍に寄り添ひ、

『かづ子さん、なに私があなたを欺くものですか、この通りに職務を抛つて來てゐるぢやありませんか、いざとなれば名譽も社會的の地位も失つて、甘んじて制裁を受けるとまで覺悟してゐるんぢやありませんか、これが遊びごとや不眞面目な態度で出來るもんぢやございませんよ。さあ機嫌をなほして、……また二三日は別れてゐねばならんのぢやありませんか、さあ』と女の肩

に手を載せてなだめた。

『だつて……』と言つた女の聲と體とは男を許すやうな樣子が見えた。

男はそれに突け込んで、兩手を廻して女を抱き上げて、

『いまの藝者のお得意のことですか、あれは何んでもないんですよ、あれは神戸の藝者でしてね商賣上から折々宴會に行くので、それで顏見知りになつてゐるんですがね、散歩に出た私の姿を見付けて、私を呼び込んだのですよ、二階から金切り聲で呼ばれてはかなへませんからね、仕方なく入つて行つて、暫く相手になつてやつてゐたんですよ』と言つて、唇を出したのを、女は靜に避けて

『それにしては、いゝえ、私にはちやんとわかりました』と悲しさうに言つた。

『なにがわかつて？　え、なにが……』と村井は女の體を搖つた。

そこへ女中が近づいて來る足音がするので、二人はつと離れた。女中は、

『自働車が參りましてございます』と告げた。

彼女は不安さうな目をして男を見て、

『あなた、ほんたうに是れから行らつしやるの』と彼れを放しともなげに言つた。